

北埋調報278

木古内町

# 木古内2遺跡

—北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成22年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

木古内町

# 木古内2遺跡

—北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成22年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





木古内2遺跡遠景（薬師山より）



木古内2遺跡北側地区発掘（南一）





竪穴住居跡出土の復元土器



竪穴住居跡覆土出土の礫

## 例 言

- 1 本書は、北海道新幹線建設事業に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成 22 年度に木古内町で実施した、木古内2遺跡の埋蔵文化財発掘調査についての報告書である。
- 2 調査・整理は第2調査部第3調査課が担当した。
- 3 本書の執筆は、遺構調査担当者がそれぞれの遺構の事実記載をおこない、村田大・新家 水奈・阿部明義が担当し、文責は各項目文末に示した。また、編集は新家がおこなった。
- 4 現場の写真は新家、阿部が撮影し、遺物写真の撮影および写真図版作成は第1調査部第1調査課吉田裕史洋がおこなった。
- 5 V章の自然科学的分析は、炭化木片樹種同定を株式会社バレオ・ラボ、放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 6 調査の実施にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご協力いただいたことをここに記し、感謝申し上げます。

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局  
木古内町教育委員会  
知内町教育委員会 高橋豊彦  
北斗市教育委員会 森靖裕  
松前町教育委員会 前田正憲、平山禾都  
市立函館博物館 佐藤智雄、大矢京右  
七飯町教育委員会 山田央  
洞爺湖町教育委員会 角田隆志、三谷智広  
北海道考古学研究所 横山英介  
北海道考古学会 大沼忠春  
敬称略

## 記号等の説明

### 1 地区名称について

平成22年度の本古内2遺跡の調査区は、ほぼ中央に走る町道により南北2つの地区に分かれている。便宜上、北側の調査区を「北側地区」、南側の調査区を「南側地区」と呼称して調査をおこなった。

### 2 遺構名について

遺構の名称表現には以下のアルファベットを使用した。

住居跡→H      住居にともなう柱穴→HP      住居に伴う焼土→HF  
住居にともなう炭化物集中→HC      剥片集中→FC

また、アルファベットと遺構番号との間にはハイフン「-」をいれ、発掘区・グリッド名の表記と区別した。本文中では全角で表記しているが、VI章では遺構名を多用するため、半角で表記した。

### 3 遺構図等について

遺構平面図・断面図の縮尺はH-1が50分の1、その他の遺構は40分の1である。断面にはそのつど縮尺を表すスケールを付した。

平面図の天方向は、N-50° - Eである。平面図にはそのつど北を示す方位印を付した。

遺構平面図中の「+」は、4m方格の大グリッドラインの交点で、傍らのアルファベット・アラビア数字が発掘区(グリッド)名である。

遺構平面図内の「・」付き小アラビア数字は、その地点の標高(m)を表す。

遺構図中の破線 - - - - - は、輪郭線がオーバーハングや他の遺構の下に隠れていることを表し、一点鎖線 - · - · - · - · - は調査区の境界線、攪乱、風倒木等の範囲を示す。

遺構図中の遺物分布を示すシンボルマークは、土器を○●、剥片・剥片石器を△▲、礫・礫石器を□■、炭化物を\*で示した。白抜きは床面や坑底面から出土したことを示す。

### 4 遺物図について

遺物図の縮尺は、復元土器・拓影土器片・礫石器・軽石製品は3分の1、土製品、剥片石器は2分の1である。図には全て縮尺のスケールを付した。

また、個々の遺物図右下のゴチックアラビア数字は掲載番号であり、本文中のアラビア数字と対応している。

遺物の計測値は、「長さ×幅×厚さ、重さ」を記した。欠損しているものは現存長の数値を(丸括弧)でくくった。

石器の実測図中で、たたき痕は  $\nabla$ 、すり痕は  $\left| \text{---} \right|$  で表した。

### 5 写真図版について

写真図版の縮尺は統一していない。遺物写真中の遺物右下のゴチックアラビア数字は、遺物図の掲載番号を示す。  
(新家・阿部)

# 目次

口絵

例言

記号等の説明

目次

挿図目次・表目次・写真図版目次

I 調査の概要		III 遺構とその遺物	
1 調査要項	1	1 概要	19
2 調査にしのたる経緯	1	2 竪穴住居跡	22
3 調査結果の概要	1	3 剥片集中	28
4 遺跡の位置と環境	2	IV 包含層出土の遺物	
5 木古内町の歴史	2	1 概要	57
6 周辺の遺跡	6	2 出土遺物	58
II 調査の方法		V 自然科学的分析	
1 調査期間	11	1 木古内町木古内2遺跡出土	
2 調査範囲	11	炭化材の樹種同定	63
3 掘削りなど	12	2 木古内町木古内2遺跡における	
4 測量と記録	12	放射性炭素年代(AMS測定)	66
5 資料整理	13	VI まとめ	
6 記録類と遺物の取納・保管	14	1 遺構	71
7 遺物の分類	14	2 遺物	72
8 土層の区分	15		

引用・参考文献

モノクロ図版

カラー図版

報告書抄録

## 挿図目次

I 調査の概要			
図 I-1 遺跡の位置と周辺の地形	3	図 III-12 H-2(2)	42
図 I-2 調査範囲	4	図 III-13 H-3	43
図 I-3 北海道新幹線路線概要図	4	図 III-14 H-3・H-4 出土の遺物	44
図 I-4 周辺の遺跡	7	図 III-15 H-4	45
		図 III-16 H-5 出土の土器	46
II 調査の方法		図 III-17 H-5(1)	47
図 II-1 発掘区の設定	11	図 III-18 H-5(2)	49
図 II-2 基本土層模式図	17	図 III-19 H-5 出土の石器	51
		図 III-20 H-6、FC-1	52
III 遺構とその遺物		IV 包含層出土の遺物	
図 III-1 遺構位置図	19	図 N-1 発掘区別遺物分布図	59
図 III-2 遺構位置図(北側地区)	20	図 N-2 包含層出土の土器	60
図 III-3 H-1(1)	31	図 N-3 包含層出土の石器	61
図 III-4 H-1(2)	33	V 自然科学的分析	
図 III-5 H-1(3)	35	図 V-1 暦年較正年代グラフ	69
図 III-6 H-1 出土の土器(1)	36		
図 III-7 H-1 出土の土器(2)	37	W まとめ	
図 III-8 H-1 出土の石器(1)	38	図 VI-1 II群b類・N群a類出土土器集成	74
図 III-9 H-1 出土の石器(2)	39	図 VI-2 H-1 出土の礫関連データ	75
図 III-10 H-1 出土の石器(3)	40		
図 III-11 H-2(1)	41		

## 表目次

I 調査の概要		IV 包含層出土の遺物	
表 I-1 検出遺構数一覧	2	表 N-1 包含層出土層位別遺物点数一覧	57
表 I-2 出土遺物点数一覧	2	表 N-2 包含層出土掲載土器一覧	62
表 I-3 周辺の遺跡一覧	9	表 N-3 包含層出土掲載石器一覧	62
III 遺構とその遺物		V 自然科学的分析	
表 III-1 検出遺構一覧	21	表 V-1 木古内2遺跡出土炭化材樹種同定	63
表 III-2 遺構出土遺物点数一覧	29	表 V-2 木古内2遺跡放射性炭素年代 測定試料一覧	68
表 III-3 遺構出土掲載土器一覧(1)	53	表 V-3 木古内2遺跡放射性炭素 年代測定結果(1)	68
表 III-4 遺構出土掲載土器一覧(2)	54	表 V-4 木古内2遺跡放射性炭素 年代測定結果(2)	69
表 III-5 遺構出土掲載石器一覧(1)	55		
表 III-6 遺構出土掲載石器一覧(2)	56		
表 III-7 フローテーション結果	56		

## 写真図版目次

### 口絵1

- 木古内2遺跡遠景(朝顔山より)
- 木古内2遺跡北側地区完掘(南→)

### 口絵2

- 竪穴住居跡出土の復元土器
- 竪穴住居跡覆土出土の礎

### V章

- 図版V-1 木古内2遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真…………… 65

### モノクロ図版1

- 北側地区表土除去後11層上面検出(西→)
- 南側地区表土除去後11層上面検出(南→)

### モノクロ図版2

- 南側地区調査状況(西→)
- 北側地区調査状況(西→)
- H-1 検出(西→)

### モノクロ図版3

- H-1 調査状況(北→)
- H-1 覆土4層遺物出土状況(西→)
- H-1 覆土5層遺物出土状況(北西→)
- H-1 東西セクション(北→)

### モノクロ図版4

- H-1 床面付近遺物出土状況(西→)
- H-1HP-1 セクション(東→)
- H-1HP-3 セクション(北東→)
- H-1HP-7 セクション(南西→)
- H-1HP-10 砂ピット(南東→)

### モノクロ図版5

- H-1HP-12 セクション(東→)
- H-1HP-13 セクション(南→)
- H-1HP-16 セクション(東→)
- H-1HP-17 セクション(南東→)
- H-1HP-18 セクション(東→)
- H-2 東西セクション(南→)

### モノクロ図版6

- H-2 北側セクション(南東→)
- H-2 南側セクション(東→)
- H-2床面検出(南→)
- H-2 周溝セクション(南西→)
- H-2 周溝セクション(北→)
- H-2 周溝1完掘(南西→)
- H-2 周溝完掘(北→)

### モノクロ図版7

- H-3 調査状況(東→)
- H-3 床面検出(南東→)
- H-3 遺物出土状況(北→)
- H-3 床面中央褐色土セクション(南東→)
- H-3HP-1 セクション(南東→)
- H-3HP-2 セクション(南東→)
- H-3HP-3 セクション(南東→)
- H-3HP-4 セクション(東→)

### モノクロ図版8

- H-4 調査状況(西→)
- H-4 床面検出(西→)
- H-4HP-1 セクション(北西→)
- H-4 完掘(東→)
- H-5 調査状況(南→)

モノクロ図版9

- H-5 南北セクション(西→)
- H-5 東西セクション西半分(北東→)
- H-5 床面発出(南→)

モノクロ図版10

- H-5 周溝発出(北西→)
- H-5 周溝セクション(東→)
- H-5 周溝完掘(東→)
- H-5HP-5 セクション(南→)
- H-5HP-6 セクション(南→)
- H-5HP-7 セクション(南→)
- H-5HP-11 セクション(南東→)

モノクロ図版11

- H-6 セクション(南→)
- H-6 完掘(南→)
- FC-1 発出(東→)

モノクロ図版12

- 南側地区完掘(南→)
- 北側地区完掘(東→)

モノクロ図版13

- H-1出土の土器(1)
- H-1出土の復元土器(図III-6-15)
- H-1出土の復元土器(図III-6-19)

モノクロ図版14

- H-1出土の土器(2)
- H-1出土の復元土器(図III-7-31)

モノクロ図版15

- H-1出土の石器(1)

モノクロ図版16

- H-1出土の石器(2)

モノクロ図版17

- H-2出土の遺物
- H-3出土の復元土器(図III-14-1)
- H-3出土の石器
- H-4出土の遺物

モノクロ図版18

- H-5出土の遺物

モノクロ図版19

- H-6出土の土器
- FC-1出土の石器
- 包含層出土の土器

モノクロ図版20

- 包含層出土の石器

カラー図版1

- 基本土層(東→)
- H-1 南北セクション南半分(東→)

カラー図版2

- H-1 床面付近遺物出土状況(西→)
- H-1HF-1 セクション(南→)
- H-1HF-2 セクション(西→)
- H-1HC-3 炭化材出土状況(西→)
- H-1HP-10 砂ピットセクション(南東→)

カラー図版3

- H-1HP-20 砂ピット(東→)
- H-4HF-1 発出(西→)
- H-5HF-1 セクション(北→)
- H-5HP-13 砂ピットセクション(南→)
- FC-1 発出(東→)
- H-5HP-13 砂ピット(南東→)

カラー図版4

- H-1出土の礫(石材別)

# I 調査の概要

## 1 調査要項

事業名	北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査		
事業委託者	独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局		
事業受託者	財団法人北海道埋蔵文化財センター		
遺跡名	木古内2遺跡(北海道教育委員会登録番号:B-05-28)		
所在地	上磯郡木古内町字本町456番9ほか		
調査期間	平成22年4月1日～平成23年3月31日(発掘期間5月7日～7月7日)		
調査面積	950㎡		
調査体制	第2調査部 部長 西田 茂 第2調査部第3調査課 課長 村田 大 主査 新家 水奈(発掘担当者) 主査 阿部 明義		

## 2 調査にいたる経緯

北海道新幹線は、昭和45(1970)年5月に成立した全国新幹線鉄道整備法に基づき、昭和47年6月に青森～札幌間(約300km)を含む4線の基本計画が決定した(図I-3)。

昭和58(1983)年、津軽海峡線建設に伴い、日本鉄道建設公団(当時)から北海道教育委員会(以下道教委)に埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。協議を受けた道教委は、昭和58年5月に所在確認調査を、昭和58年11月に範囲確認調査を6,900㎡にわたって実施している。

平成10(1998)年に北海道新幹線木古内駅の設置が決定、平成17(2005)年4月27日新青森～新函館の工事認可書が国土交通省から鉄道建設・運輸施設整備支援機構に交付され、同年工事が着工された。

北海道新幹線は、木古内町の行政区域内を約15kmにわたって通過する予定である。新幹線建設計画の具体化に伴い、建設工事に関わる木古内町内の遺跡発掘調査は平成21(2009)年度から開始されている(財団法人北海道埋蔵文化財センターによる)。

木古内2遺跡の調査範囲に関しては、平成21年北海道新幹線にかかる中学校通りの住宅移転が完了。同年11月に道教委文化・スポーツ課によって、試掘調査が実施され、発掘を必要とする面積980㎡が提示された。当該地域における路線の変更は不可能なことから、当センターが発掘調査を実施することとなった。

また平成22(2010)年8月、道教委により北東側に隣接する低位部の試掘調査が実施された。その結果、遺物包含層が確認され、330㎡の発掘調査が必要となった。これについては、平成23年度以降に調査を実施する予定である。

(村田)

## 3 調査結果の概要

平成22年の調査で木古内2遺跡から検出された遺構は、縄文時代前期後半の大型住居跡3軒(H-1・2・5)、同じく縄文時代前期後半の小型住居跡3軒(H-3・4・6)、フレイク集中1カ所(FC-1)である(表I-1)。遺構は調査区北側地区の段丘縁辺部に集中している。最も大きい住居跡H-1は、平面形が楕円形で、径約11×9m、深さは約1.2mであった。床からは直径30～40cm、深さ60～80cmの柱穴が11本み



つかった。H-2・H-5では、途切れ途切れではあるが床面から周溝が検出された。また、H-1・H-5の床の中央部付近では、砂を埋めた小土坑がみついている。大型住居跡の覆土の上層部や周辺の包含層からは、縄文時代前期の遺物のほか後期初頭の遺物も出土している。一方、小型住居跡は、直径約3m、深さ30～40cmの円形で、切り合いの状況から、大型の住居跡よりやや古いと思われる。剥片集中は、H-1の南東縁と町道の間の包含層から検出された。時期は不明である。なお、当初提示された発掘調査面積は980㎡であったが、現地で求積した結果、最終的な調査面積は950㎡に変更となった。

遺跡全体の出土遺物総点数は約9千点であるが(表I-2)、このうち約3千点は水洗選別により検出された微細剥片(チップ)である。土器は縄文時代前期後半の円筒土器下層c式およびd式が最も多く、ついで縄文時代後期初頭の天祐寺式等が出土している。石器は石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、扁平打製石器などが出土している。また、手のひらにおさまる大きさの円礫が住居跡の覆土中から多数出土している。このほか、土製円盤や焼成粘土塊、軽石製品なども出ている。出土遺物の大半は堅穴住居跡の覆土中からのもので、堅穴住居跡の時期等の特徴を反映するものである。

表I-1 検出遺構数一覧

住居跡(H)	剥片集中(FC)
6	1

表I-2 出土遺物点数一覧

	土器	石器	計
遺構	2,438	5,496	7,934
包含層	711	645	1,356
総計	3,149	6,141	9,290

#### 4 遺跡の位置と環境

木古内町は、北海道の南西部、渡島半島の南端、函館市から西方約42kmにある。函館市と松前町のほぼ中間に位置する。北東側は北斗市、北西側を厚沢部町、西側を上ノ国町、南側を知内町と町界を接している。南部は津軽海峡に面し、晴れた日には青森県下北、津軽両半島を眺望できる。

町の地形は、細長く幅の狭い平坦地が東西15kmの海岸線に沿って発達し、海岸より数百メートル内陸には、海岸段丘と、北側の急峻な山間部から津軽海峡へと注ぐ大小河川により形成された河岸段丘が帯状に続く。また町域全体の9割近くが海拔100～500mの山岳・丘陵地帯である。山林の多くはスギの植林地であり、畑地・牧草地として利用されている場所もある。市街中心部は、町南部の木古内川、佐女川両河口付近の比較的大きな平坦部に形成されている。

木古内2遺跡は木古内町市街地北部に位置し、JR江差線木古内駅から北東に700mほど離れた標高10m前後の台地上にある(図I-1・2)。現海岸線から直線距離で400mほどである。調査区は遺跡背後(西側)にある薬師山(標高72m)麓に広がる住宅地の一部であり、調査は住宅の移転を待っておこなわれた。薬師山山頂からは木古内町市街、津軽海峡とともに、木古内2遺跡が真下に臨める。また、遺跡はJR江差線の北西側を平行に走る町道に面しており、町道沿いに北東に300mほど行くと木古内中学校が、町道を挟んで中学校の向かい側に木古内遺跡がある。

#### 5 木古内町の歴史

木古内町の海岸に沿う帯状の段丘上には数多くの縄文時代の遺跡が存在し(図I-4)、木古内周辺には古くから人が定住、往来していたことがわかる。昭和58(1983)年、隣町の知内町湯の里4遺跡で後期旧石器時代の日本最古の墓が発見された。その後昭和60(1985)年、木古内町の新道4遺跡の発掘調査でも約1万4千年前と考えられる旧石器時代の細石刃、石刃、石核等を含む石器集中が出土した。これにより木古内周辺に人々が住み着いた年代は縄文時代よりもはるかにかさかのぼることが証明され、以来現在まで人々の営みが刻み続けられている。



図 I-1 遺跡の位置と周辺の地形

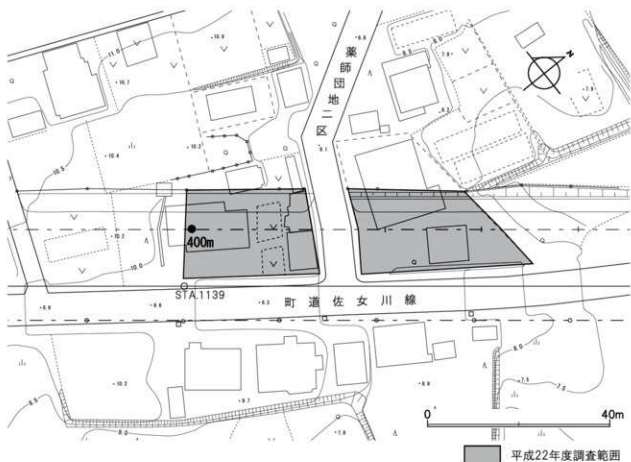


図 I-2 調査範囲



図 I-3 北海道新幹線 路線概要図

「きこない」といわれるようになったのは、寛永年間(1624～1644年)に松前藩が領内を巡行し、全島の地図を作らせたときに付けられたのが始めとされている。正保元(1644)年、正保御国絵図に「キク内」として和入地内に記されている。これは、アイヌ語の「リコナイ」(高く昇る源)、または「リロナイ」(潮の差し入る川)から転化したものといわれる。

また江戸時代初期の造像僧円空が寛文年間(1661～1673年)に北海道に渡り、道内各地に「円空仏」を残したことは有名であるが、このうち3体の仏像が木古内町の佐女川神社、西野神社、古泉神社に御神体としてまつられている。北海道で制作された円空仏は円空初期の頃の仏像のため特に傑作とされ、その歴史的・文化財的価値は高い。

近世末期戊辰戦争(慶応4/明治元～明治2(1868～1869)年)の際、木古内に旧幕府軍による砲台や壕が数か所築かれ、新政府軍との激戦地となった経緯や、幕府海軍創成期の主力艦として安政4(1857)年オランダで建造され配備された成臨丸が、戊辰戦争後北海道への物資運搬船となり、明治4(1871)年木古内のサラキ岬沖で座礁したことは有名である。

近代では、19世紀中頃から本州の移民による開墾がおこなわれている。明治12(1879)年に木古内(きこない)・札蒨(さつかり)・泉沢(いずみさわ)の三村をもって戸長制度が敷かれ役場が設置された。明治18(1885)年に釜谷(かまや)を木古内村に編入し、昭和17(1942)年に町制が施行されている。

昭和5(1930)年の国鉄木古内駅開業前後、当時の木古内村には製材所や食品工場などの多くの産業施設が設立されるようになり、人口が増えるにに合わせて、学校、警察署、保健所、郵便局などの公共施設、電気、上水道、電話などのインフラも整備されていった。駅周辺には鉄道関連施設が建設され、鉄道事業とその周辺の産業に携わる多くの人々が往来、定住した。町内の人口が最も増えた昭和30年代には市街地に隣接する高台を中心に宅地化が進められた。昭和から現在に至るまで新たに宅地化が進むこれらの地域はJR江差線に沿った標高10m前後の段丘上に位置し、かつて縄文時代の人々が好んだ定住環境と重なるところである。木古内2遺跡もこのような現代の宅地の中に所在しており、遺跡背後の薬師山の麓まで新興住宅地が続いている状況である。

木古内町は先にも述べたように、函館市と松前町のほぼ中間に位置するという地理的特徴から、特に近世以降は当時の箱館から松前方面あるいは江差方面を往来するルートの重要な分岐点となり、交通の要衝として栄えてきた。その地の利は、近代以降陸路の新たな交通手段としての鉄道が、木古内町を經由・起点として江差線、松前線、海峡線、そして北海道新幹線が次々に敷設されていることによっても証明されている。

JR江差線はかつて「上磯線」と呼称され、「上磯線」の前身は大正2(1913)年に開業した函館五稜郭と上磯間を結ぶ「上磯軽便線」と呼ばれていた鉄道路線である。昭和5(1930)年に国鉄木古内駅が新設され、上磯-木古内間まで延伸開業した。昭和10(1935)年には木古内から江差方面への延伸もすすみ、江差駅まで全通した翌年昭和11年に「江差線」に改称した。その後昭和62(1987)年の国鉄分割民営化にともない、北海道旅客鉄道(JR北海道)が路線を継承した。

「松前線」は木古内駅で江差線から分岐し、渡島福島駅を経由して松前町に至る全長50.8kmの鉄道路線であった。前身は昭和12(1937)年に開業した「福山線」である。「福山線」は、北海道鉄道敷設法(明治29(1896)年交付)の規定により、当時軍事需要物資であったマンガン鉱採掘のために敷設された。戦後延伸工事が再開され、昭和28(1953)年に渡島福山(現松前町)まで全通し、「松前線」に改称した。昭和62(1987)年に日本国有鉄道から北海道旅客鉄道に継承された翌年の昭和63(1988)年に全線廃止となり、バスに転換された。

海峡線は本州の青森県津軽郡外ヶ浜町の中小国駅と北海道上磯郡木古内町の木古内駅とを結ぶ北

北海道旅客鉄道の鉄道路線である。国鉄分割民営化直後の昭和 63(1988)年に、青森—函館間で運行していた青函連絡船に代わって、津軽海峡の海底下約 100m に掘削された青函トンネルを經由し本州と北海道をつなぐ新たな交通事業として開業した。当初より北海道新幹線との共用を見越して新幹線規格で建設されている。現在、東日本旅客鉄道の津軽線、北海道旅客鉄道の海峽線、江差線、函館本線のそれぞれの一部区間と合わせて「津軽海峽線」と呼称されている。この海峽線敷設工事にともない、昭和 59(1984)～昭和 61(1986)年にかけて木古内町内の建川遺跡、建川2遺跡、新道4遺跡の発掘調査が財団法人北海道埋蔵文化財センターにより実施されている。

北海道新幹線新青森—新函館(仮称)は平成 28(2016)年に開業予定であり、平成 10(1998)年木古内駅が北海道側の最初の停車駅として設置されることが決定した。北海道新幹線建設事業にともなう木古内町内の遺跡調査は平成 21(2009)年より開始された。平成 21(2009)年は蛇内2遺跡、大平遺跡、大平4遺跡、平成 22(2010)年は蛇内2遺跡、大平遺跡、大平4遺跡、木古内遺跡、木古内2遺跡の調査が財団法人北海道埋蔵文化財センターによりおこなわれた。北海道新幹線についての経緯は第 2 節を参照されたい。

## 6 周辺の遺跡

木古内町では、海と山岳地域の間接地帯の地形が帯状に分布している。この、東西に延びる長い海岸線に沿った海岸段丘上と、丘陵地帯から津軽海峡へと流れる大小の河川や沢等に挟まれた河岸段丘上に多くの遺跡が存在する。平成 22 年 4 月現在、北海道教育委員会に登録されている木古内町内の埋蔵文化財包蔵地数は、47 か所である(図 I-4、表 I-3)。このうち発掘調査がおこなわれた遺跡は 21 か所、報告書が刊行されているのは本書も含め 17 遺跡である。

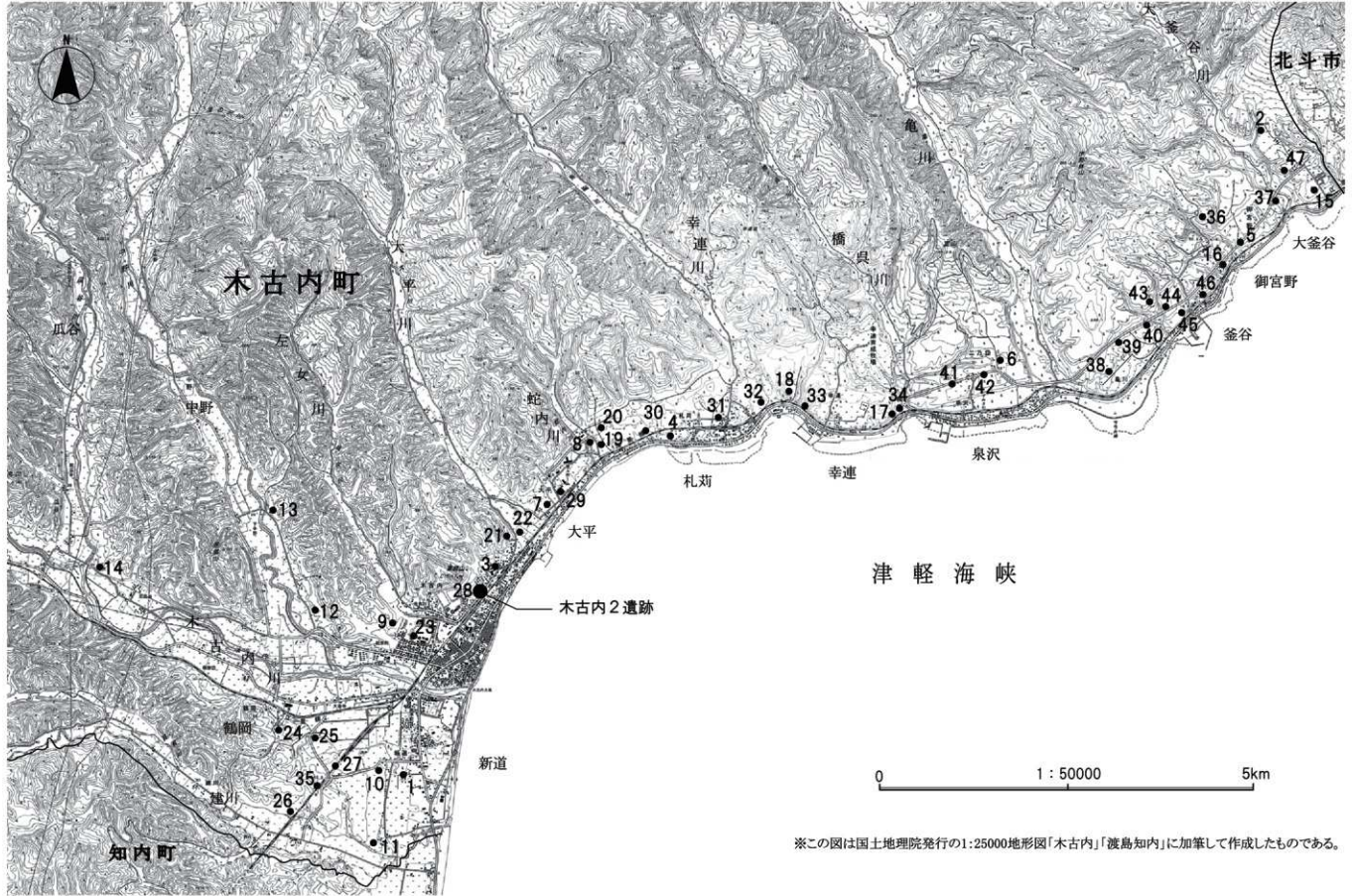
図 I-4 を見ると、中野 A 遺跡(登載番号 12)、中野 B 遺跡[13]、瓜谷遺跡[14]は、ほかの縄文時代の遺跡とは異なり、内陸に位置しているように見える。遺跡のそばを流れる木古内川・中野川は木古内町内で最も大きな河川であり、周辺は内陸部まで比較的平坦な地形が続いていることから、おそらく縄文時代の海岸線は現在よりもさらに内陸に迫っていたであろう。今の木古内市街地周辺の平野部分はかつて海の底に沈んでいたと推測され、これらの遺跡は当時入り江に近い段丘上に立地していたと思われる。

木古内2遺跡とほぼ同時期の縄文時代前期後半の大型竪穴住居集落跡がみつかっている町内の遺跡は、木古内遺跡[3]、釜谷遺跡[5]、大平遺跡[7]、蛇内遺跡[8]、新道2遺跡[11]、蛇内2遺跡[19]、鶴岡2遺跡[25]、新道4遺跡[27]、亀川3遺跡[40]、釜谷5遺跡[44]があげられる。とくに釜谷遺跡、釜谷5遺跡では住居床面の中央に砂ピットを有する竪穴住居跡が多くみつかっており、木古内2遺跡の竪穴住居跡の類例として興味深い。

また、木古内町ではこれまで町内の遺跡から擦文時代の土器の破片等は発見されていたが、住居跡などの遺構は未確認であった。平成 22 年度の調査により、大平遺跡、木古内遺跡の両遺跡で初めて擦文時代の竪穴住居跡が発見されている。

このほか、文献などにより「道南十二館」のうちの一つが字中野地区にあったと伝えられている。昭和 40(1965)年に北海道教育委員会と大場利夫らによって中野館の調査がおこなわれたとの記載が木古内町史(1982)にあるが、館の正確な所在地は不明である。

また、建川そばの国道付近に明治 40 年代に操業していたとされる煉瓦工場の跡地があり、昭和 50(1975)年に木古内町役場と北海道開拓記念館による発掘調査がおこなわれている(木古内町 1982)。調査の結果、煉瓦を焼いていたとされる登り窯が確認された。さらに当時わずかな期間ではあるが、煉瓦とともにこの場所で「木古内焼」とよばれる陶器も製造されていたことがわかった。(新家)



※この図は国土地理院発行の1:25000地形図「木古内」「渡島知内」に加筆して作成したものである。

図1-4 周辺の遺跡

表 I-3 周辺の遺跡一覧

包蔵地 登録番号 (9-5)	遺跡名	所在地 (木古内町)	種別	時代	立地	高さ (m)	調査本 (付内報告書については参考文献参照)	遺構
1	新道	新道103ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	8~10		
2	大釜谷	大釜谷59ほか	遺物包含地	縄文	河岸段丘	50		
3	木古内	木古内56ほか	集落跡	縄文・檜文・近世	海岸段丘	9~11	平成22年(財)北海道埋蔵文化財センター 昭和46~48年(町教委・釧路記念館) 昭和三十九年(財)北海道埋蔵文化財センター	堅穴住居跡、フラスコ状土坑、Tピット、土坑、盛土
4	札町	札町1741ほか	集落跡・墓域	縄文晩期・統縄文・近世	海岸段丘	10		堅穴住居跡、土坑、集石、焼土
5	釜谷	御宮野78ほか	集落跡	縄文早期、後期・檜文	海岸段丘	20	平成3~5年(町教委)	堅穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、盛土遺構、焼土、Tピット、石組壁
6	泉沢	二乃岱41ほか	遺物包含地	縄文	丘陵の沢沿い、緩斜面	40		
7	大平	大平63ほか	集落跡・盛土	縄文前中、晩期・檜文	海岸段丘	8~11	平成21~22年(財)北海道埋蔵文化財センター	堅穴住居跡、土坑、フラスコ状土坑、盛土遺構、Tピット、焼土、礫集石、割片集中
8	蛇内	大平60ほか	集落跡	縄文前~後期	蛇内川右岸河岸段丘	20	平成12年(町教委)	堅穴住居跡、壱穴跡、土坑、焼土
9	新栄町	木古内262	遺物包含地	縄文	河岸段丘	10~15		
10	新道3	新道1131ほか	集落跡	縄文中後期	河岸段丘	15~17	平成8年(町教委)	堅穴住居跡、土坑、焼土、Tピット
11	新道3	新道1111ほか	集落跡・貯場	縄文前中期	海岸段丘	8~17	平成10~14年(町教委)	堅穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、Tピット
12	中野A	中野1261ほか	遺物包含地	縄文	河岸段丘	15~20		
13	中野B	中野1791ほか	遺物包含地	縄文	河岸段丘	15~20		
14	瓜谷	瓜谷78ほか	遺物包含地	縄文	河岸段丘	20~25		
15	大釜谷2	大釜谷231ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	25		
16	釜谷2	釜谷1571ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	20		
17	橋鼻	橋鼻321ほか	遺物包含地	縄文・統縄文	海岸段丘	20		
18	幸運	幸運1741ほか	遺物包含地	縄文	河岸段丘	20		
19	蛇内2	札町50081ほか	集落跡	縄文早~後期	海岸段丘	8~12	平成21~22年(財)北海道埋蔵文化財センター	住居跡、フラスコ状土坑、土坑、焼土、集石、割片集中
20	蛇内3	大平2101ほか	遺物包含地	縄文	沢沿いの丘陵南麓	20		
21	大平2	木古内791ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	11~12		
22	大平3	大平30-1	遺物包含地	縄文	海岸段丘	5~6		
23	高校高台	木古内2071ほか	遺物包含地	縄文	河岸段丘	15		
24	鶴岡	鶴岡821ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	20		



包蔵地 登録番号 (B-5)	遺跡名	所在地 (木古内町)	種別	時代	立地	標高 (m)	調査 (発行報告書については参考文献参照)	遺構
25	鶴岡2	鶴岡501ほか	集落跡	縄文前～後期	海岸段丘・木古内川右岸	16～18	昭和63～平成元年(町教委)	堅穴住居跡、土坑、Tピット、盛土、焼土
26	建川	建川1381ほか	遺物包含地	縄文後期	河岸段丘	15～17	昭和59年(財北海道埋蔵文化財センター)	堅穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑
27	新道4	新道1131ほか	集落跡	期	海岸段丘	17～33	昭和59～61年(財北海道埋蔵文化財センター)	堅穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、焼土、Tピット、土器捨て場、盛土
28	木古内2	木町4351ほか	集落跡	縄文	海岸段丘	9	平成22年(財北海道埋蔵文化財センター)	堅穴住居跡、土坑、盛土、集石、割片集中
29	大平4	大平601ほか	集落跡	縄文早期、晩期	海岸段丘	7～13	平成21～22年(財北海道埋蔵文化財センター)	堅穴住居跡、土坑、盛土、集石、割片集中
30	札苜2	札苜4771ほか	遺物包含地		海岸段丘	10		
31	札苜3	札苜6611ほか	遺物包含地		海岸段丘	10		
32	札苜4	札苜2521ほか	遺物包含地		海岸段丘	10		
33	幸連2	幸連1751ほか	遺物包含地		海岸段丘	10～20		
34	橋島2	橋島231ほか	遺物包含地		海岸段丘	5		
35	建川2	建川391ほか	遺物包含地	縄文後期	建川支流の湧水点付近	20	昭和60～61年(財北海道埋蔵文化財センター)	土坑、小土坑
36	釜谷3	釜谷2601ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	50～60		
37	釜谷4	釜谷381ほか	遺物包含地	旧石器・縄文前期	大釜谷川右岸段丘上	20～30	平成2年(町教委)	溝状遺構、焼土
38	亀川	亀川12131ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	20～40		
39	亀川2	亀川12141ほか	集落跡	縄文後晩期	海岸段丘	27～30	平成7年(町教委)	堅穴住居跡、土坑、焼土
40	亀川3	亀川12131ほか	集落跡	縄文前、後期	河岸段丘	20～30	平成7年(町教委)	堅穴住居跡、壱穴跡、土坑、焼土
41	泉沢2	泉沢111ほか	集落跡	縄文時代早～晩期・ 経縄文・檜文	種島川に注ぐ小支流の左 岸台地上	5～37	平成10～13年(町教委)	堅穴住居跡、土坑、Tピット、石組炉、集石遺構、広場
42	泉沢3	二乃岱41ほか	遺物包含地	縄文後期	亀川右岸段丘上	20～25	平成8年(町教委)	田所遺、焼土
43	亀川4	亀川12131ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	10～40		
44	釜谷5	御宮野2141ほか	集落跡	縄文前期	河岸段丘	20～30	平成5年(町教委)	堅穴住居跡、壱穴跡、土坑、石組炉、焼土、砂ピット
45	釜谷6	釜谷1981ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	10～20		
46	釜谷7	釜谷1791ほか	遺物包含地	縄文	海岸段丘	20～30		
47	大釜谷3	大釜谷411ほか	集落跡、墓域	縄文前～晩期	大釜谷川河口左岸段丘上	15～40	平成13年(町教委)	堅穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、Tピット、焼土、石組炉



## II 調査の方法

### 1 調査期間

平成 22 年 4 月 1 日 ～ 平成 23 年 3 月 31 日(発掘期間 5 月 7 日～7 月 7 日)

4 月 1 日 ～ 5 月 19 日 : 現場準備・開所式

5 月 20 日 : 黒色土層調査・遺構調査開始

7 月 7 日 : 調査終了

11 月 1 日 : 整理作業開始、出土遺物の破片接合・復元、実測、墨入れ、  
遺構素図作成、図版制作、写真撮影、写真整理等

### 2 調査範囲

#### (1) 発掘区の設定

現地調査の基本図は、独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部北海道新幹線建設局作成の「用地幅図 1,000 分の 1」を使用した。

発掘区(グリッド)は、新幹線本線のセンターライン上の STA.1138 と STA.1139 を結んだ線を基軸の K ラインとし、STA.1138 を K1 と呼称した。基軸から 4m ごとに平行する線をアルファベットで表記し、これに直交する線は 4m ごとにアラビア数字で表記した。これらの交点に杭を打設し、4m×4m 方眼に区画した西側の杭を個々のグリッドの呼称とした。呼称はアルファベットと数字の組合わせによった(図 II-1)。

#### (2) 座標値

基準杭は H27 と H41 の 2 本である。平面直角座標系第 XI 系における STA.1138(K1) と STA.1139(K26)、および 2 本の基準杭の世界測地系 X・Y 座標値、緯度、経度は以下のとおりである。

**STA.1138(K 1)** X = -257,492.063 Y = 15,631.986

**STA.1139(K 26)** X = -257,415.290 Y = 15,696.062

**H 27** X = -257,404.530 Y = 15,689.412

**H 41** X = -257,361.537 Y = 15,725.295

水準測量は北海道上磯郡木古内町字木古内 115-12 番地に所在する「3級基準点 No.9」(平成 17 年設置、H=7.838m)を用い、各測量に使用した。

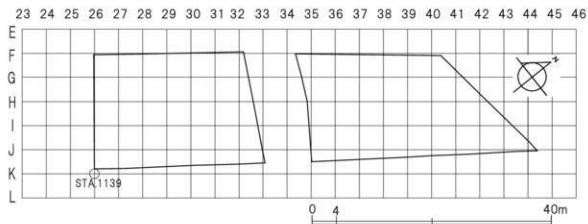


図 II-1 発掘区の設定

### 3 掘削など

#### (1) 掘削・調査

調査区は住宅地であったため、住宅移転後、重機により敷き砂利や客土、住宅基礎等のコンクリート材、ブロック塀、住宅建築の際の攪乱穴等の除去作業をおこなった。

人力による調査は主に移植ゴテ、ねじり鎌を使用した。遺構・遺物の検出状況に応じて、竹筥や竹串を使用して遺構・遺物を傷つけないように配慮して掘削した。精査・清掃の際には炉箒、ブラシ等を併用した。移植ゴテで掘ることが困難な場所や、遺構・遺物のみられない範囲、攪乱等ではスコップ等を併用した。

排土場に至る道や調査区に隣接する歩道・車道は、日に数回清掃をおこない、排土の拡散防止に努めた。

#### (2) 埋め戻し

調査終了後の同年9月、調査によって搬出された排土を重機で全て調査区に戻し、調査区全体の埋め戻しをおこなった。

### 4 測量と記録

#### (1) 測量・図化

委託設置した基準杭および4m×4mの方眼杭を、地形および遺構の平面測量の基準とした。基準杭にはそれぞれの杭に打たれた釘の標高を記入し、この標高を水準測量の基準とした。水準測量にはオートレベルと1mm目盛アルミ製スタッフを用いて基準杭の標高と測量対象の比高を直接観測した。平面測量は測量杭を基準とした手測りによった。

遺構・遺物の出土状況等の実測図はB3版セクションフィルムに、基本的に1/20の縮尺で記録した。

#### (2) 現場での撮影

##### a 撮影方法

発掘現場での写真撮影には6×7サイズカメラを使用し、デジタルカメラで補助記録をおこなった。撮影対象は遺跡全体、遺構・遺物の検出状況、調査状況などである。記録保存のために絞りを変えて同一カットを複数コマ撮影して1セットとした。撮影の際にはブレやボケを防ぐために三脚・レリーズを使用した。

##### b 撮影機材

撮影機材はMamiya RZ67PRO II、フィルムはKODAK 100TMX、フジ RDPIII 120を使用した。必要に応じてFUJI インスタントモノクロフィルム FP-100Bを併用した。

##### c 撮影データ

現場での撮影データ(カット No.・撮影日・被写体名・被写体詳細または出土層位・撮影方向・フィルム種類・撮影者)は撮影者が野帳に記入し、記録とデジタルカメラによる撮影の統合をおこない写真台帳とした。

#### (3) 遺物等の取り上げ

##### a 出土遺物

包含層出土の遺物は、グリッドごと、出土層位ごとに取り上げた。遺構出土の遺物は、覆土中や、その遺構にともなわないと判断した遺物は遺構名および出土層位で取り上げた。床面や遺構にともなうと判断

した遺物については、X、Y 座標および標高を測量、記録し、個々に番号をつけ、一点一点個別に取り上げた。

#### b 土壌等

遺構(住居跡)から検出された炭化木片、炭化物、焼土粒のまとまり等は、範囲を記録して土壌ごと取り上げたものがある。これらについては乾燥後土壌水洗選別(フローテーション)作業をおこない、微細遺物を回収した。

## 5 資料整理

### (1) 図面等

遺構や遺物出土状況の原因は訂正などの作業をおこなった。訂正・変更があった場合はその箇所が確認できるように原因に書き込んでいる。その後、原因から方眼紙に鉛筆で素図を作成した。

### (2) 出土遺物

出土した遺物は、現場調査と並行して現地で水洗・乾燥・分類・遺物カードの添付・遺物台帳の作成、および注記作業をおこなった。注記は、以下のようにおこなった。

遺跡名	遺構名	層位	遺物番号	遺跡名	グリッド名	層位	遺物番号			
注記例	遺構	: キ2.	H-1.	フクド3.	6.	包含層	: キ2.	H37.	II.	3.

土器の分類は阿部が、石器の分類は阿部・新家がおこなった。土器片接合作業等の指示や、実測図の監修は阿部が担当した。遺物台帳のデータ化、および集計、報告書中の表原稿の作成は新家がおこなった。掲載土器および石器の室内撮影は吉田がおこなった。(新家)

### (3) 室内での遺物撮影と現像

#### a スタジオ撮影

撮影は光量の安定性、色再現の忠実性などの理由からストロボを用いておこなった。土器片や石器などは、トヨ無影撮影台を使用し、俯瞰撮影をおこなった。その際、撮影対象の傾きを、発泡スチロールや脱脂粘土などで調整した。

復元土器は撮影台に白い背景紙を垂らして立面撮りをおこなった。現場での撮影と同様、同条件(ライティング・露出など)で2コマ撮影し、1セットとした。

撮影機材は、ストロボには2400W/Sのジェネレータ(コメットCB2400)を2、3台、発光部(CL-25H)を2~4灯使用した。カメラはトヨビュー45GX、フィルムはコダックT-MAX100-120、コダックE100G120を使用した。

#### b 現像

カラーリバーサルフィルムの現像は外注している。モノクロフィルム現像は、自動現像機(ILFORD ILFOLAB FP40)での自家処理でおこなっている。

#### c 写真図版作成

カラーリバーサルフィルムをフィルムスキャナー(FLEXTIGHT×5)でスキャニングし、画像処理(Adobe Photoshop CS4)およびレイアウト(Adobe In Design CS4)したデジタルデータを入稿した。(吉田)

## 6 記録類と遺物の収納・保管

今回の報告に関する図面・写真等は北海道立埋蔵文化財センターにて保管される。図面等は全て A2 版図面ファイルに調査年度・北埋調報番号・遺跡名をつけて収納した。写真フィルムは 1 コマずつ番号を付し、フィルム種類ごとの連番でアルバムに収め、これに基づいて写真台帳を作成した。またアルバムは全ての調査・整理作業が終了した後、特別収蔵庫に保管される。

土器・石器等の出土遺物はコンテナに収納した。復元した土器個体は、大きさに見合うダンボールに梱包し、コンテナとともに遺跡名・調査年度・北埋調報番号等の情報を記したラベルを貼った。なお、出土遺物については本報告書刊行後、遺物台帳、収納台帳とともに木古内町教育委員会にて保管される。  
(新家)

## 7 遺物の分類

### (1) 土器等

土器の分類は当センターの分類に準拠している。縄文時代早期に属するものから順次ローマ数字で表記し、細分類をアルファベット(小文字)で表した。

I 群:縄文時代早期に属する土器(出土していない)

II 群:縄文時代前期に属する土器

a 類:前期前半。縄文尖底土器群。

b 類:前期後半。円筒土器下層 a~d 式。本遺跡の主体を成す。

III 群:縄文時代中期に属する土器

a 類:中期前半。円筒土器上層 a 式、b 式、サイベ沢 VII 式、見晴町式、森越式の土器群。

b 類:中期後半。榎林式、大安在 B 式、ノダツ II 式、煉瓦台式等の土器群。

IV 群:縄文時代後期に属する土器

a 類:後期前葉。天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂 3 式等の土器群。

b 類:後期中葉。手稲式、鯨潤式等の土器群。

c 類:後期後葉。堂林式、三ツ谷式、湯の里 3 式等の土器群。

V 群:縄文時代晩期に属する土器(出土していない)

VI 群:続縄文時代に属する土器(出土していない)

VII 群:擦文時代に属する土器(出土していない)

このほか土製円盤、焼成粘土塊などが出土している。

(阿部)

## (2) 石器等

分類に使用している器種の名称、および掲載順は以下のとおりである。

剥片石器群：石鏃、石槍・ナイフ類、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、石核、二次加工のある剥片(R剥片)、微細剥離のある剥片(U剥片)、剥片

礫石器群：石斧、たたき石、すり石、扁平打製石器、北海道式石冠、石鋸、軽石製品、礫・礫片

分類後の石器は遺構出土のものは遺構ごと、包含層出土のものは分類器種ごとに台帳を作成し、点数を集計した。

## (3) 自然遺物

遺構内から採取した自然遺物には、炭化木片がある。これらは現地で直接採取したものと、土壌水洗選別作業により抽出したサンプルがあり、堅穴住居跡から出土した炭化木片 10 点については放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に、6 点については樹種の同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。それぞれの分析結果はV章に掲載した。(新家)

## 8 土層の区分

### (1) 観察項目と記載順序

土層の観察にあたっては、『土壌調査ハンドブック』(日本ペドロロジー学会編 1985)の基準に従った。また、これを参考にして、必要な項目を設けた。本書に掲載した土層注記の主な観察項目と記載順序は以下のとおりである。

#### a 層位名

自然地層の層名はローマ数字、遺構覆土など人為的な層はアラビア数字で示した。

#### b 土色

マンセル表色系に準じた『新版標準土色帖』(小山・竹原 2004)による土色名、色相(色み)、明度(色の明暗)/彩度(色みの強さ、あざやかさ)を記号及び数値で表現する方法で示した。

#### c 土性区分

土性は細土(2mm未満)の鉱質部分を構成している、粗砂(粒径 2.0~0.2mm)、細砂(粒径 0.2~0.02mm)、シルト(粒径 0.02~0.002mm)、粘土(<0.002mm)の粒径組成のことであり、砂、シルト、粘土の重量%の違いにより区分する。それに加えて、採取した小土塊に可塑性が最大になるように適量の水を加え、親指と人差し指の間でこねて、砂の感触の程度、粘り具合、どの程度まで長くのばせるかなど、手触りと肉眼観察による「野外土性」で判定した。土性区分とその基準は以下のとおりである。本書では軽埴土・シルト質埴土・重埴土を合わせて埴土とした。

砂土：S(Sand)：ほとんど砂ばかりで粘り気を全く感じない。

砂埴土：SL(Sand Loam)：砂の感じとわずかに粘土を感じる。

粘土細工で棒にはできない。

埴土：L(Loam)：ある程度砂を感じ、粘り気もある。砂と粘土が同じくらいに感じる。

粘土細工で鉛筆ぐらいの太さができる。

埴埴土：CL(Clay Loam)：大部分粘土とわずかに砂を感じる。

粘土細工でマッチ棒ぐらいの太さができる。

埴土：C(Light Clay)：ほとんど砂を感じないで、よく粘る。  
粘土細工でコヨリのように細長くなる。

#### d 粘着性

土壌を親指と人差指の間で圧して引き離すときの付着する性質である。水分状態によって変化するが、当該土壌の粘着性が最も高まったときの状態によって次のように区分した。

- なし：土壌がほとんど指に付かない。
- 弱：一方の指に付着するが、他方の指には付着しない。指を離したときにびない。
- 中：両指頭に付着する。指を離すと多少糸状にのびる傾向を示す。
- 強：指頭に強く付着する。指を離したときに糸状にのびる。

#### e 堅密度・しまり

土層断面を親指で押したときのへこみの程度から次のように区分した。

- すこぶる鬆(しょう)：ほとんど抵抗なく指が貫入する。
- 鬆(しょう)・弱：指が土層内にたやすく深く入る。
- 軟・やや弱：はっきりと深い指の跡が容易にできる。
- 堅・やや強：強く押しても指の跡がわずかしか残らない。
- すこぶる堅・非常に強：強く押しても指の跡が残らない。
- 固結：移植コデによってやっと土壌を削れる。

#### f 層界

##### i 層界の明瞭度

次の層までの移り変わる距離(層界の幅)を基準として次のよう区分した。

- 明瞭：0～2cm
- 判然：2～5cm
- 漸変：5～12cm
- 散漫：>12cm

##### ii 層界の形状

層界の起伏の程度や形状により次のように区分した。

- 平坦：ほとんど平坦
- 波状：凹凸の深さが幅より小
- 不規則：凹凸の深さが幅より大
- 不連続：層界が不連続

#### g 礫・パミスの混入状況

土壌への礫やパミスの混入状況については、礫の大きさ・形状・風化度合い、パミスの名称・径(mm)、礫・パミスの混入面積割合(%)を記載した。

#### h 土層の混在状態

土層の混在状態の表記は、基本土層記号などを用いて次のように表した。

- A+B:AとBがほぼ同量混じる(Aが55%以上45%未満、Bが45%以上55%未満)
- A>B:AにBが少量混じる(Aが80%未満、Bが20%以上45%未満)
- A≫B:AにBが微量混じる(Aが80%以上、Bが20%未満)

## (2) 基本層序

基本土層模式図(図II-2)のとおりである。遺構特に竪穴住居跡内の土層堆積には、包含層に見られない火山灰層が入るなど特徴がある。テフラの名称等は『火山灰アトラス』(東京大学出版会 1992)に拠った。

I 層 : 表土・耕作土など

II 層 : 腐植土層

土性は埴壤土(CL)。色調は黒色(10YR1.7/1)。粘着性は中。堅密度は堅。III層との層界は判然。層界の起伏は平坦。層厚 20~30 cm。近世~縄文時代早期の遺構・遺物を包含する。地形・場所により、II層中に以下の2つの火山灰層が確認されることがある。

駒ヶ岳降下火山灰d(Ko-d)層 :

噴出年代は 1640 年。土性は砂土(S)。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)。粘着性なし。堅密度は固結。II層との層界は明瞭。層界の起伏は平坦・不連続。低地形のII層中にまれに堆積する。木古内2遺跡では、縄文時代前期後半の住居跡の覆土上部の自然堆積層として確認される。厚い所では層厚 10cm 強。

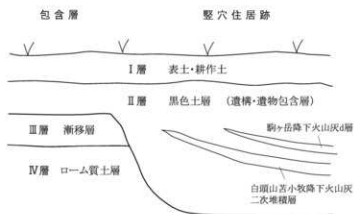
褐色土層 : 白頭山苦小牧降下火山灰(B-Tm・噴出年代 10 世紀)の2次堆積テフラと腐植土が混在する層。土性は壤土(L)。色調は黒褐色(10YR2/2)。粘着性中。堅密度は固結。II層との層界は判然。層界の起伏は平坦・不連続。層厚 10~15cm。

III 層 : 漸移層

土性は壤土(L)。色調は暗褐色(10YR3/3)。粘着性は強。堅密度は軟。IV層との層界は散漫。層界の起伏は不規則。層厚は 15~20cm。

IV 層 : ローム質土層

土性は壤土(L)。色調は褐色(10YR4/6)。粘着性は強。堅密度は固結。地山を成す。 (新家)



図II-2 基本土層模式図





### III 遺構とその遺物

#### 1 概要

木古内2遺跡で今年度検出された遺構は、大型の竪穴住居跡3軒、小型の竪穴住居跡3軒、剥片集中1か所である。時期は、出土した土器片や住居の特徴などからいずれも縄文時代前期後半と考えられる。また、小型住居と大型住居の間には若干の時間差があったと思われる、切り合いの様子から、小型住居の方が古いと判断した。

遺物は、縄文時代前期後半の土器片のほか、大型住居跡H-1の覆土上部からは縄文時代後期の土器片もまとも出土している。深く落ち込んだ凹みを後期の人々が捨て場として利用したのかも知れない。石器類は石鏃、石槍・ナイフ類、つまみ付きナイフ、スクレイパー、扁平打製石器、たたき石などが出土している。このほか、焼成粘土塊がH-1、2、3、5から、軽石製品がH-1から出土している。

なお、遺構の記述中、遺構の規模を示す計測値(単位m)は次の順で記した。

竪穴住居跡 遺構確認面の長径×短径/床面の長径×短径/深さ

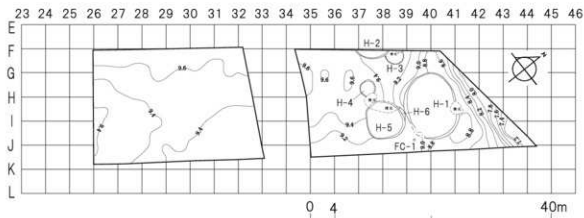
小土坑 遺構確認面の長径×短径/底面の長径×短径/深さ

焼土 遺構確認面の長径×短径/厚さ

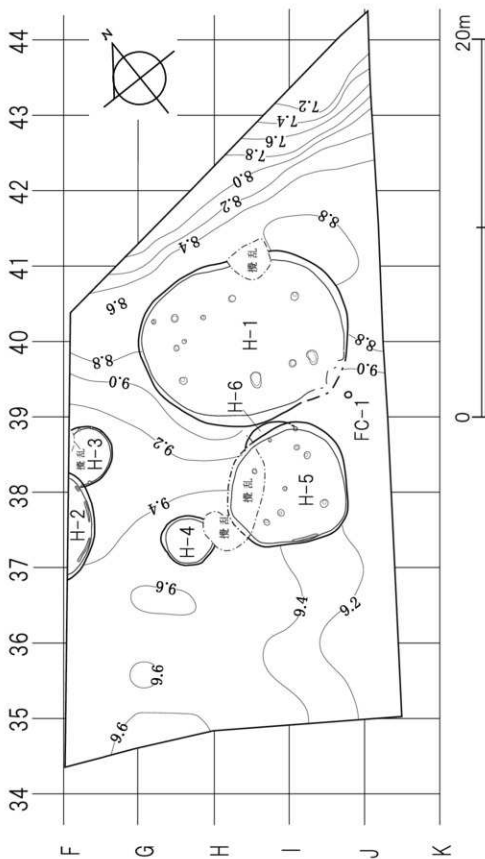
周溝 遺構確認面の長径×短径/底面の長径×短径/深さ

剥片集中 長径×短径(おおよその範囲)

炭化物集中 長径×短径(おおよその範囲)



図III-1 遺構位置図



図Ⅲ-2 遺構位置図（北部地区）

表Ⅲ-1 検出遺構一覧

遺構名	挿図No.	写真図版No.	調査区	規模(m)			時期	備考
				確認面の長径 ×短径	床・底面の長径 ×短径	深さ 厚さ		
H-1	Ⅲ-3~5	モノクロ2~5, カラー1~4	G~I39-40	11.8 × 9.00	10.7 × 8.12	1.28	放射性炭素年代測定、樹種同定	
HF-1	Ⅲ-3-5	カラー2	G39	0.29 × 0.20	—	0.06		
HF-2	Ⅲ-3-5	カラー2	I39	0.82 × 0.46	—	0.05		
HC-1	Ⅲ-3-5		I39,40	0.93 × 0.63	—	—		
HC-2	Ⅲ-3-5		I39	0.34 × 0.22	—	—		
HC-3	Ⅲ-3-5	カラー2	H,40	0.94 × 0.87	—	0.03		
HP-1	Ⅲ-3-5	モノクロ4	H40	0.35 × 0.32	0.31 × 0.31	0.94		
HP-2	Ⅲ-3-5		H40	0.27 × 0.23	0.23 × 0.22	0.44		
HP-3	Ⅲ-3-5	モノクロ4	G40	0.42 × 0.38	0.40 × 0.36	0.75		
HP-4	Ⅲ-3-5		G40	0.27 × 0.27	0.15 × 0.15	0.52		
HP-5	Ⅲ-3-5		H39	0.33 × 0.30	0.13 × 0.11	0.30		
HP-6	Ⅲ-3-5		G39	0.15 × 0.13	0.04 × 0.04	0.29		
HP-7	Ⅲ-3-5	モノクロ4	I39	0.41 × 0.37	0.22 × 0.22	0.57		
HP-8	Ⅲ-3-5		G39	0.32 × 0.28	0.16 × 0.16	0.59		
HP-9	Ⅲ-3-5		G40	0.30 × 0.28	0.15 × 0.13	0.25		
HP-10	Ⅲ-3-5	モノクロ4, カラー2	H39	0.24 × 0.22	0.10 × 0.10	0.15		
HP-11	Ⅲ-3-5		H40	0.33 × 0.28	0.10 × 0.10	0.21		
HP-12	Ⅲ-3-5	モノクロ5	H40	1.78 × 1.19	1.32 × 0.85	0.10		
HP-13	Ⅲ-3-5	モノクロ5	H39	0.59 × 0.47	0.22 × 0.19	0.70		
HP-14	Ⅲ-3-5		G39	0.29 × 0.25	0.14 × 0.13	0.30		
HP-15	Ⅲ-3-5		G39-40	0.14 × 0.22	0.21 × 0.17	0.55		
HP-16	Ⅲ-3-5	モノクロ5	I40	0.60 × 0.48	0.22 × 0.22	0.57		
HP-17	Ⅲ-3-5	モノクロ5	G39	0.48 × 0.43	0.23 × 0.20	0.62		
HP-18	Ⅲ-3-5	モノクロ5	I39	0.79 × 0.60	0.29 × 0.26	0.70		
HP-19	Ⅲ-3-5		H39-40	0.36 × 0.32	0.17 × 0.13	0.30		
HP-20	Ⅲ-3-5	カラー3	H40	0.20 × 0.17	0.11 × 0.10	0.08		
H-2	Ⅲ-11-12	モノクロ5-6	F36~38	(5.34) × (1.38)	(4.96) × (1.24)	1.36	縄文時代前期後半	
周溝1	Ⅲ-11-12	モノクロ6	F37	1.14 × 0.14	1.00 × 0.06	0.03		
周溝2	Ⅲ-11-12	モノクロ6	F37	1.42 × 0.14	1.30 × 0.08	0.04		
周溝3	Ⅲ-11-12		F38	0.32 × 0.12	0.26 × 0.06	0.05		
H-3	Ⅲ-13	モノクロ7	F38	(3.18) × (2.32)	(2.92) × (2.24)	0.40	放射性炭素年代測定	
HP-1	Ⅲ-13	モノクロ7	F38	0.16 × 0.16	0.08 × 0.08	0.20		
HP-2	Ⅲ-13	モノクロ7	F38	0.12 × 0.12	0.06 × 0.06	0.22		
HP-3	Ⅲ-13	モノクロ7	F38	0.12 × 0.10	0.05 × 0.04	0.14		
HP-4	Ⅲ-13	モノクロ7	F38	0.20 × 0.16	0.12 × 0.10	0.16		
H-4	Ⅲ-15	モノクロ8, カラー3	G37	(3.10) × (2.62)	(2.46) × 2.32	0.24	放射性炭素年代測定	
HF-1	Ⅲ-15	カラー3	G37	1.02 × 0.74	—	0.08		
HP-1	Ⅲ-15	モノクロ8	G37	0.20 × 0.14	0.19 × 0.08	0.06		
H-5	Ⅲ-17-18	モノクロ8~10, カラー3	H-I37-38	6.40 × (6.36)	(6.08) × 5.92	0.92	放射性炭素年代測定、樹種同定	
HF-1	Ⅲ-17	カラー3	I37	0.84 × 0.60	—	0.05		
HC-1	Ⅲ-17		I37	0.16 × 0.12	—	—		
HC-2	Ⅲ-17		H38	0.50 × 0.43	—	—		
HC-3	Ⅲ-17		H37	0.75 × 0.72	—	—		
HC-4	Ⅲ-17		H38	0.72 × 0.66	—	—		
HP-1	Ⅲ-18		H37	0.32 × 0.30	0.18 × 0.16	0.13		
HP-2	Ⅲ-18		H37	0.36 × 0.32	0.20 × 0.18	0.10		
HP-3	Ⅲ-18		H37	0.38 × 0.32	0.18 × 0.14	0.40		
HP-4	Ⅲ-18		I38	0.32 × 0.28	0.20 × 0.16	0.38		
HP-5	Ⅲ-18	モノクロ10	H38	0.28 × 0.26	0.18 × 0.16	0.68		
HP-6	Ⅲ-18	モノクロ10	I38	0.36 × 0.28	0.16 × 0.14	0.72		
HP-7	Ⅲ-18	モノクロ10	I37	0.40 × 0.36	0.22 × 0.20	0.75		
HP-8	Ⅲ-18		H38	0.18 × 0.16	0.20 × 0.18	0.58		
HP-9	Ⅲ-18		H38	0.32 × 0.28	0.18 × 0.16	0.45		
HP-10	Ⅲ-18		H-I38	0.18 × 0.16	0.12 × 0.10	0.18		
HP-11	Ⅲ-18	モノクロ10	H37	0.36 × 0.32	0.18 × 0.16	0.73		
HP-12	Ⅲ-18		I38	0.22 × 0.20	0.12 × 0.12	0.57		
HP-13	Ⅲ-18	カラー3	H-I37	0.16 × 0.14	0.06 × 0.06	0.13		
HP-14	Ⅲ-18		I37	0.26 × 0.24	0.20 × 0.14	0.23		
周溝	Ⅲ-17	モノクロ10	I37	1.42 × 0.16	1.34 × 0.10	0.05		
H-6	Ⅲ-20	モノクロ11	H38	(2.86) × (0.59)	(2.40) × (0.38)	0.36		
剥片集中	FC-1	Ⅲ-20	モノクロ11, カラー3	I39	0.34 × 0.25	—	不明	

## 2 竪穴住居跡

H-1 (図Ⅲ-3~10、表Ⅲ-1~5、モノクロ図版 2~5、12~16、カラー図版 1~4)

位置 G~I39・40 立地 標高 9.2~9.3mの平坦面  
 平面形 楕円形 規模 11.8×9.00/10.7×8.12/1.28m

調査 調査区北側地区の表土を除去し、清掃をおこなったところ、直径 10mほど黒色土の円形の緩やかな落ち込みを検出した。竪穴住居跡を想定し、断面観察用のベルトを設定して黒色土部分を掘り下げた。確認面から1m以上掘り下げたところで堅い地山の床面が現れた。壁の立ち上がりも明瞭で、比較的急峻に立ち上がる。床面からは炭化した木片が数か所で検出され、放射性炭素年代の測定、および樹種の同定をおこなった(V章参照)。

覆土は5層に分層した。一番上はⅡ層(包含層)が覆い、深い所では途中に1層(火山灰 Ko-d)が入る。その下の黒色土を2層とした。3層は火山灰 B-Tm が二次堆積したもので、Ⅱ、1~3層は自然堆積層である。4層は不均一で、掘り揚げ土を埋め戻したものか、堅くしまっている。5層は床面直上の覆土で、Ⅳ層ローム質土層を起源にした非常に堅固な層である。3、4層からは縄文時代後期初頭の土器片が、4、5層からは縄文時代前期後半の土器片が多く出土している。なお覆土中からは表面が平滑な楕円体の礫が多数出土しており、特に覆土 3、4層からは頁岩・珪岩などの大きさの整った礫がややまとまって出土している。

### 付属遺構

焼土 HF-1、2 HF-1は住居跡床面の西端で検出した。長径は30cm ならずで、焼土の細かな粒が混入する層が厚さ 5~6cm で堆積している。この場で焼けたものかは不明である。上面には炭化木片を含む。HF-2は長径 82cm、厚さは5cmで、住居跡床面の南東端で検出した。上部に若干の炭化物を含み、その下は被熱により赤色化した土がブロック状にまとまる。HF-1と同様、この場で焼けたものかは不明である。周辺にはHC-1~3もみつがっている。この2か所から採取した炭化木片の、放射性炭素年代の測定をおこなった。それぞれ 4690±30yrBP、4720±30yrBP との結果が出ている(V章-2参照)。

炭化物集中HC-1~3 住居跡床面の南東端で検出した。大きさや形状は不規則で、細かな炭化木片が所々まとまっている。HC-1から採取した炭化木片は放射性炭素年代の測定と樹種同定を、HC-1~3から採取した炭化木片は樹種同定を依頼した。HC-1の年代は 4680±30yrBP と出ている。また樹種同定結果は、3点ともクリであった。

主柱穴 HP-1、3、7、13、16、17 直径 35~60cm、深さが50cm 以上あり、平面上の位置関係からのこの6本が主柱穴と考えられる。HP-1から時計回りに16→7→13→17→3と並ぶ。

小柱穴 HP-2、4、5、6、8、9、11、14、15、18、19 主柱穴よりも小規模で位置も変則的なもの。HP-3と17の間に位置するHP-8は、位置的にも規模的にも主柱穴の1本としてもよいかも知れない。

その他の小土坑 HP-10、12、20 HP-10、20は土坑の中に青緑色の砂が入っている。砂岩がそのまま埋め込んであるような堅固さである。H-5でも同じような小土坑があるが、いずれも住居跡床面のほぼ中央に位置するのが大きな特徴である。用途は不明である。

HP-12は径1.8m弱、深さ10cmの皿状の土坑である。位置は住居跡床面の中央よりやや北側にある。

時期 出土土器片などから、縄文時代前期後半と思われる。なお、出土した炭化木片3点の放射性炭素年代の測定結果は、ほぼ同時期の年代を示している(V章-2参照)。(新家)

掲載遺物 土器(図Ⅲ-6・7):38点図示した。Ⅱ群b類・Ⅲ群a類・Ⅳ群a類・土製品がある。

1～15はⅡ群b類。ほとんどが円筒下層d1式であるが、1～4には円筒下層bまたはc式に属するものが含まれている。1の隆帯上には、爪跡とみられる筋のある指頭圧痕がある。隆帯より上位には不整な燃糸文や綾線文が施文されている。2の縄側面圧痕はやや深い。3はやや幅の狭い口縁部文様帯がある。4はH-5の3(図Ⅲ-16)と同一個体とみられる。口縁部は外反し、幅の狭い口縁部文様帯には貝殻条痕が横走る。繊維の痕跡が多数観察される。5は浅い隆帯上に工具により刺突列が施される。隆帯より上位に細い縄側面圧痕が3条ある。口唇はとがる。6～15は口縁部に縄側面圧痕、胴部に燃糸文・羽状縄文(7・8は綾絡文)のセットでいわゆる「すだれ状縄文」が施されている。燃糸文は、6・9・10・12にはやや太く、7・8・11・13～15には細い燃りの縄が用いられている。外面はやや摩滅しているものが多く、繊維の痕跡がやや顕著に見受けられる。内面はていねいに磨かれた跡が残っており、特に6～8・12には光沢がみられる。9・10の外面にはスス状の黒色物質が、施文された燃糸文などほぼ全面に付着しており、特に口縁部に厚みをもって残存している。7と8、9と10、13と14はそれぞれ同一個体である。15の復元個体は、覆土5層でややまとまって出土した。やや細長い円筒形で、口縁部はほぼ直立し、底面は外面がほぼ平坦で内面が凸状である。内外面とも摩滅している部分が多い。胴部は「すだれ状縄文」で、4～5cmの間隔で羽状縄文が4列施されている。

16・17はⅢ群a類。サイベ沢Ⅶ式または見晴町式に属する。16は口縁突起、17は突起付近。ともに口唇上に細い燃りの縄側面圧痕が密に施されている。

18～36はⅣ群a類。後期初頭の天祐寺式に属するとみられるものが多い。18は口唇直下に浅い縄線が施される。19は覆土2～4層から出土した30点あまりの破片で復元した。胴部中央付近では土器片の接点がないが、文様・色調・器厚などが極めて近い部分がある。色調は全体的に灰黄褐色を基調とし、胎土は緻密で混和材が少ないためか軽い。口縁部に2条の縄線が横走り外面全体に縦位を基本とした燃糸文が施されている。原体の節が明瞭でなく無節のように見られる部分が多い。20～26は貼付帯のあるもの。地文の縄文は縦方向に、貼付帯上の状文は横方向に回転施文されている。20～22は角の明瞭な角型口唇。20は口縁部の2本の貼付帯間が無文部となっている。21は胎土に海綿骨針状の白色物質が観察される。22は内外面とも器面に凹凸が見られる。23・24の貼付帯は比較的薄い。25は貼付帯上の縄文施文がいく分粗く、周囲にはみ出している。26は口縁部の貼付帯間に波状の貼付帯を施している。27～31は縄文のみ施文されたもの。27は口唇直下に幅の狭い無文部をもつ。28は胴中央部に最大径をもち、口縁に向かってすばまり口唇直下で外反する。縄文施文は比較的粗い。胎土に砂粒を多く含む。口唇にスス状の黒色物質がやや多く付着する。31は覆土3・4層からややまとまって出土した。やや細長いバケツ形で、口縁部から底部まで直線的な断面形状である。口唇は多少丸みのある角型、底面は平坦である。底面に葉脈状の細い沈線、浅い擦痕などがみられる。内面口縁部付近には、条痕が横方向に多数残されている。外面口縁部付近には黒色物質が付着している。32・33は無文のもの。32は外面に多少凹凸がある。34・35は胎土・色調などから同一個体と思われるもの。34はやや強いくびれのある胴部片。無文地にS字あるいは渦状の帯状沈線文が展開し、沈線間に刺突列が施されている。東北地方や遠く関東地方の後期初頭の土器群との関連が考えられる。36は貼付粘土帯で台が設けられている。

37はⅣ群b類の大型深鉢の口縁部としたが、他の時期であるかもしれない。口唇は丸型で、器壁が厚い。外面は灰黒褐色で、よく磨かれている。

38は土製円盤。Ⅱ群b類土器片が用いられており、摩滅した表面には燃糸文が浅く観察できる。周縁加工はていねいで丸みをもつ。胎土に砂粒が多く含まれる。

石器(図Ⅲ-8~10): 35点図示した。剥片石器はほとんどが頁岩製、礫石器は安山岩・砂岩・凝灰岩製などがある。

39~42は石鏃。39は平基、40~42は凸基。40・41のかえしは左右不均衡でゆるい。42はかえしがやや鋭い。両側面とも規則的な剥離が連続し、ていねいに仕上げられている。

43は石錐。小型の石鏃の形状であるが、両端部に機能部をもつ。

44はナイフ、45~47はつまみ付きナイフ。44は石槍の先端部を丸くしたような形状で、両面とも周縁部のみが調整されている。45・47は片面調整でいずれも先端部が欠損している。46は球顆の多く入った黒曜石製。両面調整でほぼ左右対称となっており、均質的な調整が施されている。

48~54はスクレイパー。48は中央部にえぐりのある剥片が素材となっている。49はおおむね半円形の薄い剥片素材のもので、背面周縁部に細かい調整がみられる。50は原石の不純物の一部が残存する。51~53は一側縁を調整し直線的な刃部を作出している。54は素材の剥片に加工を少々加えたもの。

55は磨製石斧。撥形で、ほぼ完形で残存していた。片岩製で、ほぼ全面に研磨が及んでいる。

56~64は扁平打製石器。石材は安山岩製がほとんどで、57は砂岩製、63はカンラン岩製である。59・61・62・64は表面が褐色で内部が暗灰色を呈する扁平な安山岩が用いられている。周縁を加工し、長軸の一側縁をすり面としている。また長軸の端部にうち欠きがあるものが多くみられる。全体的に一側縁調整が目立ち、すり面の幅は狭い。9点中6点が、2分割されたものが接合した。このうち62はH-5覆土出土のものと接合した。

65は北海道式石冠、66~68はすり石。65はHP-15の覆土から出土した。残存部が少ない。底面の擦り面や側面の敲打など加工がていねいである。66~68はすべて表面が平滑な砂岩の楕円礫が用いられている。長軸の一側縁を擦り面としている。67は短軸側の両端部にも擦り面が見られる。

69~71はたたき石。69はHP-13の覆土から出土した。泥岩の棒状の礫が用いられ、丸みのある角にそれぞれ敲打痕が見られる。70・71は凝灰岩のやや扁平な礫が用いられ、表面・裏面それぞれ中央付近に敲打痕が複数ある。

72・73は軽石製品。72はHP-16の覆土から出土した。不整形な軽石の長軸方向に、幅1cm前後の溝が複数みられる。73はやや扁平な楕円体の軽石の表面の大部分に擦痕が確認できる。

(阿部)

H-2(図Ⅲ-11・12、表Ⅲ-1・2・4・5、モノクロ図版5・6・17)

位置 F36~38 立地 標高9.20~9.40mの平坦面

平面形 部分的調査のため不明であるが、おそらく円~楕円形

規模 (5.34)×(1.38)/(4.96)×(1.24)/1.36m

調査 調査区北側地区の表土を除去し、清掃をおこなったところ、H-1の落ち込みの西側に、調査区外に続くと思われる黒色土の落ち込みを検出した。短軸でベルトを設定し、黒色土を掘り下げた結果、堅く平らな床面と、明瞭に立ち上がる壁を検出し、堅穴住居跡であると判明した。また、床面を精査したところ、壁際に沿って浅い周溝がみつかった。柱穴、炉は確認できなかった。

覆土は6層に分層した。表土の下にⅡ層が自然堆積している。1はⅡ層より黒味が強い黒色土で、火山灰B-Tmの二次堆積層(2層)の直上の層。H-1の覆土に見られた火山灰Ko-d層はない。1、2層は自然堆積である。3層は非常に堅くしまった暗褐色土層。4層は黒褐色土。堅くしまる。5、6層は固結した非常に堅い層で、Ⅳ層起源のローム質土も混じる。2~6層にかけて縄文時代前期後半の

土器片が出土している。

覆土 6層の上位、下位それぞれから出土した炭化木片計 2点について、放射性炭素年代の測定をおこなった。上位出土のものは 4770±yrBP、下位出土のものは 4680±yrBPと、若干年代に幅のある結果が出ている。

#### 付属遺構

周溝 1～3 住居跡床面の壁際から 10cm ほど内側に、壁に沿って巡る。途中途切れており、3本として認識した。非常に浅いため、当初は一連のものだった可能性もある。周溝の幅は15cm弱、深さは3～5cmである。周溝 2の覆土からは黒曜石の二次加工ある剥片 1点、頁岩の二次加工ある剥片 4点、黒曜石の微細剥片 287点、頁岩の微細剥片 2,012点が出土している。

時期 出土土器から、縄文時代前期後半と思われる。なお、覆土 6層から出土した炭化木片 2点の放射性炭素年代測定結果はほぼ同時期の年代を示している（V章-2参照）。（新家）

掲載遺物 土器（図Ⅲ-12）：4点図示した。

1～3はⅡ群 b類で、すべて円筒下層 d1式。口縁部に縄側面圧痕、胴部に撚糸文・羽状縄文（3は綾絡文）のセットでいわゆる「すだれ状縄文」が施されている。1・2は同一個体である。外面の多くが摩滅している。口縁はわずかに外反する。一方、3の口縁は直立する。内面の表面は褐色を呈しており、やや摩滅しているが、いねいに磨かれていたと思われる。

4はⅣ群 a類。やや丸みを帯びた口唇で、外面はやや凹凸がある。地文の縄文は縦方向の回転施文である。

石器（図Ⅲ-12）：2点図示した。いずれも頁岩の剥片を素材とする。

5はスクレイパー。側縁の一部に原石面が残存しており、円礫を打ち欠いた剥片が素材と考えられる。6は周縁部に微細な剝離痕がありUフレイクとした。（阿部）

#### H-3（図Ⅲ-13・14、表Ⅲ-1・2・4・5、モノクロ図版 7・17）

位置 F38 立地 標高 9.3mの平坦面

平面形 ほぼ円形 規模  $(3.18) \times (2.32) / (2.92) \times (2.24) / 0.40m$

調査 H-1の西側～H-2の北東側の包含層を調査中、Ⅳ層起源と思われる不整形なローム質土が主体のブロック塊を検出し、その形状から風倒木と判断して掘り下げた。その後床面と思われる平らで堅い地山の面と、ほぼ中央に土器片のまとまりが現れ、小型の堅穴住居跡であることがわかった。調査区外との境界の壁面に住居断面がかろうじて残り、H-2に切られている。住居の規模、形状ともにH-4に似る。

覆土は黒褐色土の層と、褐色ローム質土がブロック状に混ざった住居床面中央の暗褐色土である。床面中央部の褐色土層は、長径約 1m、層厚は 10cm ほどで、非常に堅くしまった土塊である。平面形は不整形である。2層に分かれ、上部は黒褐色を呈し、少量の炭化微粒と微量の焼土粒が入る。下部はⅢ層とⅣ層からなる暗褐色土である。土器片はこの褐色土層の真上で検出された。この土塊の用途や由来は不明であるが、屋根土だった可能性がある。

床面から採取した炭化木片 1点について、放射性炭素年代の測定をおこなった。4830±30yrBPという結果が出ている（V章-2参照）。

#### 付属遺構

柱穴 H P-1～4 直径 12～20cm、深さ約 20cmの柱穴が、北側壁面に沿って 3本、南側に 1本みつけた。

時期 H-2に切られており、H-2よりも古いと思われるが、出土土器から、同じ縄文時代前期後半と考えられる。(新家)

掲載遺物 土器(図Ⅲ-14)：1点図示した。1はⅡ群b類で、円筒下層c式に属するものと思われる。口縁部は緩やかに外反し、口径は比較的大きい。口縁部文様帯は幅5cm前後あり、胴部文様との境界付近にわずかに段をもつ。口縁部は横方向への燃糸文、胴上半部は縦位の燃糸文がやや密に施され、胴下半部は複節縄文が施文されている。内面調整をみると、口縁部付近はいいいに磨かれた跡がみられるが胴部は凹凸が残る。

石器(図Ⅲ-14)：1点掲載した。2はつまみ付きナイフ。黒曜石製で球顆や節理が含まれる。均質的な両面調整が行われている。(阿部)

H-4 (図Ⅲ-14・15、表Ⅲ-1・2・4・5、モノクロ図版8・17、カラー図版3)

位置 G37 立地 標高9.0～9.2mの平坦面

平面形 円形 規模 (3.10)×(2.62)/(2.46)×2.32/0.24m

調査 包含層調査においてⅡ層を掘り下げたところ、平坦な硬化面と黄褐色土の一部を検出した。Ⅱ層をすべて掘り下げたのちに堅穴住居跡と確認できた。

Ⅱ層黒色土以下の覆土は、上位(1層)がロームブロックを多量に含む褐色土層、焼土をはさんで下位(2・3層)が細かいローム質土を多量に含む黒色～暗褐色土層である。1層褐色土は住居跡中央部に1.5×0.8mほどの範囲で広がり、層厚は約10cmである。2・3層もおおむね同域に分布する。

床面は平坦で、東側は風倒木により攪乱を受けており確認できない。床面全体、特に中央部付近に斑点状の硬化面が不明瞭ながら観察できる。壁は緩やかに立ち上がり、掘り込みは15～20cm程度確認できた。

遺物は覆土や床面付近から土器片・石器等が少量、剥片がやや多く出土している。また周辺包含層から、Ⅱ群b類円筒下層c式およびd式、土製品が出土している(図Ⅳ-2の3・4・7・21など)。

#### 付属遺構

焼土HF-1 住居跡中央付近の覆土下位で検出した。被熱層は最大8cmであるが、不均一で全体的に薄い。炭化物がやや多量に見られ、剥片や焼成粘土塊などの遺物が多数出土している。

柱穴HP-1 床面ほぼ中央で検出した。検出面の径20×14cm、深さ6cmの浅い柱穴である。覆土は住居跡の覆土2層と同様である。

時期 H-3と規模・構造が類似することや出土遺物から、縄文時代前期後半の円筒下層cまたはd式期とみられる。床面直上とHF-1から採取した炭化材の放射性炭素年代の測定値は、それぞれ4770±30yrBP、4650±30yrBPとなっている(V章-2参照)。

掲載遺物 土器(図Ⅲ-14)：1点図示した。1はⅡ群b類。覆土中の焼土から出土した。器壁の薄い、縦位の燃糸文がみられる小片。

石器(図Ⅲ-14)：3点図示した。2は頁岩製の石槍・ナイフ類。両面加工で、基部は欠損している。3は扁平打製石器。扁平な安山岩が用いられている。周縁加工が目立ち、擦り面は確認できない。4は安山岩製のすり石。大きく欠損しているが、幅広の擦り面が残る。(阿部)

H-5 (図Ⅲ-17～19、表Ⅲ-1・2・4～6、モノクロ図版8～10・18、カラー図版3)

位置 H・I37・38 立地 標高9.2mの平坦面

平面形 隅丸五角形? 規模 6.40×(6.36)/(6.08)×5.92/0.92m



調査 H-1南側の包含層を調査中、径 6m ほどの黄褐色の落ち込みを検出した。当初風倒木と思われたが、黄褐色土の輪郭が明瞭な円形になって現れ、ベルトを設定して掘り下げた。1m近い深さで堅く平坦な床面が検出され、西側を風倒木に攪乱された堅く住居跡とわかった。

覆土は 4層に分層した。1層は覆土の大半を占めるにぶい黄褐色土層で、非常に堅くしめる。2層は床面直上のさらに明るく褐色のローム質土が主体の塊で、非常に堅い。3層は壁際に堆積した黒褐色土で、しまりはなく軟らかい。4層は床面南側の壁際からみつかった周溝の覆土で、3層と類似して軟らかい。

焼土や炭化物集中から採取した炭化木片試料数点について、放射性炭素年代測定および樹種同定をおこなった(V章-2参照)。

#### 付属遺構

焼土 HF-1 住居跡床面中央よりやや南側にあり、長径 84cm、層厚は 5cm ほどで、被熱の程度は弱い。炭化物を含む。住居の炉と呼べるかは不明。HF-1から出土した炭化木片は樹種同定と放射性炭素年代測定分析を依頼した。樹種はクリ、年代は 4800±30yrBP であった。

炭化物集中 HC-1~4 焼土層を伴わない、炭化物のまとまりを 4 か所検出した。いずれも建材とは呼び難い、細かな炭化木片である。HC-2、4から出土した炭化木片は樹種同定分析、HC-3から出土した炭化木片は放射性炭素年代測定をおこなった。HC-2試料の樹種はシナノキ属、HC-4試料の樹種はクリ、年代は 4690±30yrBP の結果が出ている。

主柱穴 HP-5~7、11 直径 28~40cm、深さ約 68~75cm のこの 4 本が、位置や規模から主柱穴であったと思われる。

小柱穴 HP-1~4、8~10、12、14 主柱穴よりも小規模で位置も変則的なもの。

その他の小土坑 HP-13 土坑の覆土中に青緑色の砂が入っている。非常に堅くしめる。上部はフタをするように黄褐色のローム質土で覆われている。住居床面の中央に位置し、H-1のHP-10・20と同様の性格を持つ砂入り小土坑と考えられる。

時期 出土土器から、縄文時代前期後半と考えられる。

(新家)

掲載遺物 土器(図Ⅲ-16)：9点図示した。Ⅱ群 b 類・Ⅳ群 a 類がある。

1~8はⅡ群 b 類。1~4は円筒下層 b または c 式。1は隆帯上に爪跡とみられる細い溝を伴う指頭圧痕が連続する。2は土器片上部面にやや浅い隆帯があり、指頭押捺を受けている。土器片中央部に弱い段がみられる。繊維の痕跡が多数観察される。3はH-1の4(図Ⅲ-6)と同一個体とみられる。口縁部は外反し、幅の狭い口縁部文様帯に貝殻条痕が横走する。地文は RL 縄文が縦位に回転施文されている。全体的に黒褐色を呈し、繊維の痕跡が多数観察される。4も3と同様の口縁部形状で文様も条痕が施文されているが、器壁がやや薄く色調は黄褐色を呈する。地文は摩滅して不明瞭であるが、縦位の撫糸文がやや密に観察される。胎土に砂粒を多く含む。5~8は円筒下層 d1 式であるが5・8はやや古いものかもしれない。5は口縁部がわずかに外反し、文様帯の幅がやや広い。地文は摩滅して不明瞭である。6・7は「すだれ状縄文」が施されているものとみられる。8は底面にも縄文が施文されている。繊維の跡が多数観察される。

9はⅣ群 a 類と思われる。器壁が薄く湾曲した胴部片であり、形状から判断すると壺形土器になる可能性がある。細沈線による曲線的な帯状文があり、細い寄りの縄文が充填されている。内外面とも表面が剥落している部分がある。

石器(図Ⅲ-19)：14点図示した。剥片石器はすべて頁岩製である。

10は石鏃。小型で薄い木葉形。11は石錐としたもの。縦長の薄い剥片の側縁の一部および端部

に細かい調整が施されている。弱い挟りが認められ、つまみ付きナイフの可能性もある。

12~14 はつまみ付きナイフ。不定形な剥片を素材とし、側縁部とつまみ部に細かい調整が施されている。12 はつまみ部が長軸からずれた位置にある。先端部は尖り、両側縁に細かい加工がある。

15~19 はスクレイパー。16・18・19 はやや厚みのある縦長の剥片を素材としている。18・19 は下部にも細かい調整が行われ、19 は腹面がやや内湾する。

20・21 は扁平打製石器。20 は淡い緑色を呈する砂岩製で、周縁部に加工があり側縁に部分的に擦り面が見られる。21 は表面が赤褐色で内部が暗灰色を呈する板状の安山岩が用いられている。このほかに図Ⅲ-9-62 には、H-1 出土のものとH-5 覆土 1 層出土のものとが接合した扁平打製石器を掲載してある。

22・23 はたたき石。22 は凝灰岩、23 は泥岩の棒状の礫が用いられ、裏表面とも長軸中央に明瞭な敲打痕が複数か所みられる。(阿部)

H-6 (図Ⅲ-20、表Ⅲ-1・2・4、モノクロ図版 11・19)

位置 H38 立地 標高 9.0~9.2mの平坦面

平面形 不明 規模 (2.86)×(0.59)/(2.40)×(0.38)/0.36m

調査 H-5調査中、北側壁面に暗褐色土の落ち込みの断面が現れた。水平で平坦な床面と明瞭な壁の立ち上がりから、H-5に切られた浅い小型堅穴住居が存在することがわかった。北側縁辺部はH-1と切り合わない程度に隣接している。残存していた覆土は1層のみ。暗褐色でしまりのある層である。遺物は床面から縄文時代前期後半の土器片が1点出土している。

時期 平面形は不明であるが、円周の規模や深さから、H-3・4と同時期の縄文時代前期後半の住居跡と考えられる。(新家)

掲載遺物 土器(図Ⅲ-20):1点図示した。1はⅡ群b類円筒下層d式とみられる小片。燃糸文が斜位にみられる。(阿部)

### 3 剥片集中

F C-1 (図Ⅲ-20、表Ⅲ-1・2・6、モノクロ図版 11・19・カラー図版 3)

位置 I39 立地 標高 8.9~9.0mの平坦面 平面形 楕円形 規模 0.34×0.25m

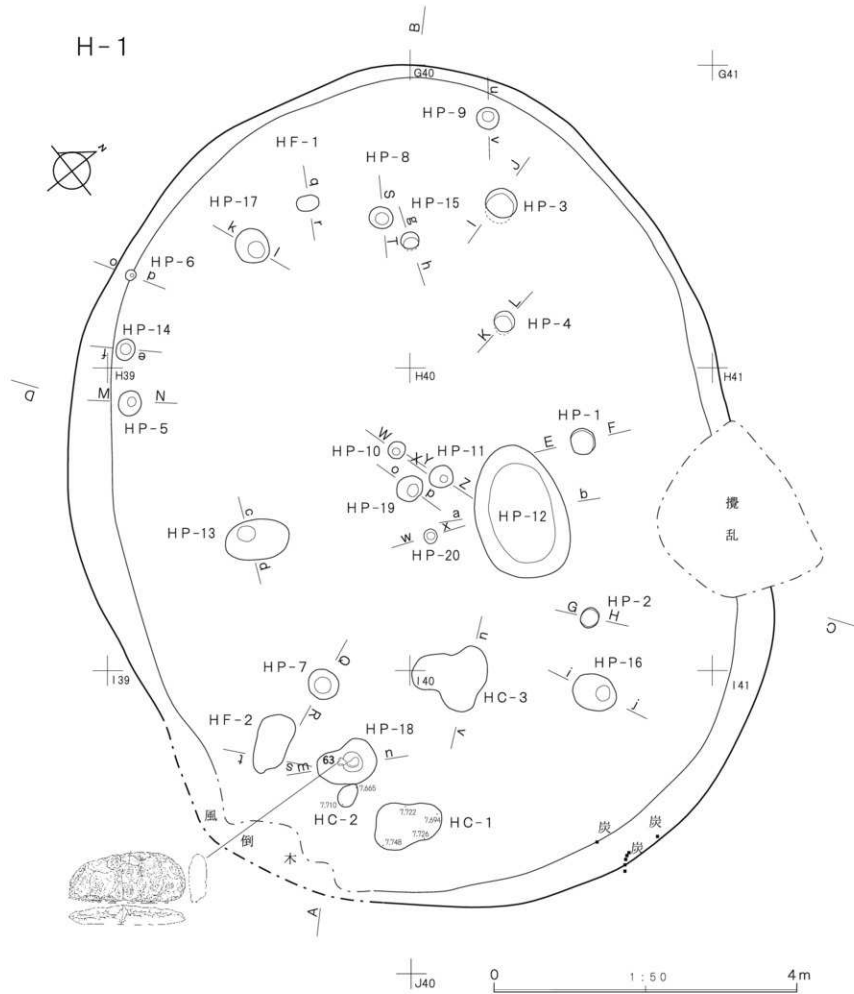
調査 H-1南側の包含層を調査中、Ⅱ層下部~Ⅲ層上面で大小の頁岩の剥片のまとまりを検出した。石核1点、二次加工ある剥片1点を含む252点の剥片が出土した。

時期 良好な出土資料がないため不明であるが、周辺の住居と同じ縄文時代前期後半の可能性もある。(新家)

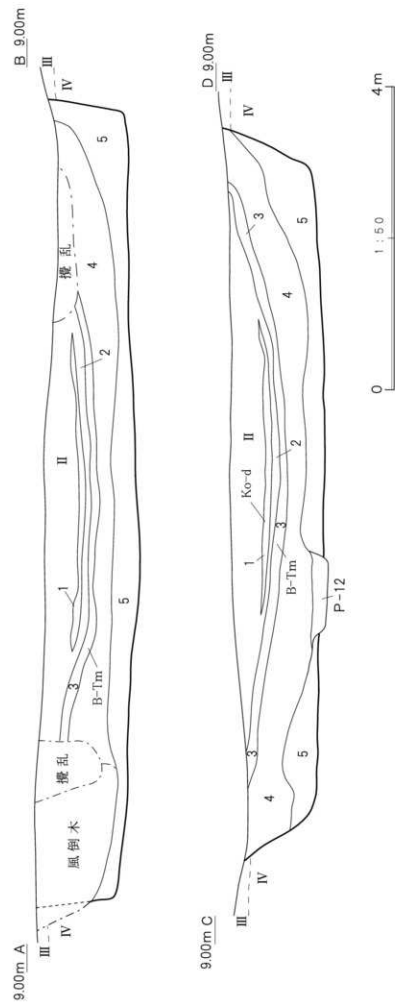
掲載遺物 石器(図Ⅲ-20):1点掲載した。1は頁岩製の両面調整石器としたもの。長さ12cm大、重量は240g以上を測るやや大型のもの。調整はやや粗く、刃部は直線的でない。石槍やスクレイパー等の未成品とも考えられる。(阿部)







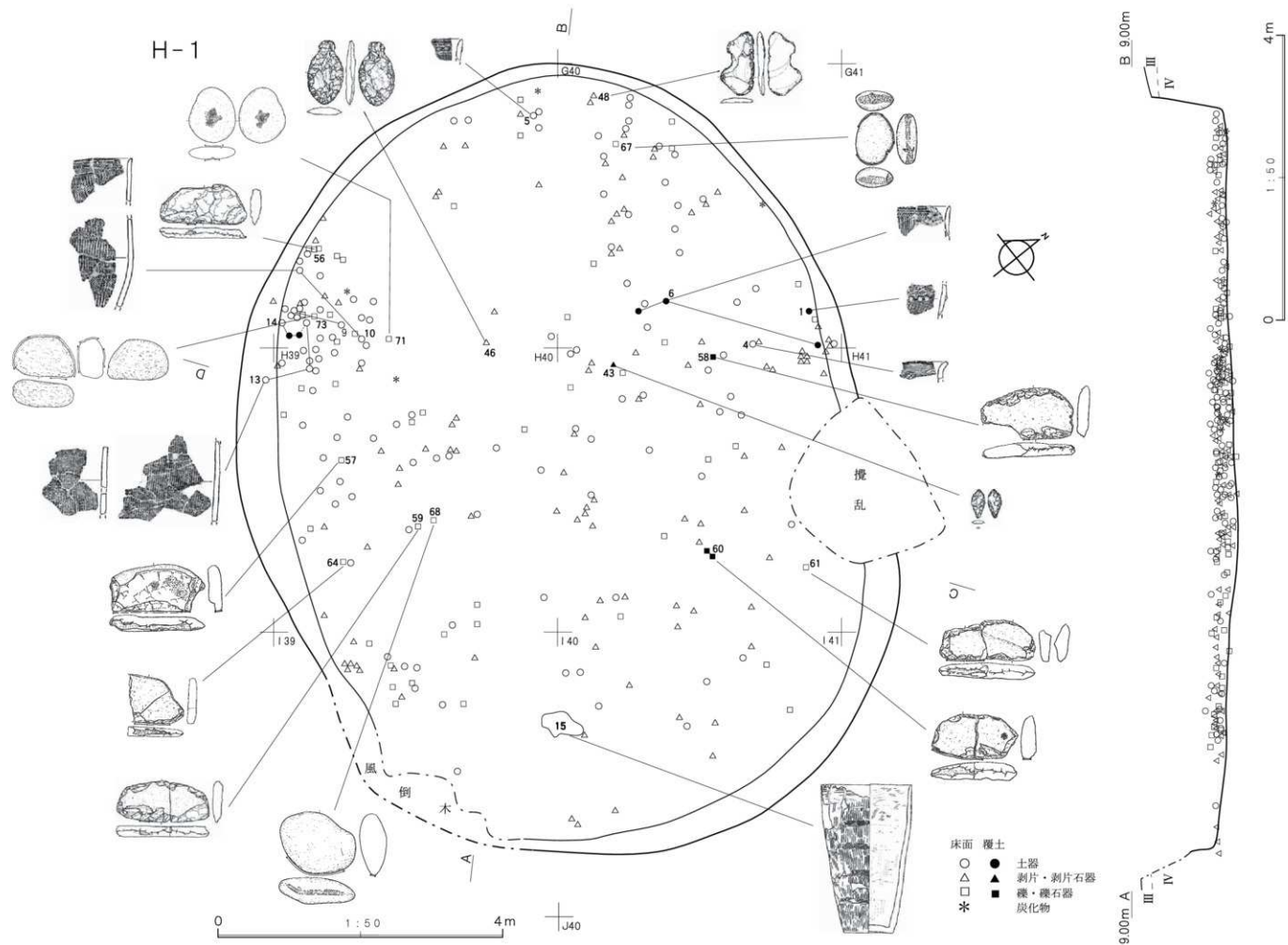
図Ⅲ-3 H-1 (1)



H-1 覆土土層注記

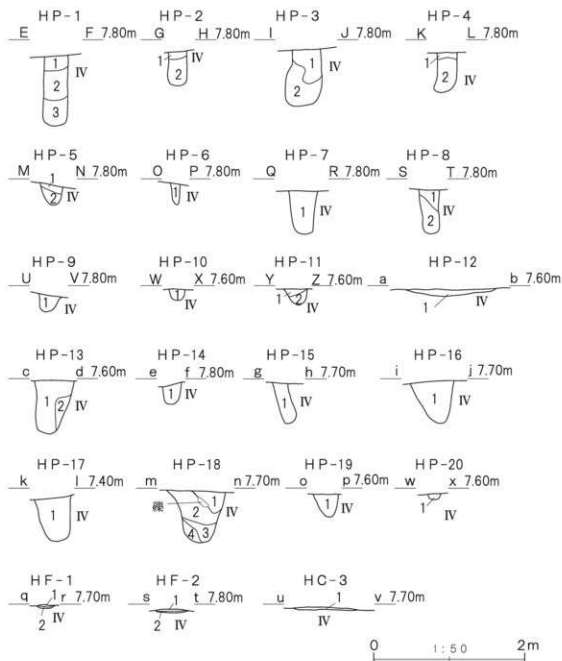
層名	土性	色調1	色調2	粘着性	しまり	層の明瞭性	層の形状	その他
1	砂土	10R6/4	10Y6/4	なし	固結	明瞭	平皿	Ko-d, 自然堆積
2	埴土	10R1/7/1	10Y1/7/1	中	堅	明瞭	平皿	Ko-d層とB-Tm層との間の黒色土層
3	埴土	10R2/2	10Y2/2	強	固結	明瞭	平皿	B-Tm層, 自然堆積
4	埴土	10R2/1	10Y2/1	強	堅	明瞭	平皿	B-Tm層, 覆土の堆積反し?
5	埴土	10R6/6	10Y6/6	強	固結	明瞭	平皿	炭層直上の覆土

Ⅲ 遺構とその遺物



图三-4 H-1 (2)

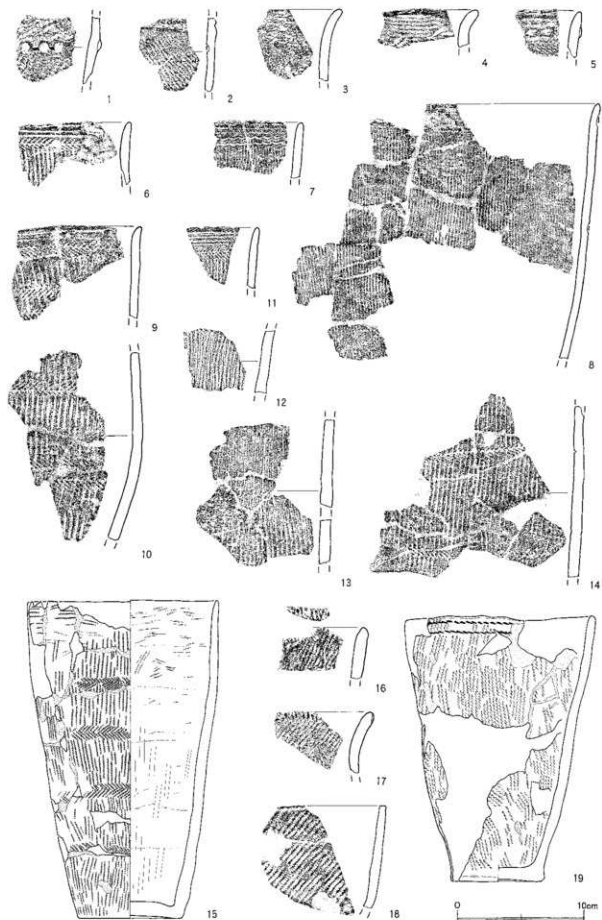
# H-1



H-1 付属施設覆土層注記

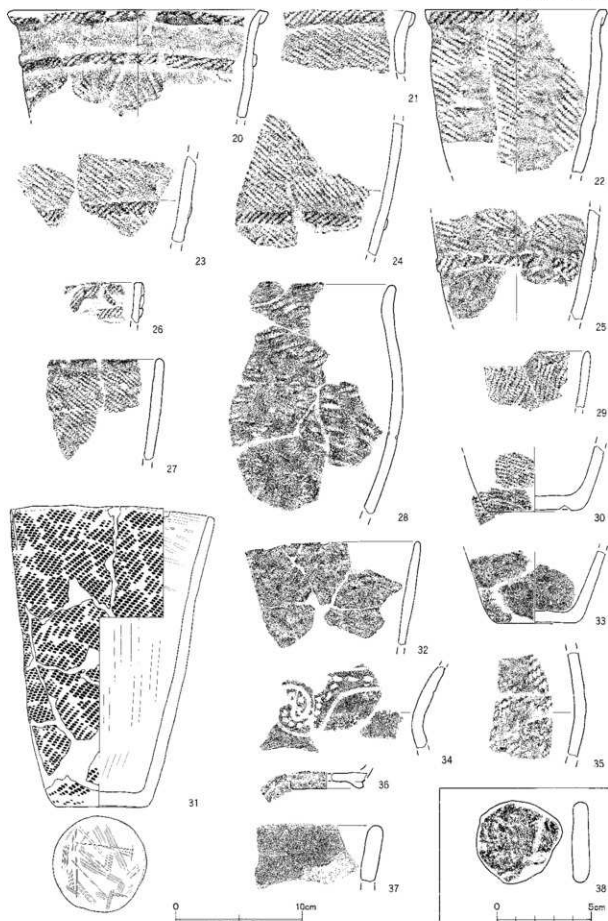
層名	土性	色調1	色調2	粘着性	しまり	境界の境界の 特徴的 起伏	その他
HP-1-1	凝土	5YR5/2	中	堅	均質	不連続面状物含む	
HP-1-2	凝土塊	5YR5/4	中	堅	均質	不連続面状物含む	
HP-2-1	凝土	7.5YR5/3	中	堅	均質	不連続面状物含む	
HP-2-2	凝土塊	5YR5/4	中	堅	均質	不連続面状物含む	
HP-3-1	凝土	10YR5/3	中	堅	均質	面状・塊状・点状物含む	
HP-4-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-4-2	凝土	10YR5/3	中	堅	均質	面・面	
HP-4-3	凝土	10YR5/2	中	堅	均質	面・面	
HP-5-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-5-2	凝土	10YR5/2	中	堅	均質	面・面	
HP-6-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-7-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-8-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-9-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-10-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-11-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-12-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-13-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-14-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-15-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-16-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-17-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-18-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-19-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HP-20-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HF-1	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HF-2	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	
HC-3	凝土	10YR5/4	中	堅	均質	面・面	

図Ⅲ-5 H-1 (3)

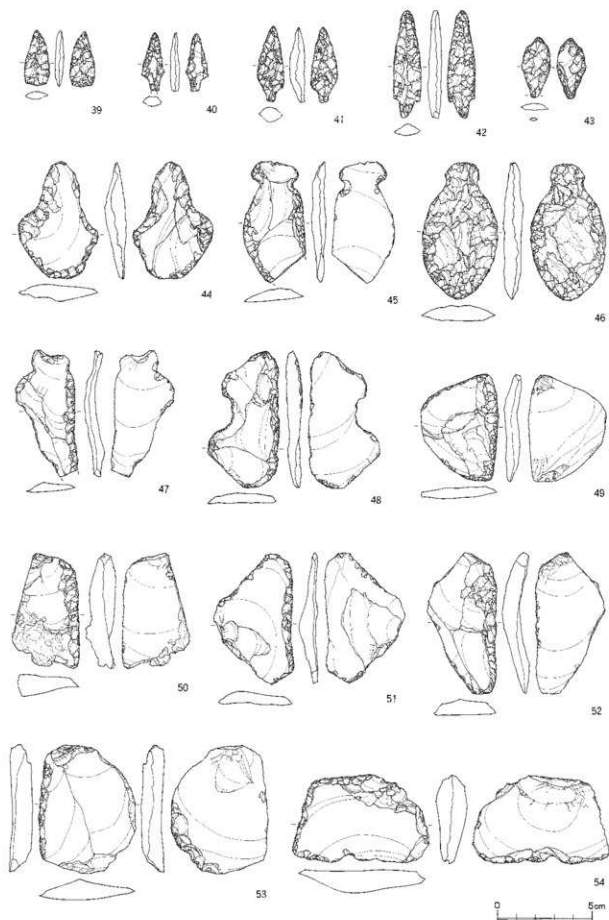


図Ⅲ-6 H-1出土の土器(1)

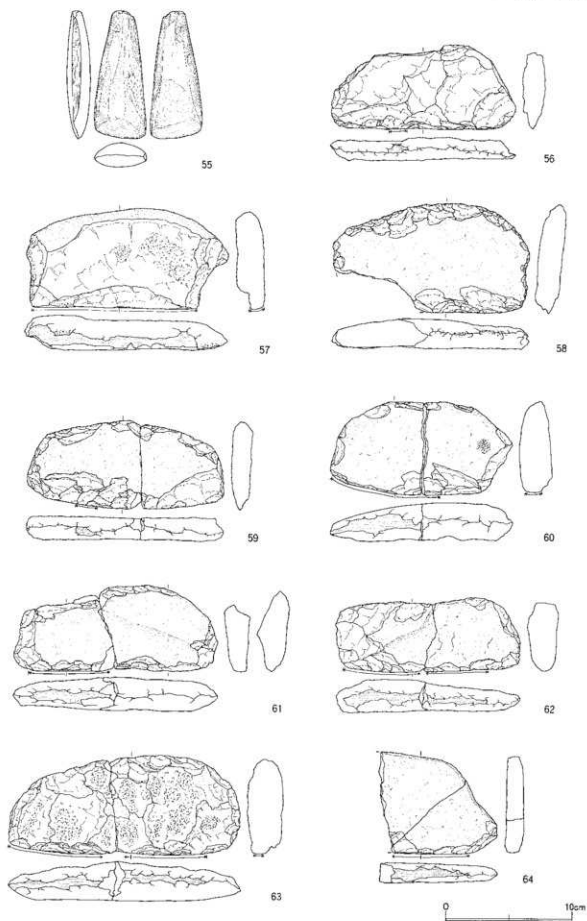




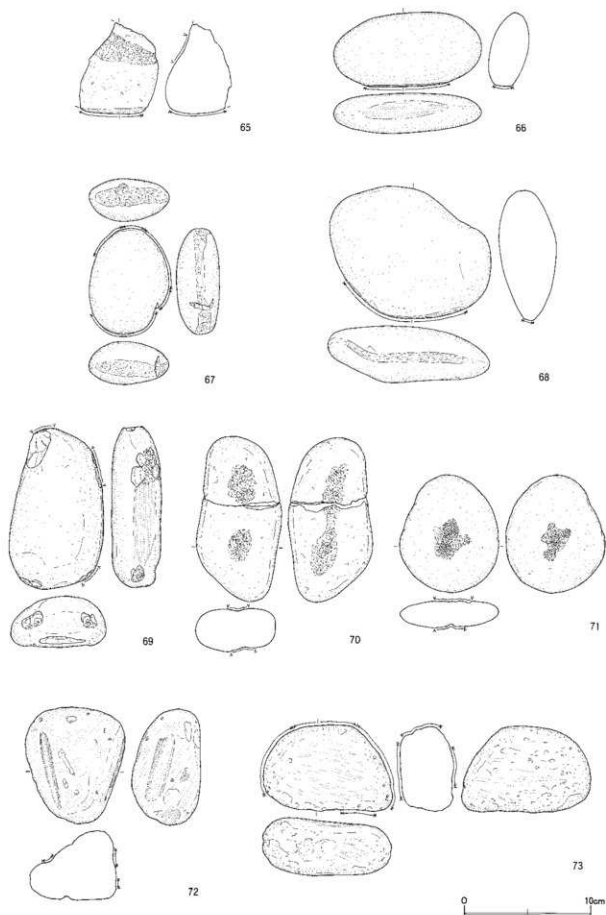
図Ⅲ-7 H-1出土の土器(2)



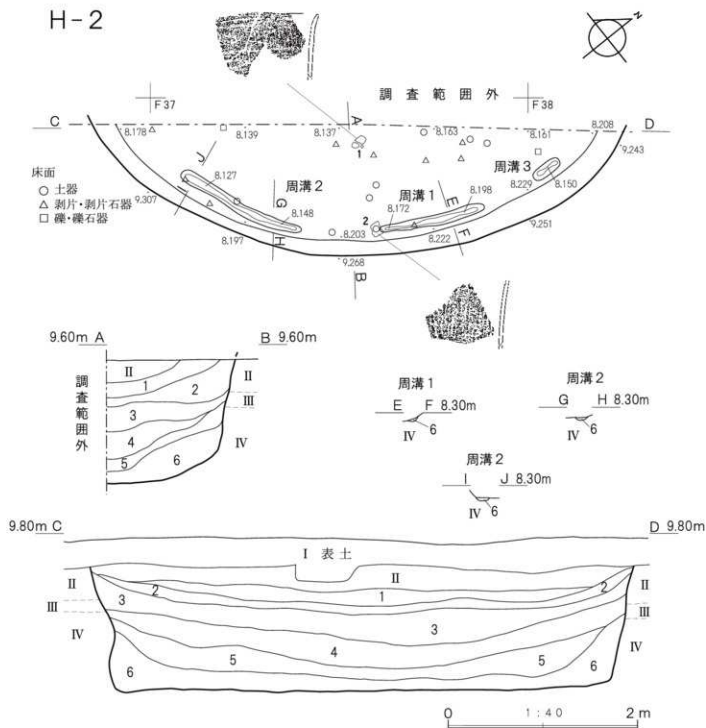
図Ⅲ-8 H-1出土の石器(1)



図III-9 H-1出土の石器(2)



図Ⅲ-10 H-1出土の石器(3)



H-2 覆土土層注記

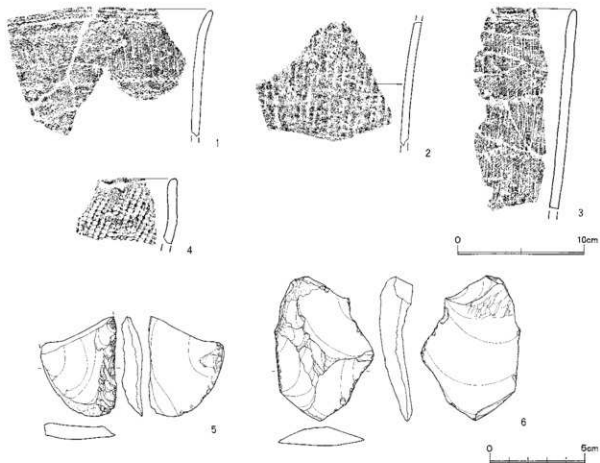
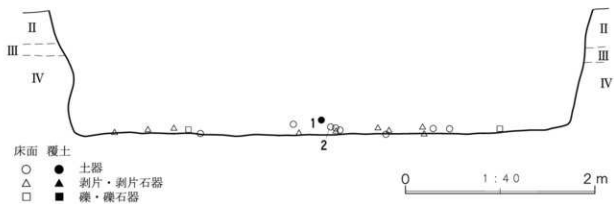
層名	土性	色調1	色調2	粘着性	しまり	層界の明瞭性	その他
1	埴壇土	黒	10YR1.7/1	中	堅	判然	II、B-Tm層の真上の黒、自然堆積
2	埴土	黒褐	10YR2/3	中	すこぶる堅	判然	II、B-Tm混層、自然堆積
3	埴壇土	暗褐	10YR3/3	強	すこぶる堅	漸変	III>>>II、覆土
4	埴土	黒褐	10YR2/2	強	堅	明瞭	II>>III、覆土
5	埴土	褐	10YR4/6	強	固結	散漫	IV>III、覆土
6	埴土	暗褐	10YR3/4	強	固結	明瞭	III、覆土

図III-11 H-2 (1)

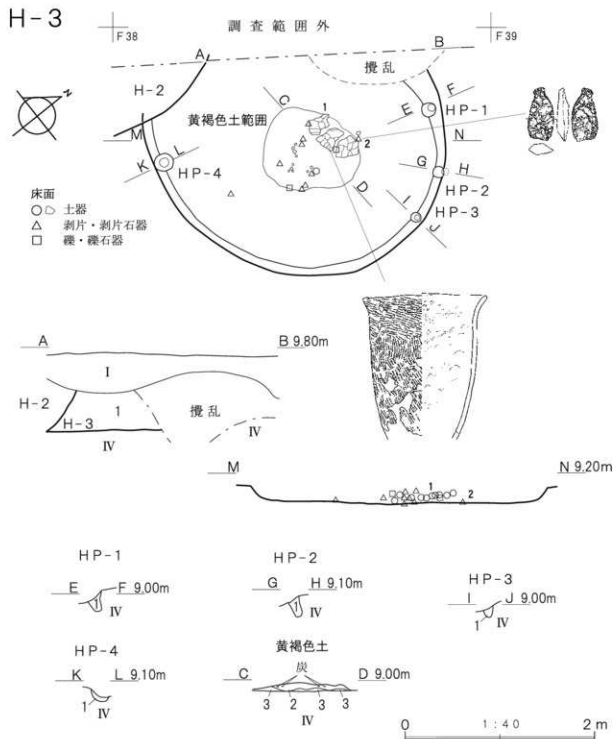
# H-2

9.80m C

D 9.80m



図Ⅲ-12 H-2 (2)

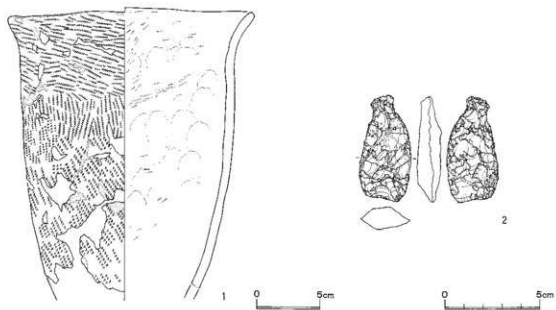


H-3 覆土土層注記

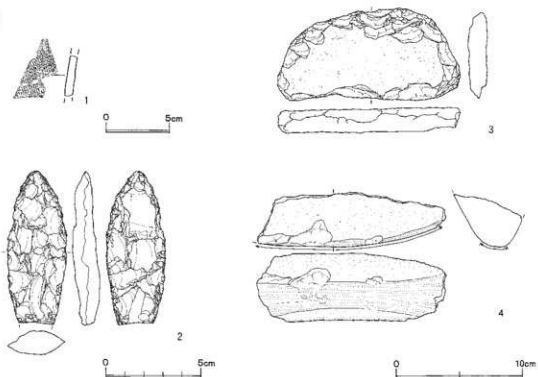
層名	土性	色調1	色調2	粘着性	しまり	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	壤土	黒褐	10YR3/2	中	堅	明瞭	平坦	Ⅲ>Ⅳ
2	埴壤土	黒褐	10YR2/3	強	すこぶる堅	判然	波状	Ⅲ>Ⅱ=炭、極少量の焼土粒混入
3	埴壤土	暗褐	10YR3/4	強	すこぶる堅	判然	平坦	Ⅳ>Ⅲのプロック状の層
HP-1 1	埴壤土	暗褐	10YR3/3	中	しょう	判然	波状	Ⅲ+Ⅳ
HP-2 1	埴壤土	暗褐	10YR3/3	中	しょう	明瞭	波状	Ⅲ+Ⅳ
HP-3 1	壤土	にぶい黄褐	10YR4/3	強	堅	判然	不規則	Ⅳ>Ⅲ
HP-4 1	壤土	暗褐	10YR3/4	強	すこぶる堅	判然	波状	Ⅳ>Ⅲ

図Ⅲ-13 H-3

H-3

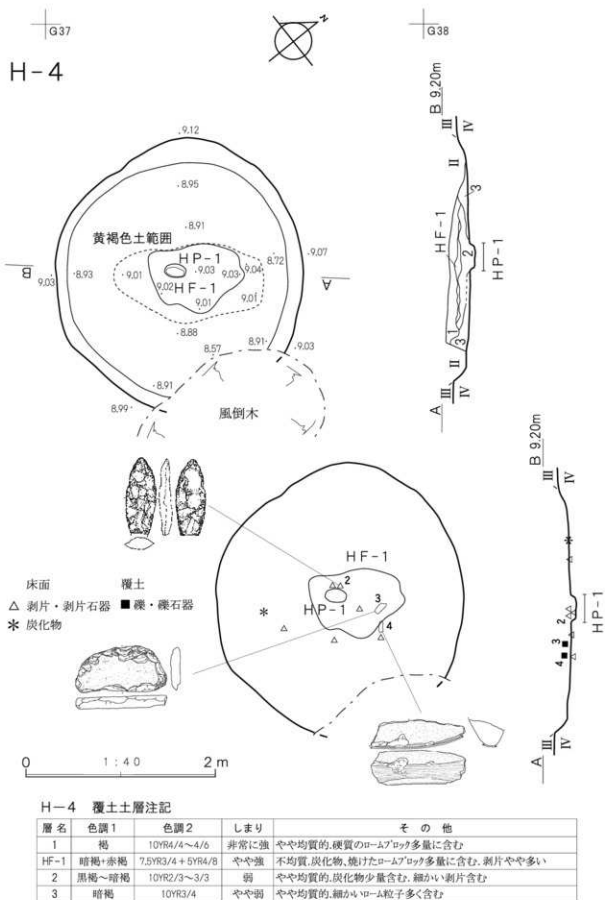


H-4

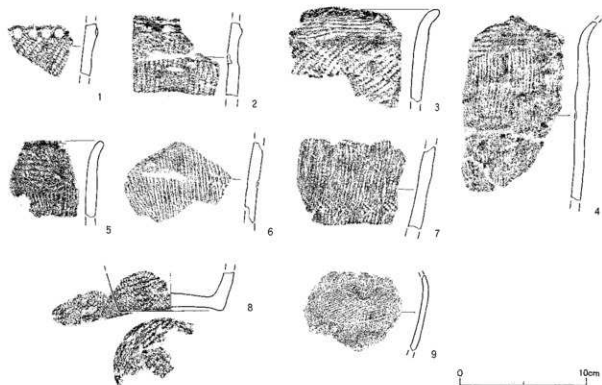


図Ⅲ-14 H-3・H-4出土の遺物





図Ⅲ-15 H-4

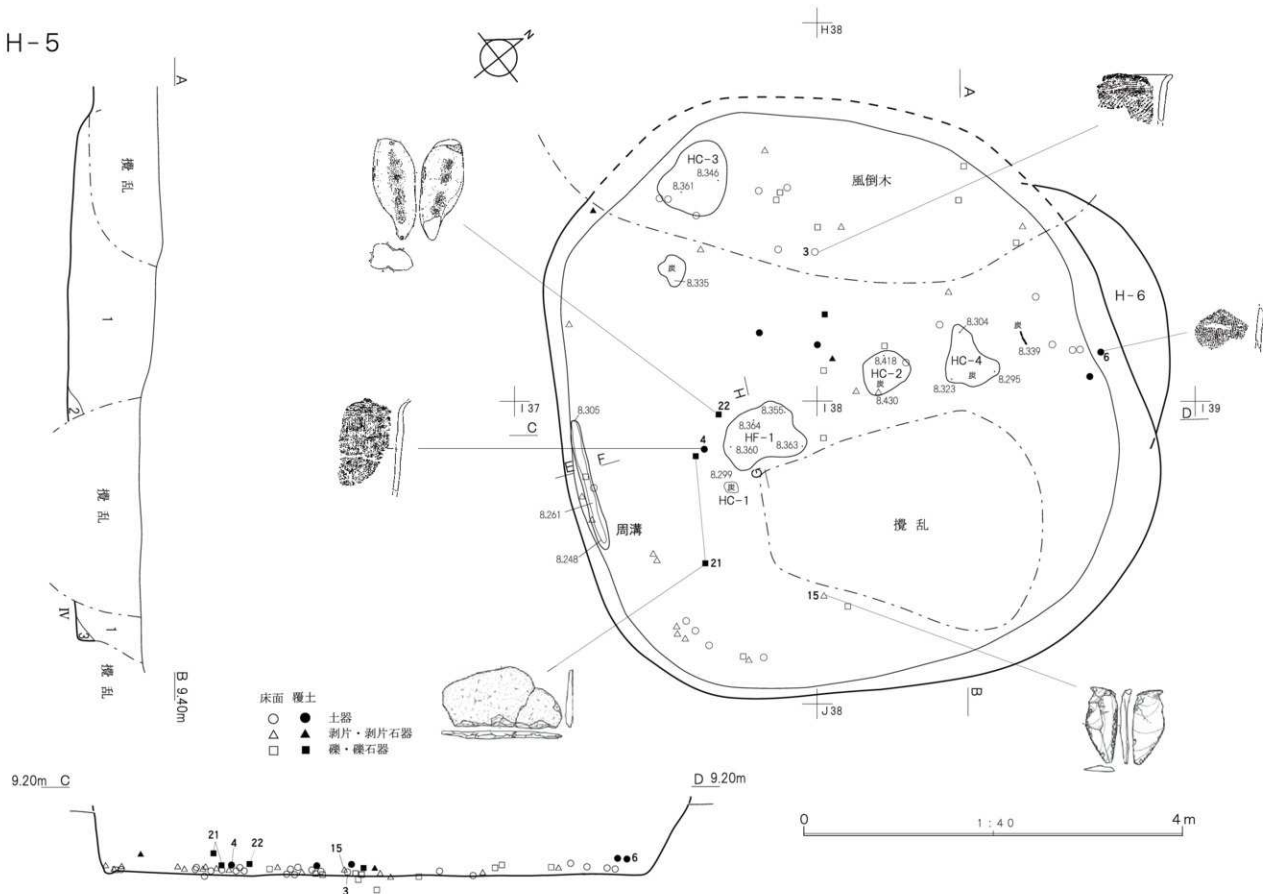


図Ⅲ-16 H-5出土の土器

## H-5 覆土土層注記

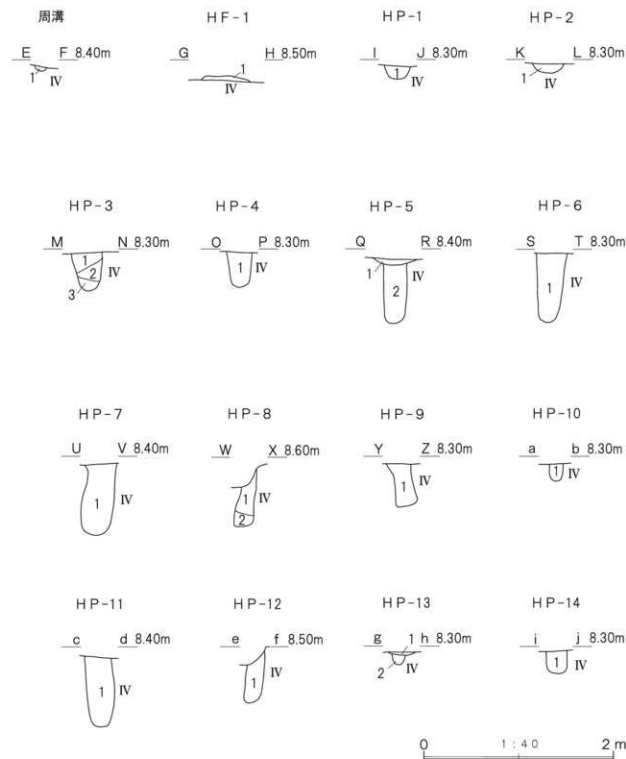
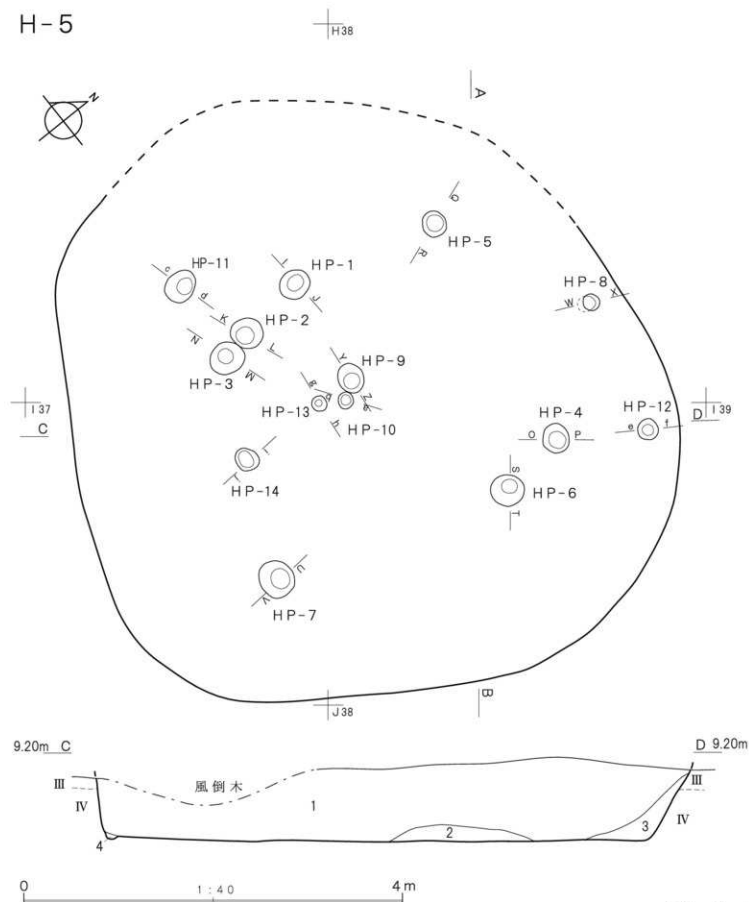
層名	土性	色調1	色調2	粘着性	しまり	層界の明瞭性	層界の起伏	その他	
1	埴壤土	にぶい黄褐	10YR4/3	強	すこぶる堅	判然	平坦	Ⅲ>Ⅳ、遺物多い	
2	埴土	褐	10YR4/4	強	すこぶる堅	明瞭	平坦	Ⅳ>Ⅲ、床直上のローム層	
3	埴壤土	黒褐	10YR2/3	強	しょう	明瞭	平坦	Ⅱ>Ⅲ、三角堆積層	
4	埴壤土	黒褐	10YR2/3	強	しょう	明瞭	平坦	Ⅱ>Ⅲ、周溝の覆土	
周溝	1	埴壤土	暗褐	10YR3/4	中	しょう	判然	平坦	Ⅲ>Ⅳ、周溝の覆土
HF-1	1	埴壤土	黒褐	7.5YR3/2	中	堅	判然	不連続	Ⅱ>Ⅲの焼土、炭化材含む
HP-1	1	埴壤土	暗褐	10YR3/4	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-2	1	埴壤土	暗褐	10YR3/3	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-3	1	埴土	褐	10YR4/6	強	堅		Ⅳ>Ⅲ	
	2	埴壤土	暗褐	10YR3/4	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
	3	埴壤土	黒褐	10YR3/2	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-4	1	埴壤土	暗褐	10YR3/3	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-5	1	埴土	暗褐	10YR3/4	強	堅		Ⅳ>Ⅲ	
	2	埴壤土	褐	10YR4/6	中	しょう		Ⅳ>Ⅲ	
HP-6	1	埴壤土	褐	10YR4/4	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-7	1	埴壤土	褐	10YR4/4	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-8	1	埴壤土	黒褐	10YR3/2	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
	2	埴壤土	黒褐	10YR2/2	中	しょう		Ⅲ	
HP-9	1	埴壤土	暗褐	10YR3/4	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-10	1	埴壤土	褐	10YR4/4	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-11	1	埴壤土	褐	10YR4/4	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-12	1	埴壤土	暗褐	10YR3/4	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	
HP-13	1	埴壤土	暗褐	10YR3/3	強	堅		Ⅲ	
	2	砂土	にぶい黄褐	10YR5/4	なし	すこぶる堅		起源不明	
HP-14	1	埴壤土	暗褐	10YR3/4	中	しょう		Ⅲ>Ⅳ	

H-5

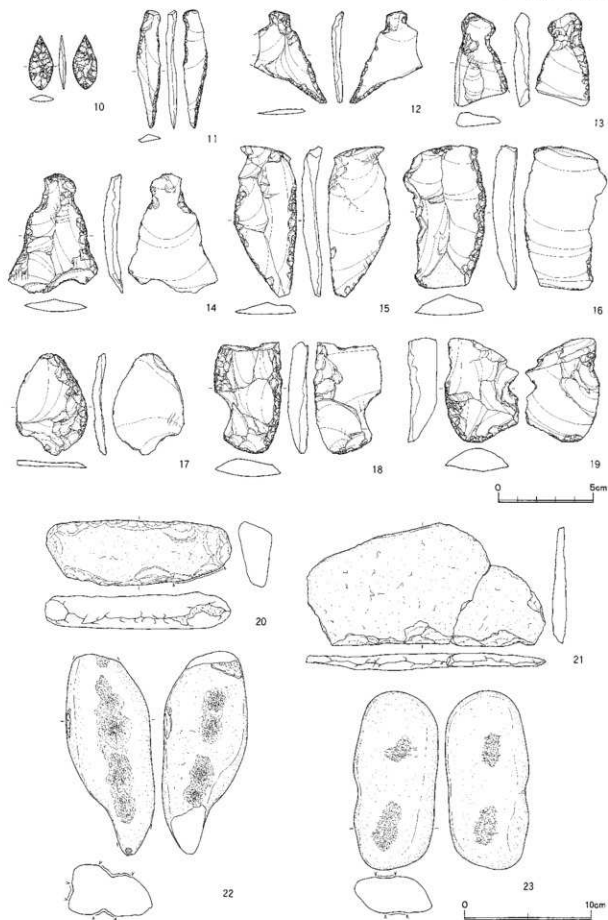


図III-17 H-5 (1)

H-5

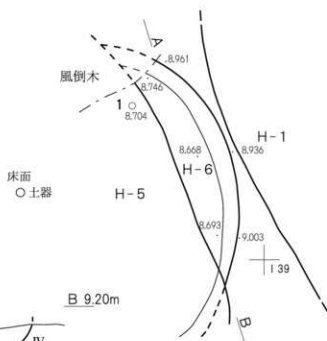
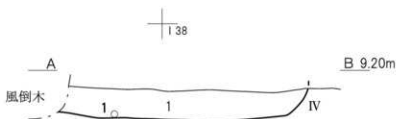


図Ⅲ-18 H-5 (2)



図III-19 H-5出土の石器

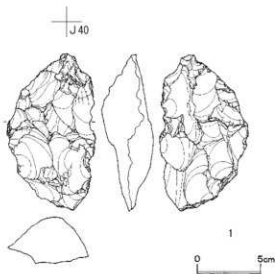
H-6



H-6 覆土土層注記

層名	土性	色調1	色調2	粘着性	しまり	層界の 明瞭性	層界の 起伏	その他
1	埴壤土	暗褐	10YR3/3	中	堅	明瞭	平坦	Ⅲ>Ⅳ

FC-1



図Ⅲ-20 H-6、FC-1

表Ⅲ-3 遺構出土掲載土器一覧(1)

挿図番号	掲載番号	モノクロ写真図版番号	遺構/ (発掘区)	層位	遺物№	点数	分類	器種	部位	文様ほか	備考
Ⅲ-6	1	13	H-1	覆土5	305	1	Ⅱb	深鉢	胴	隆帯上指頭押捺・不整燃糸文・LR縄文	
Ⅲ-6	2	13	H-1	覆土5	645	2	Ⅱb	深鉢	胴	縄側面圧痕・燃糸文	
Ⅲ-6	3	13	H-1	覆土5	643	1	Ⅱb	深鉢	口縁	綾絡文・不整燃糸文・LR縄文	
Ⅲ-6	4	13	H-1	床面	298	2	Ⅱb	深鉢	口縁	貝殻条痕・LR縄文	H-5№3と同一
Ⅲ-6	5	13	H-1	床面	389	1	Ⅱb	深鉢	口縁	隆帯上刺突列・縄側面圧痕・羽状縄文	
Ⅲ-6	6	13	H-1	覆土5	296・319・323	3	Ⅱb	深鉢	口縁	縄側面圧痕・羽状縄文・燃糸文(すだれ状縄文)	
Ⅲ-6	7	13	H-1	覆土4	487	2	Ⅱb	深鉢	口縁	縄側面圧痕・綾絡文・燃糸文・内面ミガキ	
Ⅲ-6	8	13	H-1	覆土4	487	3	Ⅱb	深鉢	口～胴	縄側面圧痕・綾絡文・燃糸文・内面ミガキ	同一個体
				覆土5	569・645	9					
				覆土	757	1					
Ⅲ-6	9	13	H-1	覆土5	569	1	Ⅱb	深鉢	口縁	縄側面圧痕・羽状縄文・燃糸文(すだれ状縄文)	同一個体
				床面	194・214	2					
Ⅲ-6	10	13	H-1	覆土5	569	2	Ⅱb	深鉢	胴	羽状縄文・燃糸文(すだれ状縄文)	同一個体
				床面	207・225	4					
Ⅲ-6	11	13	H-1 HP-19	覆土1	771	1	Ⅱb	深鉢	口縁	縄側面圧痕・羽状縄文・燃糸文(すだれ状縄文)、内面ミガキ	
Ⅲ-6	12	13	H-1 HP-3	覆土1	753	1	Ⅱb	深鉢	胴	羽状縄文・燃糸文(すだれ状縄文)、内面ミガキ	
Ⅲ-6	13	13	H-1	覆土5	569	2	Ⅱb	深鉢	胴	羽状縄文・燃糸文(すだれ状縄文)	同一個体
				床面	156・168・198	3					
Ⅲ-6	14	13	H-1	覆土5	182・183・188・569	6	Ⅱb	深鉢	胴	羽状縄文・燃糸文(すだれ状縄文)	同一個体
				床面	172・204	2					
Ⅲ-6	15	13	H-1	覆土4	487	1	Ⅱb	深鉢	口～底	縄側面圧痕・羽状縄文・燃糸文(すだれ状縄文)/口径15.1cm・底径8.2cm・器高25.0cm	同一個体
				覆土5	3	41					
Ⅲ-6	16	13	H-1	覆土4	687	2	Ⅲa	深鉢	口縁	口唇上縄文押捺・LR縄文	
Ⅲ-6	17	13	H-1	覆土4	727	1	Ⅲa	深鉢	口縁	口唇上縄文押捺・LR縄文	
Ⅲ-6	18	13	H-1	覆土4	690	2	Ⅳa	深鉢	口縁	縄線/RI縄文	
Ⅲ-6	19	13	H-1	覆土2	525	2	Ⅳa	深鉢	口～底	縄線・LR縄文/口径(15.0)cm・底径7.0cm・器高(20.9)cm	同一個体
				覆土3	438・484・485・526・528・596	20					
				覆土4	486・530・602	9					

表Ⅲ-4 遺構出土掲載土器一覽(2)

挿図 番号	掲載 番号	モノクロ 写真図 版番号	遺構/ (発掘区)	層位	遺物№	点 数	分類	器種	部位	文様ほか	備考
Ⅲ-7	20	14	H-1	覆土3 覆土4	601・685 689・690	3 3	IVa	深鉢	口～胴	貼付帯上LR縄文・LR縄文 貼付帯上LR縄文・LR縄文	
Ⅲ-7	21	14	H-1	覆土3	528	1	IVa	深鉢	口～胴	貼付帯上LR縄文・LR縄文	
Ⅲ-7	22	14	H-1 (H37)	覆土4 II	440 6	1 3	IVa	深鉢	口～胴	貼付帯上LR縄文・LR縄文 文/口径14.5cm	
Ⅲ-7	23	14	H-1	覆土3 覆土4	528 690	1 1	IVa	深鉢	胴	貼付帯上LR縄文・LR縄文	
Ⅲ-7	24	14	H-1	覆土4	443	3	IVa	深鉢	胴	貼付帯上LR縄文・LR縄文	
Ⅲ-7	25	14	H-1	覆土3 覆土4	448 728	1 3	IVa	深鉢	胴	貼付帯上LR縄文・LR縄文	
Ⅲ-7	26	14	H-1	覆土3	485	2	IVa	深鉢	口縁	貼付帯(横走・曲)上LR縄文	
Ⅲ-7	27	14	H-1	覆土3 覆土4	448 533・567	1 2	IVa	深鉢	口縁	LR縄文	
Ⅲ-7	28	14	H-1	覆土4	568	7	IVa	深鉢	口縁	口唇上縄文押捺・LR縄文 RL縄文	
Ⅲ-7	29	14	H-1	覆土4	468・567	2	IVa	深鉢	口縁	LR縄文	
Ⅲ-7	30	14	H-1	覆土4	429・430・ 533	4	IVa	深鉢	底	LR縄文/底径6.5cm	
Ⅲ-7	31	14	H-1	覆土3 覆土4	563 446・533・ 567・568	1 33	IVa	深鉢	口～底	RL縄文/底部撫痕 口径(15.0)cm・底径 7.0cm・器高(20.9)cm	
Ⅲ-7	32	14	H-1	覆土3	598	6	IVa	深鉢	口縁	無文	
Ⅲ-7	33	14	H-1	覆土3 覆土4	685 447	4 5	IVa	深鉢	底	無文/底径6.5cm	
Ⅲ-7	34	14	H-1	覆土4	488・533・ 689	4	IVa	深鉢	胴	連携S字帯縄文・連続刺突	
Ⅲ-7	35	14	H-1	覆土3	532	1	IVa	深鉢	胴	LR縄文	同一個体か
Ⅲ-7	36	14	H-1	覆乱	524	2					
Ⅲ-7	37	14	H-1	覆土3	598	1	IVa	深鉢	底	台	
Ⅲ-7	37	14	H-1	覆土4	534	1	IVb	深鉢	口縁	無文	
Ⅲ-7	38	14	H-1	覆土4	487	1	土製品 (IIb)	土製円盤		撫糸文/4.6×4.4× 0.9cm・13.5g	
Ⅲ-12	1	17	H-2	覆土6	7	6	IIb	深鉢	口縁	縄側面圧痕・羽状縄文・ 撫糸文(すだれ状縄文)、 内面ミガキ	同一個体
Ⅲ-12	2	17	H-2	床面	1	2	IIb	深鉢	胴	撫糸文(磨滅)	
Ⅲ-12	3	17	H-2	覆土5	53	8	IIb	深鉢	口～胴	縄側面圧痕・綾織文・撫 糸文、内面ミガキ	
Ⅲ-12	4	17	H-2	覆土3	71	1	IVa?	深鉢	口縁	RLR複筋縄文	
Ⅲ-14	1	17	H-3	床面	1・2	104	IIb	深鉢	口～胴	撫糸文/口径15.1cm・底 径8.2cm・器高25.0cm	
Ⅲ-14	1	17	H-4 HF-1	焼土	14	4	IIb	深鉢	胴	撫糸文	
Ⅲ-16	1	18	H-5	覆土1	53	1	IIb	深鉢	胴	隆帯上指頭押捺・LR縄文	
Ⅲ-16	2	18	H-5	覆土1	52	2	IIb	深鉢	胴	隆帯上指頭押捺・綾織 文・縄文	
Ⅲ-16	3	18	H-5	床面	28	3	IIb	深鉢	口縁	貝殻条痕・LR縄文	H-1&4と同一
Ⅲ-16	4	18	H-5	覆土4	14	3	IIb	深鉢	胴	貝殻条痕・撫糸文	
Ⅲ-16	5	18	H-5	覆土1	52	1	IIb	深鉢	口縁	縄側面圧痕・撫糸文	
Ⅲ-16	6	18	H-5	覆土3	45	1	IIb	深鉢	胴	撫糸文	
Ⅲ-16	7	18	H-5 HP-5	覆土2	101	1	IIb	深鉢	胴	羽状縄文・撫糸文(すだ れ状縄文)	
Ⅲ-16	8	18	H-5	覆土1	52	5	IIb	深鉢	底	LR縄文(底面含む)/底径 7.8cm	
Ⅲ-16	9	18	H-5	覆土1	54	1	IVa	広口壺?	胴	曲線帯状文・充填縄文	
Ⅲ-20	1	19	H-6	床面	1	1	IIb	深鉢	胴	撫糸文	

※ 表中の太横罫線は各住居跡の区切りを示す。



表Ⅲ-5 遺構出土掲載石器一覧(1)

挿図 番号	掲載 番号	モノクロ 写真図 版番号	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考
								長さ	幅	厚さ		
Ⅲ-8	39	15	H-1	覆土4	573	石鏃	頁岩	2.9	1.3	0.5	1.5	
Ⅲ-8	40	15	H-1	覆土4	697	石鏃	頁岩	(3.0)	1.2	0.5	1.5	
Ⅲ-8	41	15	H-1	覆土4	698	石鏃	頁岩	4.0	1.4	0.8	3.8	
Ⅲ-8	42	15	H-1	覆土4	572	石鏃	頁岩	5.7	1.4	0.6	5.4	
Ⅲ-8	43	15	H-1	覆土5	267	石鏃	頁岩	3.2	1.6	0.4	1.9	
Ⅲ-8	44	15	H-1	覆土4	699	石槍・ナイフ類	頁岩	6.1	4.2	1.2	18.8	
Ⅲ-8	45	15	H-1	覆土4	574	つまみ付きナイフ	頁岩	(6.4)	3.3	1.1	12.3	
Ⅲ-8	46	15	H-1	床面	247	つまみ付きナイフ	黒曜石	7.2	3.9	1.1	27.2	
Ⅲ-8	47	15	H-1	覆土5	621	つまみ付きナイフ	頁岩	(6.6)	3.4	1.1	11.2	
Ⅲ-8	48	15	H-1	床面	382	スクレイパー	頁岩	7.1	3.8	1.2	18.0	
Ⅲ-8	49	15	H-1	覆土4	576	スクレイパー	頁岩	5.6	4.1	0.9	17.1	
Ⅲ-8	50	15	H-1	覆土3	537	スクレイパー	頁岩	(6.0)	3.6	1.6	26.3	
Ⅲ-8	51	15	H-1	覆土4	576	スクレイパー	頁岩	6.9	4.2	1.1	19.9	
Ⅲ-8	52	15	H-1	覆土5	622	スクレイパー	頁岩	7.5	3.7	1.4	25.5	
Ⅲ-8	53	15	H-1	覆土4	575	スクレイパー	頁岩	6.7	5.1	1.2	41.2	
Ⅲ-8	54	15	H-1	覆土4	679	スクレイパー	頁岩	4.6	7.2	1.7	47.0	
Ⅲ-9	55	15	H-1	覆土4	455	石斧	片岩	10.1	4.0	1.9	115.4	
Ⅲ-9	56	15	H-1	床面	228	扁平打製石器	安山岩	6.6	14.6	1.9	213.1	
Ⅲ-9	57	15	H-1	床面	117	扁平打製石器	砂岩	7.9	15.9	2.8	432.0	
Ⅲ-9	58	15	H-1	覆土5	288	扁平打製石器	安山岩	8.6	15.6	2.1	280.6	
Ⅲ-9	59	15	H-1	床面	151	扁平打製石器	安山岩	6.9	15.5	1.9	277.7	2点接合
				覆土4	702							
Ⅲ-9	60	16	H-1	覆土5	85	扁平打製石器	安山岩	7.5	14.4	3.0	397.1	2点接合 被熱
				覆土5	86							
Ⅲ-9	61	16	H-1	床面	28	扁平打製石器	安山岩	6.8	16.1	2.6	333.8	2点接合
				覆土4	577							
Ⅲ-9	62	16	H-1	覆土3	611	扁平打製石器	安山岩	5.8	14.6	2.6	276.8	2点接合
				H-5	覆土1	76						
Ⅲ-9	63	16	H-1	覆土3	612	扁平打製石器	カンラン岩	7.8	18.2	2.9	583.0	2点接合
				H-1 HP-18	覆土	767						
Ⅲ-9	64	16	H-1	床面	105	扁平打製石器	安山岩	(9.3)	8.2	1.7	163.6	2点接合
				覆土5	648							
Ⅲ-10	65	16	H-1 HP-15	覆土1	760	北海道式石冠	安山岩	(7.2)	(6.3)	(5.2)	220.6	
Ⅲ-10	66	16	H-1	覆土4	637	すり石	砂岩	5.8	11.7	3.2	313.5	
Ⅲ-10	67	16	H-1	床面	374	すり石	砂岩	8.3	6.3	3.4	261.2	たたき石?
Ⅲ-10	68	16	H-1	床面	100	すり石	砂岩	10.5	12.8	4.5	734.0	
Ⅲ-10	69	16	H-1 HP-13	覆土1	758	たたき石	泥岩	12.7	7.6	4.1	482.0	
Ⅲ-10	70	16	H-1	覆土4	701	たたき石	凝灰岩	13.0	6.7	3.7	419.0	
				覆土4	741							
Ⅲ-10	71	16	H-1	床面	208	たたき石	凝灰岩	9.4	7.8	2.1	193.7	
Ⅲ-10	72	16	H-1 HP-16	覆土1	762	軽石製品	軽石	9.7	7.8	5.5	94.8	
Ⅲ-10	73	16	H-1	床面	199	軽石製品	軽石	6.9	10.2	4.5	92.3	

表Ⅲ-6 遺構出土掲載石器一覧(2)

挿図 番号	掲載 番号	モノクロ 写真図 版番号	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考
								長さ	幅	厚さ		
Ⅲ-12	5	17	H-2	覆土4	75	スクレイパー	頁岩	(5.2)	4.0	1.1	19.2	
Ⅲ-12	6	17	H-2	覆土4	76	リフレイク	頁岩	7.6	5.2	1.8	46.2	
Ⅲ-14	2	17	H-3	床面	15	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.6	2.7	1.3	16.5	
Ⅲ-14	2	17	H-4	床面	3	石槍・ナイフ類	頁岩	(8.1)	3.1	1.5	35.1	
Ⅲ-14	3	17	H-4	覆土2	2	扁平打製石器	安山岩	14.4	7.3	1.7	250.9	
Ⅲ-14	4	17	H-4	覆土2	1	オリ石	安山岩	(4.3)	(14.8)	(5.4)	353.5	
Ⅲ-19	10	18	H-5	覆土4	93	石鏃	頁岩	2.8	1.3	0.4	1.1	
Ⅲ-19	11	18	H-5	覆土1	74	石鏃	頁岩	6.2	1.3	0.6	2.7	つまみ付きナイフ?
Ⅲ-19	12	18	H-5	覆土1	56	つまみ付きナイフ	頁岩	4.8	3.8	0.6	4.3	
Ⅲ-19	13	18	H-5	覆土1	56	つまみ付きナイフ	頁岩	(4.9)	2.8	0.8	9.5	
Ⅲ-19	14	18	H-5	覆土1	56	つまみ付きナイフ	頁岩	6.2	4.7	1.0	13.5	
Ⅲ-19	15	18	H-5	床面	2	スクレイパー	頁岩	7.9	3.3	1.1	18.7	
Ⅲ-19	16	18	H-5	覆土1	57	スクレイパー	頁岩	7.5	4.7	1.3	36.9	
Ⅲ-19	17	18	H-5	覆土1	57	スクレイパー	頁岩	5.3	3.8	0.7	8.3	
Ⅲ-19	18	18	H-5	覆土1	57	スクレイパー	頁岩	(5.8)	3.5	1.1	21.2	
Ⅲ-19	19	18	H-5	覆土1	57	スクレイパー	頁岩	5.4	3.9	1.6	29.3	
Ⅲ-19	20	18	H-5	覆土1	60	扁平打製石器	砂岩	5.1	14.6	2.6	314.9	
Ⅲ-19	21	18	H-5	覆土1	9	扁平打製石器	安山岩	9.7	18.7	1.3	231.0	
			H-5	覆土1	13							
Ⅲ-19	22	18	H-5	覆土4	15	たたき石	凝灰岩	15.9	6.9	4.2	406.5	
Ⅲ-19	23	18	H-5	覆土1	58	たたき石	泥岩	14.1	6.6	2.9	342.6	
Ⅲ-20	1	19	FC-1	Ⅱ	1	両面調整石器	頁岩	12.3	7.0	4.1	241.2	

※ 表中の太横罫線は各住居跡の区切りを示す。

表Ⅲ-7 フローテーション結果

試料 番号	遺構	層位	体積 (ml)	乾燥重量 (g)	残渣 (g)	浮遊物 (g)	回収遺物(g)					回収遺物 石器点数	備考
							土器	石器	礫	炭化物	種子		
0	H-1	覆土4層	2,700	1,760	57.6	0.1	0.2	11.2		0.1	0.0	479	チップ回収
1	H-1 HF-1	焼土	2,200	1,710	27.0	13.6	0.9	0.0		12.9	0.0	5	
2	H-2 周溝	覆土	1,100	920	44.4	0.0		31.3		0.0		2304	チップ回収
3	H-3	覆土	3,300	2,130	21.9	48.3		0.0	9.6	49.5		31	屋根土?
4	H-4 HF-1	焼土	6,500	4,640	403.4	28.4	100.4	2.7	10.6	28.6	0.0	418	
5	H-5 HF-1	焼土	700	400	6.4	25.3	1.4			25.9	0.5		
合計			16,500	11,560	560.7	115.7	102.9	45.2	20.2	117.0	0.5	3237	

## IV 包含層出土の遺物

## 1 概要(図IV-1、表IV-1)

遺物包含層からは、土器・石器等計 1,356 点の遺物が出土した。内訳は下表IV-1 の通り、土器等 711 点・石器等 645 点である。

分類別では、土器はⅡ群 b 類(約 43%)とⅣ群 a 類(約 55%)がほとんどである。ほかにⅢ群 a 類・Ⅳ群 b 類・土製品が少数出土している。Ⅱ群 b 類は円筒下層 b2 式・c 式・d1 式があり、d1 式とみられる土器片が最も多い。Ⅳ群 a 類は天祐寺式など縄文後期初頭の土器群である。土製品は焼成粘土塊と土製円盤がある。

石器のうち、剥片石器は石鏃・石槍・ナイフ類・つまみ付きナイフ・スクレイパー・両面調整石器がある。礫石器は石斧・たたき石・扁平打製石器・石鏃(扁平打製石器片か)がある。剥片は石器素材となるような 5cm 前後のものが目立つが、微細なものまでさまざまな大きさものが多数出土している。剥片の石材はほぼすべてが頁岩で、遺物包含層には黒曜石製の遺物は含まれない。

礫は、堅穴住居跡覆土と同様に頁岩や珪岩などの表面が平滑な形の整った楕円礫があるほか、不定形な礫も多く出土している。

層別ではⅡ層(黒色土)が約 80%を占め、Ⅲ層(漸移層)が約 5%、残りが攪乱や排土である。

出土遺物の分布状況を見ると、堅穴住居群のある北側調査区が1,303点と約 96%を占め、遺構が検出されなかった南側調査区は出土遺物も少なく、土器・石器等 53 点のみが出土した(土器はⅡ群 b 類が 2 点、Ⅳ群 a 類が 10 点、石器等は石槍・ナイフ類・つまみ付きナイフ・石斧がそれぞれ 1 点、二次加工ある剥片が 3 点、剥片 34 点、礫・礫片 1 点)。

発掘区別では、北側調査区の堅穴住居群の南の F・G35 区付近からⅣ群 a 類土器(201 点)や石器剥片等がややまとまって出土している。また堅穴住居群中の G37 区では、堅穴住居跡 H-4 の周辺からⅡ群 b 類土器(97 点)や焼成粘土塊(10 点)、石器剥片(43 点)など、計 164 点の遺物が出土している。H37 区では、堅穴住居跡 H-5 の周辺からⅡ群 b 類(23 点)・Ⅳ群 a 類(57 点)、スクレイパー(3 点)・石器剥片(62 点)など、計 148 点の遺物が出土している。

表IV-1 包含層出土層別遺物点数一覧

分類 層位	土 器					土器 計	石 器											石 器 計	総 計		
	Ⅱb	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳa	焼成粘土塊		石鏃・ナイフ類	つまみ付きナイフ	両面調整石器 スクレイパー	石核	R 剥片	U 剥片	剥片	石斧	たたき石	扁平打製石器	石鏃			礫・礫片	
I	12			23		35		1	2		1	36	2	1			3	46	81		
Ⅱ	242			359	12	2 615	3	4	3	10	1	16	5	383	2	3	3	48 481	1,096		
Ⅲ	4		1			5						3	62				2	67	72		
攪乱 排土 不明	46	1		7	2	56				6	2	2	3	25	1	2	1	9	51	107	
計	304	1	1	389	14	2 711	3	4	4	18	1	2	21	9	506	4	5	2	4	62 645	1,356

## 2 出土遺物

土器等(図IV-2、表IV-2、モノクロ図版 18)

21点図示した。Ⅱ群b類・Ⅲ群a類・Ⅳ群a類・土製品がある。

1～7は縄文時代前期後半、Ⅱ群b類の土器。このうち3・4・7は竪穴住居跡(H-4)周辺から出土したもの。1は円筒下層b式、2～4は円筒下層c式、5～7は円筒下層d1式に属するものとみられる。1はやや厚手で繊維の痕跡が目立つ。隆帯はやや薄い。2は緩やかに外反する口縁部に羽状縄文がめぐる。3も緩やかに外反する口縁部で、波状口縁の波頂部付近の破片である。縄線で区画された幅広の口縁部文様帯に撚り戻しの原体の縄文が施文されている。4は幅広の口縁部文様帯に結束羽状縄文が密に施されている。5・6は「すだれ状縄文」をなし、内面がよく磨かれている。6は底面にも捻糸文がみられる。7はやや粗い捻糸文が縦走する。

8は縄文時代中期前半、Ⅲ群a類の土器とみられる小片。隆帯と縄端圧痕が施されている。

9～20は縄文時代後期初頭、Ⅳ群a類の土器。9・10は口唇直下に縄線がめぐる。11は無文の角型口唇。ていねいに磨かれている。Ⅳ群b類の可能性もある。12はF35区とG35区のものに接合した。RL縄文が縦位に回転施文されている。器面にやや凹凸がある。13はやや薄い貼付帯がある。15は縦位に結節縄文が施されている。16・17の器壁は薄く、小型の深鉢形土器になるものと思われる。18・19は帯状沈線文が施されるもの。18は波状口縁の頂部付近とみられる。口唇直下に無文部がある。20は平底。同一個体の胴部にも縄文のみが施文されている。

21はⅡ群b類の土器片を再加工した土製円盤である。周縁部の一部を欠き折損しているが、周縁部の調整の跡が若干認められる。竪穴住居跡H-4付近から出土した。

石器等(図IV-3、表IV-3、モノクロ図版 19)

16点図示した。剥片石器は頁岩製がほとんどである。

22～24は有茎の石鏃。22・23は先端部が欠損する。基部のかえしは弱い。23は石鏃製作途中に石錐に転用された可能性がある。24は規則性のある細かい両面調整がていねいに施されている。

25・26は両面調整の石槍・ナイフ類。25は一部を欠損するが、茎が明瞭でかえしの湾曲がやや強いもの。一方26は基部を欠損するが、木葉形と思われる。

27は両面調整石器とした。珪質頁岩製で、一側縁がやや直線的である。

28～30はつまみ付きナイフ。28は薄い縦長の剥片が素材で、背面全体に規則性のある剥離が連続する。つまみ部も細かな調整で作出されている。29は黒曜石製。刃部は両側縁とも曲線である。30は両側縁の上部にわずかな抉りをいれてつまみ部に相当する部分を設けているものとみられる。

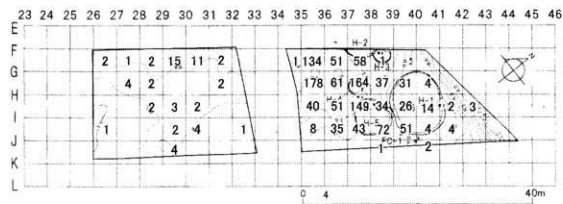
31～34はスクレイパー。31は背面両側縁に細かい調整が行われている。32は両面に粗い調整が施されており、刃部が直線的でない。33は厚めの剥片を素材としている。34は典型的なエンドスクレイパー。下端部が湾曲し一部原石面の残る剥片を素材とし、側縁の一部と下端部に細かい調整を行い刃部を作出している。

35・36は磨製石斧。35は泥岩製で、全面研磨されている。厚みのある撥形を呈しており、おおむね全形を保っているが、刃部は打撃を受けつづれ、側縁や表面の一部も欠落する。一側縁に撚り切り痕が残る。36は青みの強い片岩製。やや薄い短冊形を呈しているものと思われ、基部は欠損し表面も大きく剥落しているが、研磨された刃部が残存している。

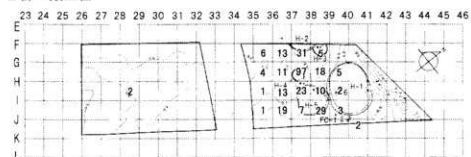
37は扁平打製石器。扁平な凝灰岩が用いられている。一側縁に敲打調整痕が連続し、幅の狭い擦り面がみられる。長軸端部にはうち欠きがみられる。

(阿部)

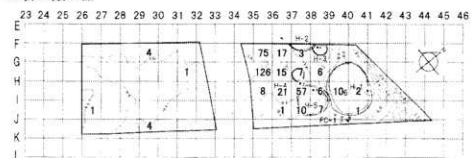
## 遺物合計



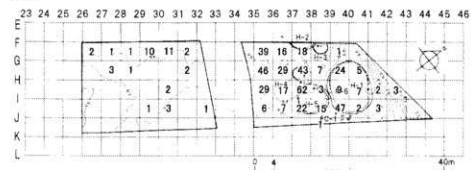
## II群b類土器



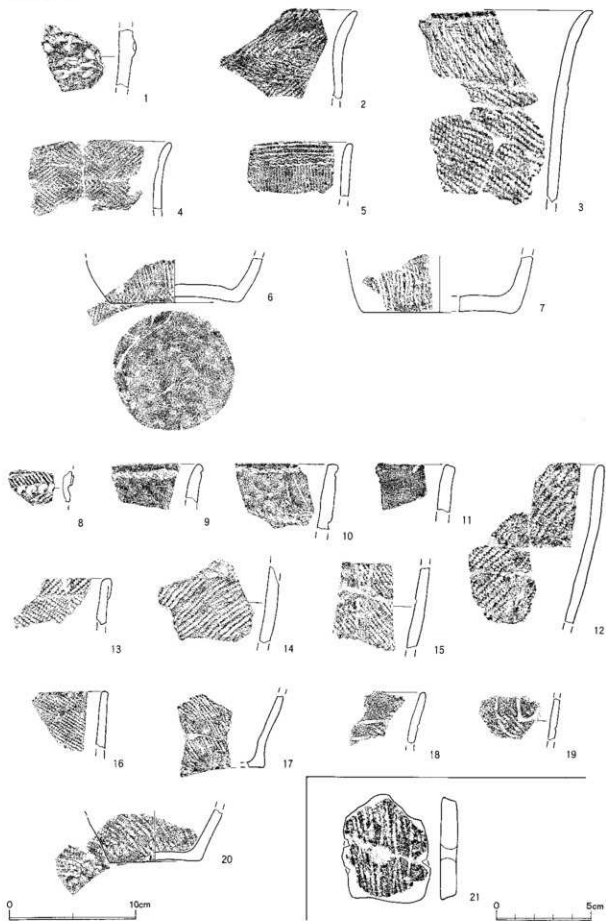
## IV群a類土器



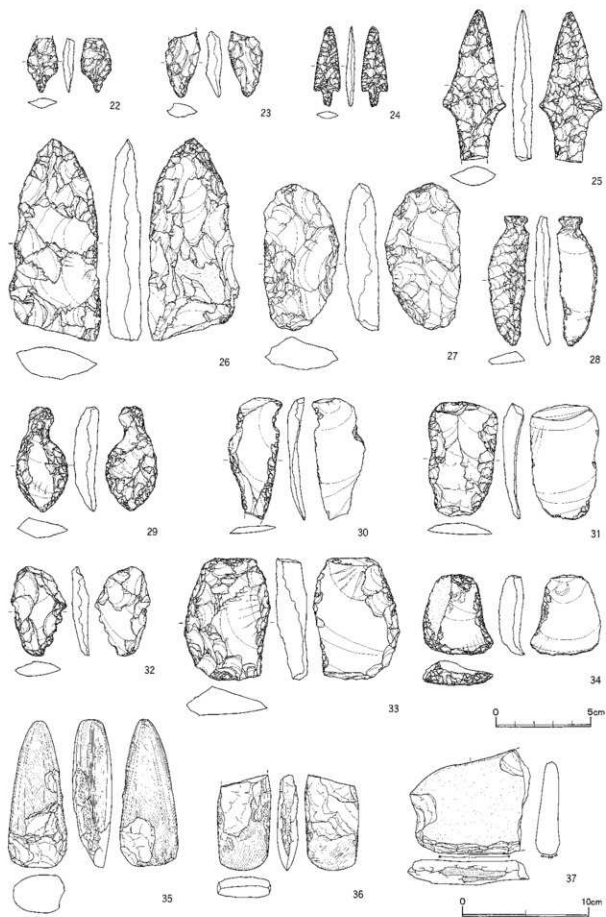
## 剥片



図IV-1 発掘区別遺物分布図



図IV-2 包含層出土の土器



図IV-3 包含層出土の石器

表Ⅳ-2 包含層出土掲載土器一覧

挿図 番号	掲載 番号	モノクロ 写真図 版番号	発掘 区	層 位	遺物No.	点 数	分類	器種	部位	文様ほか	備考
IV-2	1	18	G36	II	14	2	IIb	深鉢	胴	隆帯上指頭押捺・不整燃糸文	
IV-2	2	18	I38	II	12	1	IIb	深鉢	口縁	結束羽状縄文・LR縄文、内面ミガキ	
IV-2	3	18	G37	II	5	4	IIb	深鉢	口縁	縄側面圧痕・撚り戻しの斜行縄文・RLR複節縄文、内面ミガキ	H-4付近
IV-2	4	18	G37	II	8	4	IIb	深鉢	口縁	結束羽状縄文、内面ミガキ	H-4付近
IV-2	5	18	G39	攪乱	1	1	IIb	深鉢	口縁	縄側面圧痕・綾絡文・燃糸文、内面ミガキ	H-1No.8 と同一
IV-2	6	18	H37	II	7	4	IIb	深鉢	底	羽状縄文・燃糸文(すだれ状縄文)・底面燃糸文、内面ミガキ/底径10.0cm	
IV-2	7	18	G37	II	5・8	6	IIb	深鉢	底	燃糸文	H-4付近
IV-2	8	18	I38	攪乱	4	1	IIIa	深鉢	胴	隆帯上縄文押捺・縄端圧痕・RL縄文	
IV-2	9	18	G36	I	1	1	IVa	深鉢	口縁	縄側面圧痕・細沈線	
IV-2	10	18	G36	I	1	1	IVa	深鉢	口縁	縄側面圧痕	
IV-2	11	18	H36	II	3	1	IVa	深鉢	口縁	無文	
IV-2	12	18	F35 G35	II II	2 12	2 3	IVa	深鉢	口～ 胴	RL縄文	
IV-2	13	18	I38	II	29	2	IVa	深鉢	口縁	貼付帯上LR縄文・LR縄文	
IV-2	14	18	G38	II	1	1	IVa	深鉢	胴	RL縄文	
IV-2	15	18	G35	II	3・12	3	IVa	深鉢	胴	結節縄文	
IV-2	16	18	H37	II	6	1	IVa	深鉢	口縁	LR縄文	
IV-2	17	18	G35	II	1・12	2	IVa	深鉢	底	LR縄文	
IV-2	18	18	H35	I	1	1	IVa	深鉢	口縁	帯状沈線文・LR縄文	
IV-2	19	18	G35	II	12	1	IVa	深鉢	底	帯状沈線文・LR縄文	
IV-2	20	18	H37	II	6・7・13	5	IVa	深鉢	底	LR縄文	
IV-2	21	18	G37	II	8	2	土製品 (IIb)	土製円盤	燃糸文/ 5.8×4.7×0.9cm・18.8g		H-4付近

表Ⅳ-3 包含層出土掲載石器一覧

挿図 番号	掲載 番号	モノクロ 写真図 版番号	発掘 区	層 位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考
								長さ	幅	厚さ		
IV-3	22	19	G40	II	3	石鏃	頁岩	(2.9)	1.6	0.6	2.2	
IV-3	23	19	H37	II	14	石鏃	頁岩	(3.5)	1.8	0.8	4.1	
IV-3	24	19	H40	II	7	石鏃	頁岩	4.2	1.4	0.5	1.9	
IV-3	25	19	G28	II	1	石槍・ナイフ類	頁岩	(7.9)	3.3	1.1	19.5	
IV-3	26	19	G38	II	3	石槍・ナイフ類	頁岩	(10.7)	4.8	1.8	89.4	
IV-3	27	19	F34	II	1	両面調整石器	珧質頁岩	7.7	4.0	1.8	56.7	
IV-3	28	19	F36	II	5	つまみ付きナイフ	頁岩	6.8	2.1	0.9	8.8	
IV-3	29	19	G27	I	1	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.5	2.7	1.2	14.1	
IV-3	30	19	I29	II	2	つまみ付きナイフ	頁岩	(6.4)	2.8	1.0	9.0	
IV-3	31	19	I37	II	3	スクレイパー	頁岩	6.1	3.6	1.1	17.8	
IV-3	32	19	F36	II	6	スクレイパー	頁岩	4.7	2.9	0.9	10.0	
IV-3	33	19	H37	II	3	スクレイパー	頁岩	6.4	4.5	1.6	46.5	
IV-3	34	19	排土	8	スクレイパー	頁岩	4.2	3.7	1.3	16.7		
IV-3	35	19	F35	II	16	石斧	泥岩	11.7	4.6	3.1	222.8	
IV-3	36	19	F36	II	10	石斧	片岩	(7.6)	4.2	1.6	80.9	
IV-3	37	19	排土	4	扁平打製石器	凝灰岩	(8.2)	(9.5)	1.9	170.2		



## V 自然科学的分析

### 1 木古内町木古内2遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼 保子 (株式会社 パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

木古内2遺跡は上磯郡木古内町に所在する遺跡である。縄文時代前期後半の大型住居跡、小型住居跡などが検出されている。ここでは、大型住居跡から出土した炭化材6点の樹種同定を行った。

#### 2. 試料と方法

試料は、大型住居跡H-1の床面から3点(No.1~3)、同じく大型住居跡H-5の焼土から1点(No.4)および床面から2点(No.5・6)の合計6点の出土炭化材である。

方法は、肉眼もしくは実体顕微鏡で木取りの確認および年輪数の計測後、手あるいはカッターナイフを用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、試料を作製した。直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査型電子顕微鏡(日本電子製 JSM-5900LV型)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

#### 3. 結果

樹種同定の結果、広葉樹のクリとシナノキ属の2分類群が確認された。木取りはすべて2cm角程度の破片状であったため、不明である。No.5のシナノキ属のみ、最外年輪が確認された。結果の一覧を表1に示す。

表V-1 木古内2遺跡出土炭化材樹種同定

試料No.	採取遺構/発掘区	層位	樹種	形状	年輪数
1	H-1 HC-1	床面	クリ	破片	13+
2	H-1 HC-2	床面	クリ	破片	2+
3	H-1 HC-3	床面	クリ	破片	10+
4	H-5 HF-1	焼土	クリ	破片	14+
5	H-5 HC-2	床面	シナノキ属	破片(最外あり)	35+
6	H-5 HC-4	床面	クリ	破片	9+

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1)クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版 1a-1c(No.1)・2a-2c(No.3)

大型の道管が年輪界に並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。

(2)シナノキ属 *Tilia* シナノキ科 図版 3a-3c(No.5)

やや小型の道管が単独もしくは放射方向に数個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単

一で、道管全体にらせん肥厚が明瞭にみられる。軸方向柔組織は短接線状～線状となる。放射組織は同性で、1～5列幅となる。

シナノキ属は温帯に分布する落葉高木で、シナノキやボダイジュなど5種がある。シナノキの材は軽軟で切削加工が容易であり、狂いが少ないが、耐朽性はやや低い。

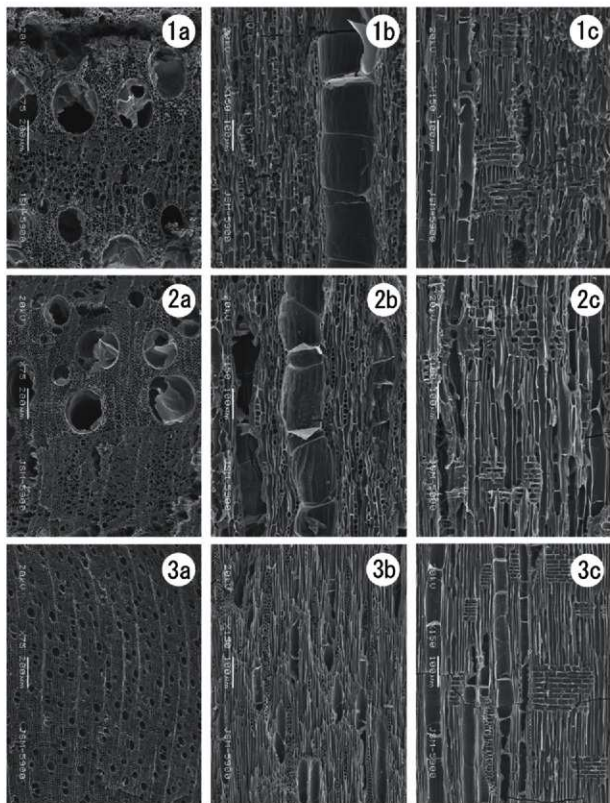
#### 4. まとめ

クリ、シナノキ属ともに温帯に分布する落葉広葉樹であり、いずれも山地にふつうに生育する樹種である。北海道の縄文時代では建築材としてクリ、クワ属、トネリコ属が多く利用される傾向にある(山田1993)。クリは北海道南西部以南に分布しており、主に本州で縄文時代における建築材として最も一般的な材である。シナノキ属は北海道ではシナノキとオオバボダイジュが分布しており、材の他に強靱な樹皮の繊維を利用することも多い。検出されたシナノキ属は年輪幅が非常に狭いことから、肥大成長が遅く、周囲に森林が生い茂るなど環境の良くない状況下で生育したと推測される。

木古内2遺跡と同じ木古内町内に所在する新道4遺跡では、縄文時代後期の住居址内でトネリコ属やイチイ属、ニレ属などとともにシナノキ属とクリも検出されているほか、道内各地の遺跡でも縄文から近世までの広い時代で確認されている(山田1993)。したがって、これらの樹種は本遺跡周辺でも一般的であったと思われる。

#### 引用文献

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史—  
一、植生史研究特別第1号、242p、日本植生史学会。



図版V-1 木古内2遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クリ (No.1)、2a-2c. クリ (No.3)、3a-3c. シナノキ属 (No.5)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

## 2 木古内町木古内2遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

木古内2遺跡は、北海道木古内町字本町 456 番 9 ほか（北緯  $41^{\circ} 41' 02''$ 、東経  $140^{\circ} 26' 21''$ ）に所在する。測定対象試料は、堅穴住居跡出土木炭 10 点（1:IAAA-102294～10:IAAA-102303）である（表V-2）。

### 2 測定の意義

同遺跡内の各遺構の年代を知り、新旧関係や出土遺物が示す時期との整合性を検討する。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA:Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常  $1\text{mol}/\ell$ （1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（ $\text{CO}_2$ ）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

3MV タンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）、 $^{14}\text{C}$  濃度（ $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$  年代（Libby Age; yrBP）は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい（ $^{14}\text{C}$  が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（ $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上）の場合

Modernとする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下一桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を使い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## 6 測定結果

堅穴住居跡H-1出土試料の  $^{14}\text{C}$  年代は、HF-1 焼土の 1 が  $4690 \pm 30\text{yrBP}$ 、HF-2 焼土の 2 が  $4720 \pm 30\text{yrBP}$ 、HC-1 床面の 3 が  $4680 \pm 30\text{yrBP}$  である。3 点の値は誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) の範囲で重なり、近い年代を示す。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、1 が  $3519 \sim 3377\text{cal BC}$ 、2 が  $3626 \sim 3380\text{cal BC}$ 、3 が  $3516 \sim 3374\text{cal BC}$  の間に各々複数の範囲で示される。

堅穴住居跡H-2出土試料の  $^{14}\text{C}$  年代は、覆土 6 層上位の 4 が  $4770 \pm 30\text{yrBP}$ 、覆土 6 層下位の 5 が  $4680 \pm 30\text{yrBP}$  である。2 点はおおむね近い値であるが、若干年代差が見られる。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、4 が  $3634 \sim 3525\text{cal BC}$ 、5 が  $3516 \sim 3374\text{cal BC}$  の間に各々複数の範囲で示される。

堅穴住居跡H-3床面出土試料 6 の  $^{14}\text{C}$  年代は  $4830 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は  $3653 \sim 3536\text{cal BC}$  の間に 3 つの範囲で示される。

堅穴住居跡H-4出土試料の  $^{14}\text{C}$  年代は、床面直上の 7 が  $4770 \pm 30\text{yrBP}$ 、HF-1 焼土の 8 が  $4650 \pm 30\text{yrBP}$  である。2 点はおおむね近い値であるが、若干年代差が認められる。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、7 が  $3634 \sim 3526\text{cal BC}$ 、8 が  $3498 \sim 3369\text{cal BC}$  の間に各々複数の範囲で示される。

堅穴住居跡H-5出土試料の  $^{14}\text{C}$  年代は、HF-1 焼土の 9 が  $4800 \pm 30\text{yrBP}$ 、HC-4 床面の 10 が  $4690 \pm 30\text{yrBP}$  である。2 点はおおむね近い値であるが、若干年代差がある。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、9 が  $3639 \sim 3533\text{cal BC}$ 、10 が  $3517 \sim 3376\text{cal BC}$  の間に各々複数の範囲で示される。

10 点の試料はいずれも縄文時代前期後葉頃に相当する年代値となっている。

試料の炭素含有率はすべて 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363  
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360  
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

表V-2 木古内2遺跡放射性炭素年代測定試料一覧

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (‰)
IAAA-102294	1	遺構:H-1、HF-1 層位:焼土	木炭	AAA	-26.22 ± 0.51	4,690 ± 30	55.78 ± 0.21
IAAA-102295	2	遺構:H-1、HF-2 層位:焼土	木炭	AAA	-26.47 ± 0.40	4,720 ± 30	55.59 ± 0.21
IAAA-102296	3	遺構:H-1、HC-1 層位:床面	木炭	AAA	-26.42 ± 0.44	4,680 ± 30	55.87 ± 0.21
IAAA-102297	4	遺構:H-2 層位:覆土6層上位	木炭	AAA	-27.48 ± 0.66	4,770 ± 30	55.24 ± 0.21
IAAA-102298	5	遺構:H-2 層位:覆土6層下位	木炭	AAA	-27.94 ± 0.39	4,680 ± 30	55.87 ± 0.21
IAAA-102299	6	遺構:H-3 層位:床面	木炭	AAA	-27.09 ± 0.57	4,830 ± 30	54.83 ± 0.22
IAAA-102300	7	遺構:H-4 層位:床面直上	木炭	AAA	-26.18 ± 0.39	4,770 ± 30	55.23 ± 0.21
IAAA-102301	8	遺構:H-4、HF-1 層位:焼土	木炭	AAA	-28.29 ± 0.55	4,650 ± 30	56.07 ± 0.21
IAAA-102302	9	遺構:H-5、HF-1 層位:焼土	木炭	AaA	-27.56 ± 0.53	4,800 ± 30	55.04 ± 0.21
IAAA-102303	10	遺構:H-5、HC-4 層位:床面	木炭	AaA	-24.68 ± 0.30	4,690 ± 30	55.81 ± 0.21

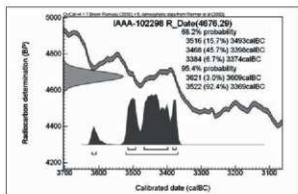
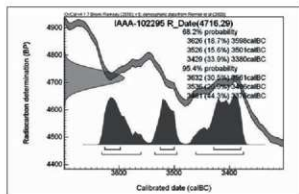
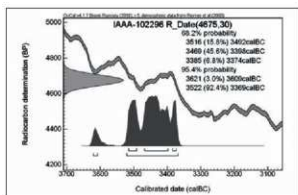
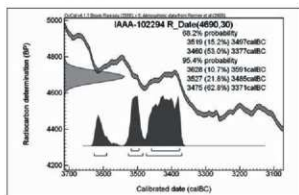
表V-3 木古内2遺跡放射性炭素年代測定結果(1)

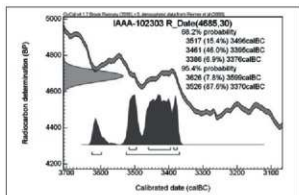
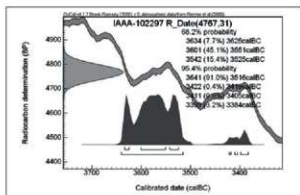
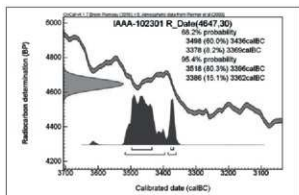
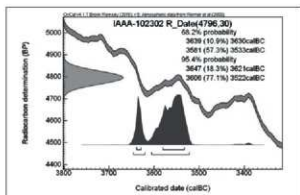
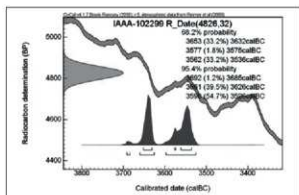
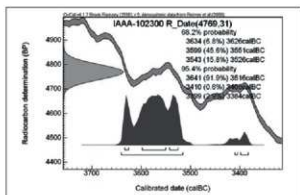
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用(yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102294	4,710 ± 30	55.64 ± 0.21	4,690 ± 30	3519calBC - 3497calBC (15.2%) 3460calBC - 3377calBC (53.0%)	3628calBC - 3591calBC (10.7%) 3527calBC - 3485calBC (21.8%) 3475calBC - 3371calBC (62.8%)
IAAA-102295	4,740 ± 30	55.42 ± 0.20	4,716 ± 29	3626calBC - 3598calBC (18.7%) 3526calBC - 3501calBC (15.6%) 3429calBC - 3380calBC (33.9%)	3632calBC - 3561calBC (30.5%) 3536calBC - 3496calBC (20.6%) 3461calBC - 3376calBC (44.3%)
IAAA-102296	4,700 ± 30	55.71 ± 0.20	4,675 ± 30	3516calBC - 3492calBC (15.8%) 3469calBC - 3398calBC (45.6%) 3385calBC - 3374calBC (6.8%)	3621calBC - 3609calBC (3.0%) 3522calBC - 3369calBC (92.4%)
IAAA-102297	4,810 ± 30	54.96 ± 0.20	4,767 ± 31	3634calBC - 3625calBC (7.7%) 3601calBC - 3551calBC (45.1%) 3542calBC - 3525calBC (15.4%)	3641calBC - 3516calBC (91.0%) 3422calBC - 3419calBC (0.4%) 3411calBC - 3405calBC (0.8%) 3399calBC - 3384calBC (3.2%)
IAAA-102298	4,720 ± 30	55.53 ± 0.20	4,676 ± 29	3516calBC - 3493calBC (15.7%) 3468calBC - 3398calBC (45.7%) 3384calBC - 3374calBC (6.7%)	3621calBC - 3609calBC (3.0%) 3522calBC - 3369calBC (92.4%)

表V-4 木古内2遺跡放射性炭素年代測定結果(2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用(yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102299	4,860 $\pm$ 30	54.60 $\pm$ 0.21	4,826 $\pm$ 32	3653calBC - 3632calBC (33.2%)	3692calBC - 3685calBC (1.2%)
				3577calBC - 3575calBC (1.8%)	3661calBC - 3626calBC (39.5%)
IAAA-102300	4,790 $\pm$ 30	55.09 $\pm$ 0.21	4,769 $\pm$ 31	3562calBC - 3536calBC (33.2%)	3598calBC - 3526calBC (54.7%)
				3634calBC - 3626calBC (6.8%)	3641calBC - 3516calBC (91.9%)
				3599calBC - 3551calBC (45.6%)	3410calBC - 3405calBC (0.6%)
IAAA-102301	4,700 $\pm$ 30	55.70 $\pm$ 0.20	4,647 $\pm$ 30	3543calBC - 3526calBC (15.8%)	3399calBC - 3384calBC (2.9%)
				3498calBC - 3436calBC (60.0%)	3518calBC - 3396calBC (80.3%)
IAAA-102302	4,840 $\pm$ 30	54.75 $\pm$ 0.20	4,796 $\pm$ 30	3378calBC - 3369calBC (8.2%)	3386calBC - 3362calBC (15.1%)
				3639calBC - 3630calBC (10.9%)	3647calBC - 3621calBC (18.3%)
IAAA-102303	4,680 $\pm$ 30	55.85 $\pm$ 0.21	4,685 $\pm$ 30	3581calBC - 3533calBC (57.3%)	3606calBC - 3522calBC (77.1%)
				3517calBC - 3496calBC (15.4%)	3626calBC - 3599calBC (7.8%)
				3461calBC - 3395calBC (46.0%)	3526calBC - 3370calBC (87.6%)
				3386calBC - 3376calBC (6.9%)	

図V-1 暦年校正年代グラフ







## VI まとめ

### 1 遺構

平成22年度の発掘調査で検出された遺構は、堅穴住居跡6軒、剥片集中1か所である。遺構は全て調査区北東端の、地形が急に落ち込む段丘の縁に集中しており、堅穴住居群は調査区北側のこの台地の縁に沿って西方面(山側)へ続いていると思われる。

堅穴住居跡は大型のものが3軒(H-1・2・5)、小型のものが3軒(H-3・4・6)あり、それぞれ近接している。またH-2とH-3、H-5とH-6は切り合っている。出土遺物や住居の形態・規模などから、全て縄文時代前期後半、円筒土器下層式期に構築されたものと推定される。以下、各住居跡の特徴を記す。

H-1とH-2は、どちらも深さ約1.3m、壁の立ち上がり角度が急であり、ほぼ同じ規模の住居跡であると思われる。覆土の堆積の仕方も類似しており、どちらも覆土上層はⅡ層と火山灰層の自然堆積層である。両者で異なる部分は、H-2床面壁際で検出された周溝がH-1にはなかったことと、H-1で多くみつかった柱穴がH-2ではみつからなかったことである。ただH-2の柱穴は、未調査部分に残されている可能性もある。またH-1の覆土4層からは縄文時代後期初頭の土器片と表面が平滑な槽丹礫が多数出土した。廃棄された住居の大きな凹みが後世の人々に利用された結果であろう。このほかH-1床面中央から砂を埋め込んだ小土坑が2基検出されており、木古内町内の類例等について後述する。

H-3とH-4は平面はほぼ円形で、直径、深さともよく似ている。H-1・2から比較すると非常に小さく、焼土や柱穴、炭化材等を確認するまでは住居跡というより浅い皿状の土坑と認識していた。また、H-3床面からは暗褐色土の土塊と、円筒土器下層c式に属すると思われる土器片がまぎれまぎれ出土した。細い柱穴も壁外に4本みつかった。H-4は床面中央に黄褐色土と焼土が検出され、浅い柱穴も1本みつかった。H-2とH-3の断面の観察では、H-3の方が古いことがわかった。

H-5はH-1と比べるとやや小型である。深さも調査時点で1m弱とH-1・H-2よりも数十cm浅い。平面形も、H-1が楕円形であるのに対し、円形～隅丸五角形に近い。覆土の様相もH-1・2とは異なり、黄褐色のローム質土が主体で、堅くしまっており、火山灰等の自然堆積は見られない。人為的に埋め戻されたと思われる。一方、H-1で検出された砂を埋めた小土坑と同じものがH-5の床面中央でも1基みつっている。

H-6は大部分がH-5に削平されているが、平面の輪郭や深さから、H-3・4と同類と思われる。

各住居跡の切り合いや特徴から、H-3・H-4・H-6の小型住居跡が構築された後、H-6を切ってH-5が作られたと推測され、その後大型の住居H-1・H-2が構築される際、土捨て場としてH-5の凹みが利用されたと考えられる。円筒下層式期の小型住居から大型住居への移行については、切り合い関係や出土土器型式などから『釜谷5遺跡』(「V総括」章参照:木古内町教育委員会 1995)、『釜谷遺跡』(「VIIまとめ」章参照:木古内町教育委員会 1999)においても議論されている。各住居跡から採取した炭化材の放射性炭素年代測定の結果は、全て縄文時代前期後半に相当する年代値となっている(V章-2参照)。H-3の年代が若干古めに出ており、また、H-2出土の2点、H-4出土の2点、H-5出土の2点のそれぞれ同じ遺構から採取した試料間に若干の年代差がある。

各住居跡から採取した炭化材の樹種同定結果は、H-5出土の1点がシナノキ属、H-1の3点とH-5の2点は全てクリであった。クリは当時建築材として一般的な樹種であり、シナノキ属は材のほか樹皮繊維の利用を目的としたと考えられるようである(V章-1参照)。

H-1・H-5で検出された床面中央の砂が入った小土坑(以下砂ピットと呼称)は、同時期の大型住居跡でしばしばみられることがある。木古内町内では、釜谷遺跡、釜谷5遺跡で類例があり、砂の由来につい

での分析がなされている(木古内町教育委員会 1995, 1999)。釜谷5遺跡では、平成 5(1993)年の農道整備事業にともなう発掘調査により、段丘上で複雑に重複した堅穴住居群が検出された。このうち 31 軒が縄文時代前期の住居跡であり、遺跡の主体をなしている。31 軒のうち、砂ピットをともなう住居跡が 4 軒、土坑をともなわず床面中央に砂が堆積した住居跡が 1 軒報告されている。

釜谷遺跡は平成 3(1991)年より農道整備事業にともなって 3 年度にわたり発掘調査がおこなわれた。遺跡の主体は縄文時代前期で、76 軒の堅穴住居跡と盛土遺構が検出されている。砂ピットをともなう住居跡は 19 軒あり、そのうち 6 軒には床面に土坑をともなわない砂の分布もみつまっている。

釜谷遺跡出土の砂ピットおよび砂堆積土の性質・起源については釜谷遺跡の報告の中で述べられている(紀藤 1995)。それによると近隣の沢や川、海から採取した砂と比較した結果、構成粒子の円磨度や岩石の由来などから、遺跡周辺の比較的大きな河川あるいは河川砂と海岸砂が適度に混在するような地点を起源とする可能性が指摘されている。

このほか、砂ピットに加え木古内2遺跡のH-2・H-5の溝溝や、H-1のHP-12のような床面の中央付近の浅い皿状の落ち込みなどの付属施設も、この時期の堅穴住居の特徴としてあげられる。

道南における縄文時代前期後半期の堅穴住居跡出土例は、近年北海道新幹線建設事業や高速道路建設事業にともなう大規模な発掘調査により増加しており、より詳細な特徴が解明されていくことが期待される。

(新家)

## 2 遺物

土器等 3,149 点・石器等 6,141 点、計 9,290 点が出土した。また堅穴住居跡床面の炭化物集中などについて土壌水洗を行い、炭化物をはじめ微細な自然遺物を回収した。

土器等 (図VI-1・2)

Ⅱ群 b 類(約 64%)とⅣ群 a 類(約 32%)でほとんどを占める。ほかにⅢ群 a 類・Ⅳ群 b 類・土製品(焼成粘土塊・土製円盤)が少数出土している。

Ⅱ群 b 類は円筒下層 b2 式・c 式・d1 式が含まれ、d1 式の土器片が最も多い。b2 式とみられるものは大型の堅穴住居跡 H-1 などに数点含まれ、やや薄く幅のある陸帯上に指頭圧痕が連続する。円筒下層 c 式は小型の住居跡 H-3 に個体土器があり、H-4 付近の包含層や H-5 覆土から少数出土している。器形は、口縁が緩やかに反し、緩やかな波状のものが含まれる。やや幅の広い口縁部文様帯に結束羽状縄文や捻糸文を満たしている。縄線で区画されるものがある。また幅の狭い口縁部文様帯に条痕が施されるものがある。c 式に特徴的な、捻糸文や絡条体圧痕による菱形文・山形文などのモチーフがあるものは出土しなかった。円筒下層 d1 式は当遺跡の主体であり、H-1・2・5 をはじめ各所から出土している。器形は胴部が直線的な円筒形で、口縁部が直立する。文様は比較的限定され、口縁に縄側面圧痕が 3・4 本、胴部に縦位の捻糸文と間隔の均等な横位の羽状縄文または綾絡文で構成される、いわゆる「すだれ状縄文」をなすものがほとんどである。

該期の土器が出土する遺跡は多数知られている。近辺では木古内町釜谷遺跡から多量の土器が出土しており、円筒下層 b~d1 式が主体である。c 式は口縁部がわずかに緩やかに反し、長胴の円筒形のものが多い。

Ⅳ群 a 類には天祐寺式など縄文後期初頭の土器群がある。器形は胴部が直線的なバケツ形を呈するものが多い。ただし H-1 の 28 は口縁部がややすぼまり、H-1 の 34 は胴部が強くびれる。文様は、①縄線文をもつもの、②タガ状の貼付帯が横環するもの、③縄文のみのもの、④無文のもの、⑤帯状曲沈線による区画のあるもの、がある。①は口縁部に 1 段または 2 段の縄線が横走するもののみが出土している。②も 1 段または 2 段で、貼付帯間に斜行するものもみられる。③について、口唇直下に幅の狭い無文部を

設けるものがあり、やや新しい段階のものかもしれない。

この時期のまとまった土器が出土した近辺の遺跡を数例記載する。木古内町泉沢2遺跡では、①②③のまとまりがある。①②とも、口縁部の平行する文様間に山形をなすモチーフがあるものが含まれる。松前町白坂遺跡では①③のまとまりがある。くびれのある器形も目立つ。同町寺町貝塚には①～⑤があり、特に⑤について沈線区画内に刺突が施されるものがあるなど、木古内2遺跡 H-1 の 34 や包含層の 18・19 がこれに関連するものと思われる。函館市(旧戸井町)戸井貝塚でも①～⑤が含まれ、その他帯状区画文を多用するグループがある。大木式の影響を受けた東北地方北部の土器に共通するものであり、木古内2遺跡の胴部が強くくびれる H-1 の 34 の土器がこれに関連するものと思われる。

#### 石器等

剥片石器には、石鏃・石錐・石槍・ナイフ類・つまみ付きナイフ・スクレイパー・両面調整石器がある。礫石器には磨製石斧・北海道式石冠・すり石・たたき石・扁平打製石器、軽石製品がある。

剥片石器の石材は頁岩がほとんどであり、ナイフ類の一部に黒曜石製がある。石鏃は有茎で細身のものが多く、スクレイパー類は側縁の一部に細かな調整が入るものが多い。石斧は全面磨製の撥形あるいは短冊形で、製作時の擦り切り痕が残るものがある。たたき石の敲打痕は、棒状の礫の角と、棒状あるいは扁平な礫の中央部にあるものがみられる。

扁平打製石器は、表面が(赤)褐色で内部が暗灰色を呈する扁平な安山岩が用いられているものが多い。周縁加工が施され、一側縁にせまい擦り面を部分的に設けている。長軸端部に打ち欠きが見られるものも複数ある。2分割されたものが多く、図示した 12 点中 7 点が接合したものである。住居間接合するものもある(H-1 と H-5)。

剥片は微細なものを含めさまざまな大きさのものが多数出土しているが、石器素材となるような 5cm 前後のものが目立つことが特徴である。剥片の石材は多くが頁岩で、黒曜石は H-2 周溝出土のチップなど限定的である。

#### 礫 (図VI-2、口絵2 下段)

礫片を含め 705 点が出土しているが、その 70%以上は堅穴住居跡 H-1 から出している。

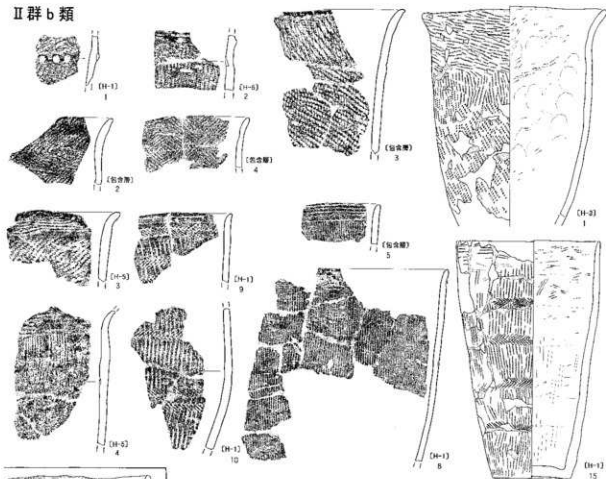
図VI-2のグラフは、H-1 における層位と礫の石材や大きさなどの関係を表したもので、現場での認識を可視化しようと試みたものである。対象とした礫は、H-1 出土の礫 517 点のうち、攪乱や細分層位不詳のもの、欠損しているものを除いた 387 点(約 75%)である。対象とした層位の出土土器は、覆土上位(3・4層)は縄文後期初頭の層で前期後半の遺物が混じり、覆土下位(5層・床面付近)は縄文前期後半の層と見ることができる。伴う石器・礫もこれらの時期に相当する。

数量では、覆土上位が 300 点以上と多い。出土石材別では、覆土上位は頁岩・珪岩が目立ち、下位は突出した数量の石材はなく凝灰岩・安山岩もある程度の割合を占める。大きさについては、覆土上位は長さ 5～6cm・幅 4cm 前後にグラフのドットが集中する一方、下位は長さ 2～17cm で全体的にばらつきがある。重量についても、覆土上位は 40～60g をピークにまとまっており、下位は 100g 以下と 150g 以上にそれぞれ分散した分布をもつ。

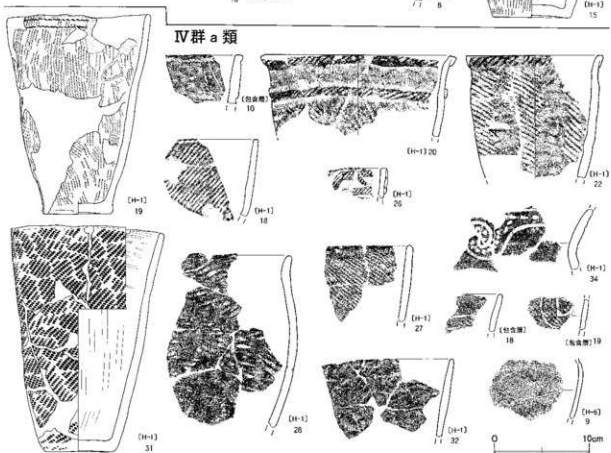
以上、縄文時代前期後半では礫の選択性は特に見られず、縄文時代後期初頭においてある程度形の整った多量の礫を前期の堅穴住居跡のくぼみに残したことを表したデータが得られた。その大きさは長さ 4～7cm・幅 3～5cm、重さ 40～80g 程度で、用いられた石材は頁岩・珪質頁岩・珪岩を主体とし、泥岩・砂岩などを含む。

(阿部)

Ⅱ群b類

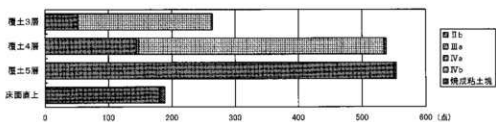


Ⅳ群a類

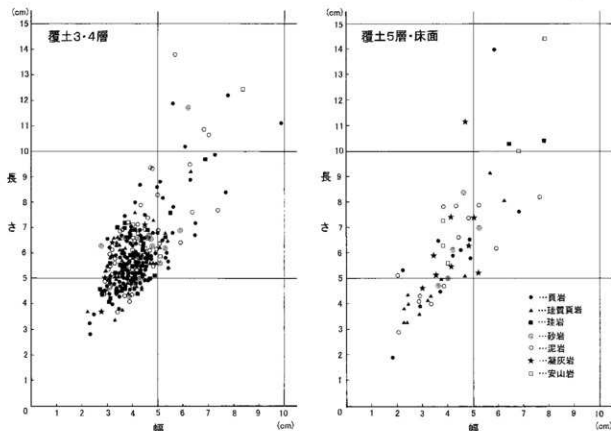
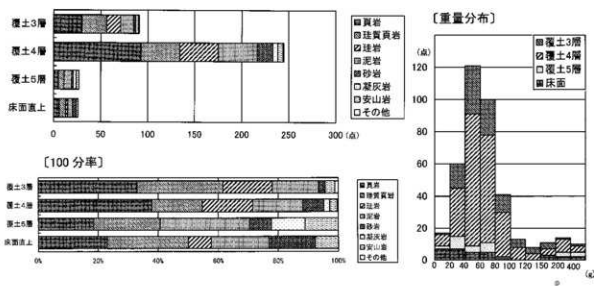


図VI-1 Ⅱ群b類・Ⅳ群a類出土土器集成

## 土器



## 礫



図VI-2 H-1 出土の礫関連データ



## 引用・参考文献

木古内町公式ホームページ、木古内町観光協会ホームページ、歴史浪漫・街道物語ホームページ(歴史浪漫・街道物語連絡協議会)

### 木古内町教育委員会

- |   |                       |
|---|-----------------------|
| 1974 『札幌遺跡』                             | 1998 『亀川 3 遺跡』        |
| 1989 『鶴岡 2 遺跡 I』                        | 1998 『泉沢 3 遺跡』        |
| 1990 『鶴岡 2 遺跡 II』                       | 1999 『釜谷遺跡』           |
| 1991 『釜谷 4 遺跡』                          | 1999 『新道 2 遺跡』        |
| 1992 『釜谷遺跡 概報』                          | 2001 『蛇内遺跡』           |
| 1993 『釜谷遺跡 概報』                          | 2002 『大釜谷 3 遺跡 概報』    |
| 1995 『釜谷遺跡 概報』                          | 2003 『大釜谷 3 遺跡』       |
| 1995 『釜谷 5 遺跡』                          | 2003 『泉沢 2 遺跡 (B 地点)』 |
| 1996 『釜谷遺跡 概報』                          | 2003 『泉沢 2 遺跡 A 地点』   |
| 1996 『亀川 2 遺跡・亀川 3 遺跡 概報』               | 2003 『新道 2 遺跡 II 北地点』 |
| 1997 『亀川 2 遺跡 II・亀川 3 遺跡 II・泉沢 3 遺跡 概報』 | 2004 『泉沢 2 遺跡 C 地点』   |
| 1997 『新道 3 遺跡』                          | 2004 『蛇内遺跡』           |
| 1998 『亀川 2 遺跡』                          |                       |

### 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

- 2008 調査年報 21  
2009 調査年報 22

- 1985 『建川 1・新道 4 遺跡』 北埋調報 33  
1985 『札幌遺跡』 北埋調報 34  
1986 『木古内町 建川 2・新道 4 遺跡』 北埋調報 43  
1987 『木古内町 新道 4 遺跡』 北埋調報 52  
2000 『八雲町シラカ 2 遺跡』 北埋調報 142  
2006 『古冠村 古冠原野 1 遺跡』 北埋調報 239  
2007 『森町 石倉 1 遺跡』 北埋調報 247  
2009 『白老町 虎杖浜 2 遺跡(5)・ボンアヨロ 4 遺跡(2)』 北埋調報 262  
2009 『千歳市 梅川 4 遺跡(2)』 北埋調報 269

- 1982 『木古内町史』 木古内町  
1995 紀藤典夫 「釜谷遺跡の砂ピットの砂の性質について」 『釜谷遺跡』 木古内町教育委員会  
1995 南北北海道考古学情報交換会『円筒土器下層式図録集』第 16 回南北北海道考古学情報交換会資料集  
1997 日本ペトロロジー学会編『土壌調査ハンドブック 改訂版』 博友社  
2002 南北北海道考古学情報交換会「情報交換 2 渡島半島における縄文時代中期末から後期初頭の土器様相」第 23 回南北北海道考古学情報交換会資料  
2003 大森司統「渡島半島の縄文時代後期前葉」第 1 回 東北・北海道の十勝内 I 式再検討「海峽土器編年研究会」  
2004 小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社  
2005 海峽土器編年研究会『第 3 回 東北・北海道の縄文時代前期末葉～中期初頭土器の課題』  
2008 茅野嘉雄「円筒下層式土器」『総覧縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション







北側地区表土除去後Ⅱ層上面検出（西→）



南側地区表土除去後Ⅱ層上面検出（南→）



南側地区調査状況（西→）



北側地区調査状況（西→）



H-1 検出（西→）



H-1 調査状況 (北→)



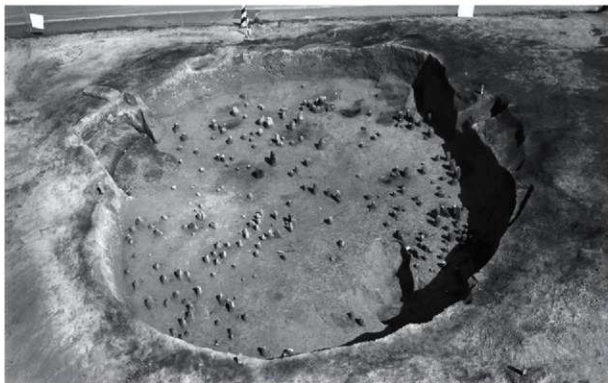
H-1 覆土4層遺物出土状況 (西→)



H-1 覆土5層遺物出土状況 (北西→)



H-1 東西セクション (北→)



H-1 床面付近遺物出土状況 (西→)



H-1HP-1 セクション (東→)



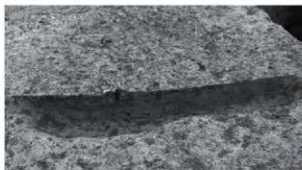
H-1HP-3 セクション (北東→)



H-1HP-7 セクション (南西→)



H-1HP-10 砂ピット (南東→)



H-1HP-12 セクション (東→)



H-1HP-13 セクション (南→)



H-1HP-17 セクション (南東→)



H-1HP-16 セクション (東→)



H-1HP-18 セクション (東→)



H-2 東西セクション (南→)



H-2 北側セクション (南東→)



H-2 南側セクション (東→)



H-2 床面検出 (南→)



H-2 周溝セクション (南西→)



H-2 周溝セクション (北→)



H-2 周溝1完掘 (南西→)



H-2 周溝2完掘 (北→)





H-3 調査状況 (東→)



H-3 床面検出 (南東→)



H-3 遺物出土状況 (北→)



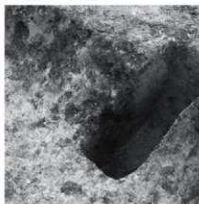
H-3 床面中央褐色土セクション (南東→)



H-3HP-1 セクション (南東→)



H-3HP-2 セクション (南東→)



H-3HP-3 セクション (南東→)



H-3HP-4 セクション (東→)



H-4 調査状況 (西→)



H-4 床面検出 (西→)



H-4HP-1 セクション (北西→)



H-4 完掘 (東→)



H-5 調査状況 (南→)





H-5 南北セクション (西→)



H-5 東西セクション西半分 (北東→)



H-5 床面検出 (南→)



H-5 周溝検出 (北西→)



H-5 周溝セクション (東→)



H-5 周溝完掘 (東→)



H-5HP-5 セクション (南→)



H-5HP-6 セクション (南→)



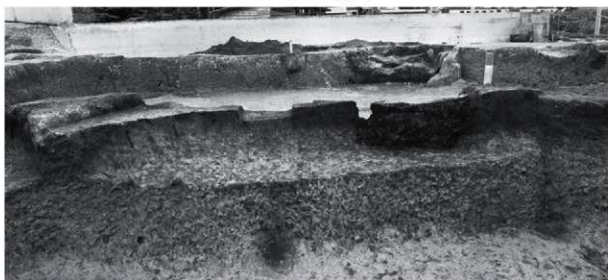
H-5HP-7 セクション (南→)



H-5HP-11 セクション (南東→)



H-6 セクション (南→)



H-6 完掘 (南→)



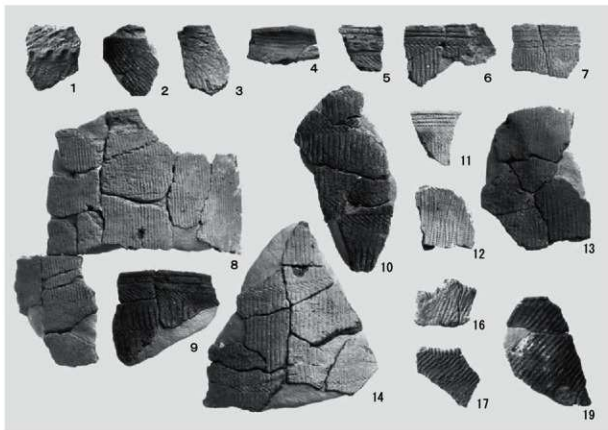
FC-1 検出 (東→)



南側地区完掘（南一）



北側地区完掘（東一）



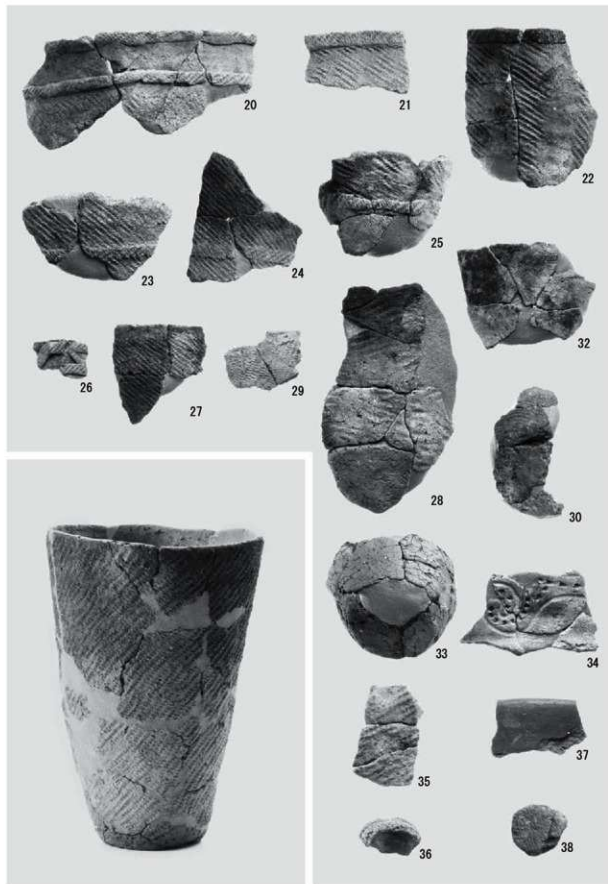
H-1出土の土器 (1)



H-1出土の復元土器 (図Ⅲ-6-15)

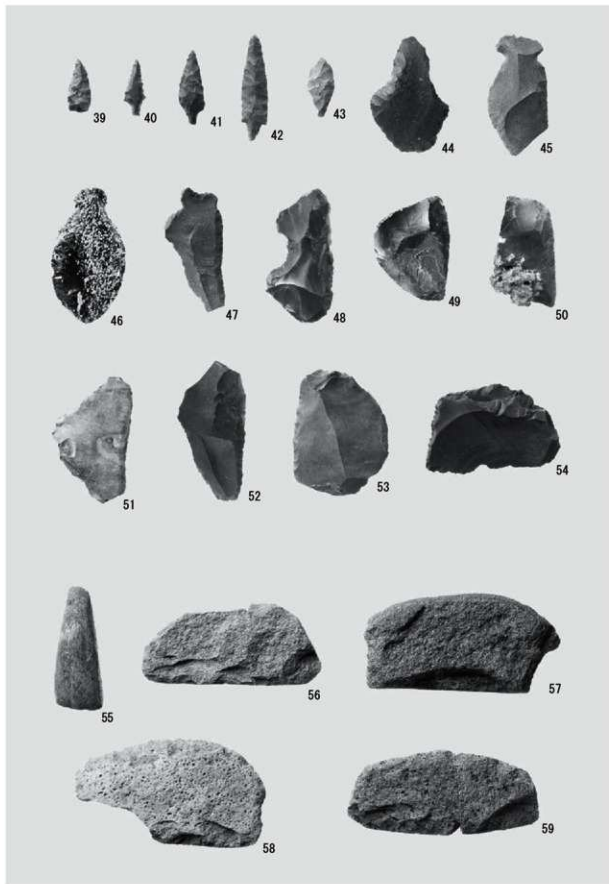


H-1出土の復元土器 (図Ⅲ-6-19)



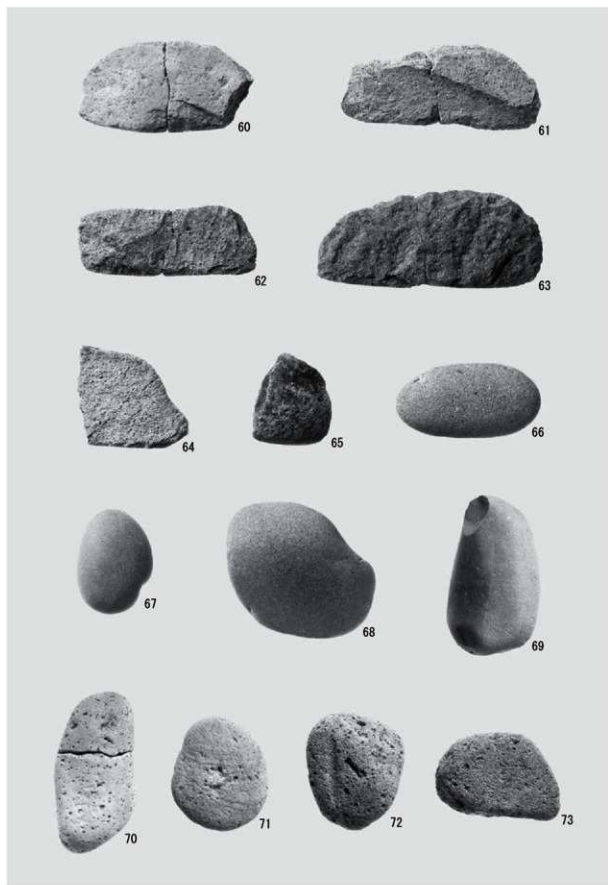
H-1出土の復元土器（図Ⅲ-7-31）

H-1出土の土器（2）



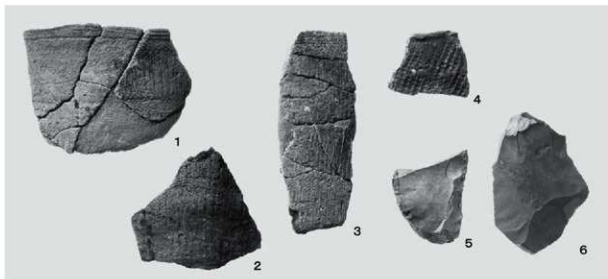
H-1出土の石器 (1)





H-1出土の石器 (2)





H-2出土の遺物



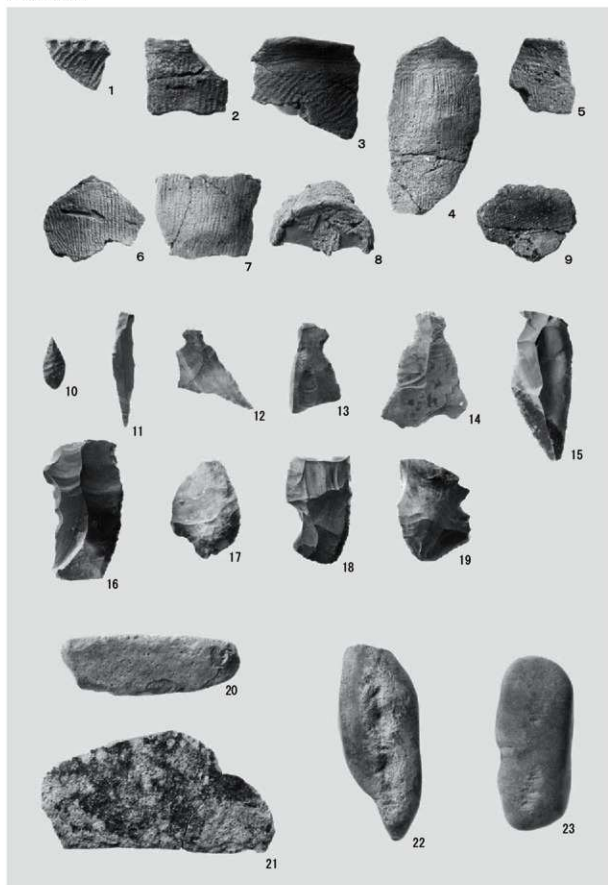
H-3出土の復元土器 (図Ⅲ-14-1)



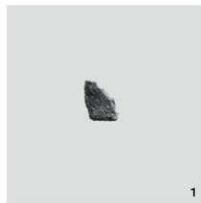
H-3出土の石器



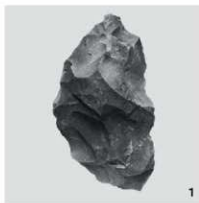
H-4出土の遺物



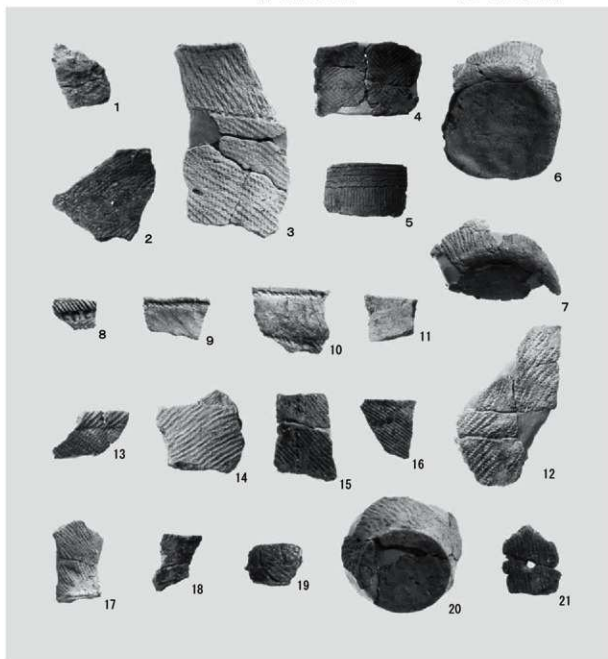
H-5出土の遺物



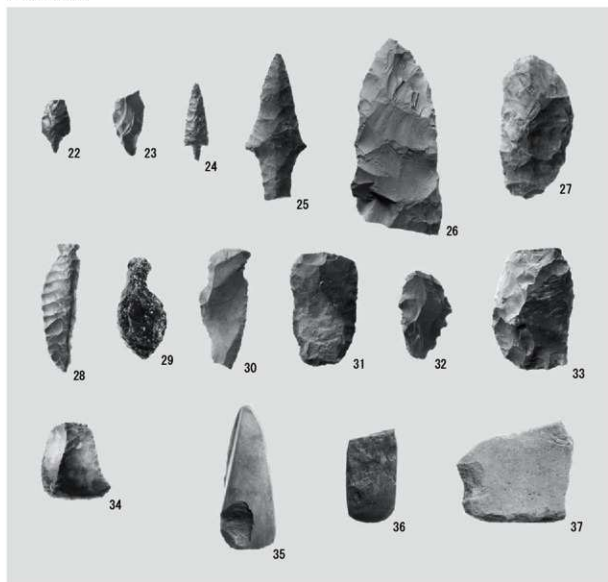
H-6出土の土器



FC-1出土の石器



包含層出土の土器



包含層出土の石器



基本土層 (東→)



H-1 南北セクション南半分 (東→)



H-1 床面付近遺物出土状況 (西→)



H-1HF-1 セクション (南→)



H-1HF-2 セクション (西→)



H-1HC-3 炭化材出土状況 (西→)



H-1HP-10 砂ピットセクション (南東→)



H-1HP-20 砂ピット (東→)



H-4HF-1 検出 (西→)



H-5HF-1 セクション (北→)



H-5HP-13 砂ピットセクション (南→)

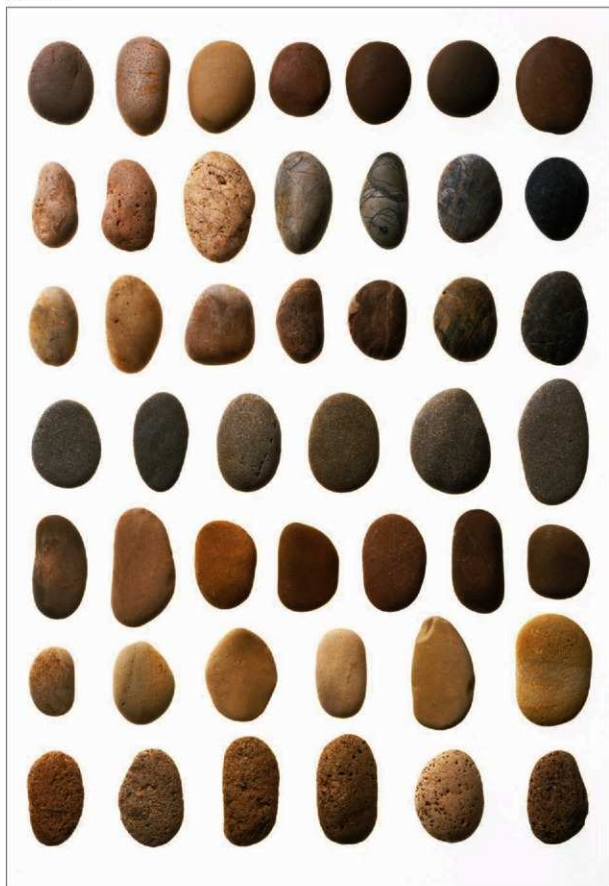


FC-1 検出 (東→)



H-5HP-13 砂ピット (南東→)





H-1出土の礫（石材別）



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	きこないちようきこないいせき							
書名	木古内町 木古内2遺跡							
副書名	北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター 調査報告書 北埋調報)							
シリーズ番号	第278集							
編著者名	新家水奈・阿部明義							
編集機関	財団法人北海道埋蔵文化財センター ( <a href="http://www.domaibun.or.jp">http://www.domaibun.or.jp</a> )							
所在地	〒069-0832北海道江別市西野幌685番地1 TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238 E-mail <a href="mailto:mail@domaibun.or.jp">mail@domaibun.or.jp</a> ホームページ <a href="http://www.domaibun.or.jp">http://www.domaibun.or.jp</a>							
発行年月日	平成23年(西暦2011)年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
きこないいせき 木古内2遺跡	ほつちゆう 北海道 きこないちよう 木古内町 あびほんちよう 字本町  456-9ほか	01334	B-05-28	45° 11'	140° 25' 20"	20100507 ~ 20100707	950面	北海道新幹線建設事業に伴う事前調査
種別	集落跡							
主な時代	縄文時代前期後半、後期初頭							
主な遺構	竪穴住居跡6軒、剥片集中1か所							
主な遺物	縄文時代前期後半(円筒土器下層c式・d式)、同後期初頭(天祐寺式ほか)の土器・石器等							
要 約								
<p>木古内2遺跡は、渡島半島南部木古内町の海岸段丘上(標高9~10m)に位置する。調査範囲北側の段丘縁辺部で縄文時代前期後半の竪穴住居跡が集中して検出された。大型のものが3軒、小型のものが3軒検出され、最も大きいものは直径約12m、深さ約1.3mを測る。住居間の切り合いや住居跡に伴う土器から、小型住居跡は円筒土器下層c式期、大型住居跡は円筒土器下層d式期の所産とみられる。また、大型住居跡の覆土には縄文時代後期初頭の遺物も多く含まれ、前期の住居が廃棄されたのち、後世の人々が大きな凹みを利用したものと思われる。</p>								



(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第278集

木古内町 <sup>き こ ない</sup> 木古内2遺跡

— 北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成23年3月25日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒069-0832 江別市西野幌685番地1  
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238  
E-mail mail@domaibun.or.jp  
URL <http://www.domaibun.or.jp>

印刷 株式会社 広報社印刷  
〒064-0808 札幌市中央区南8条西10丁目石黒ビル  
TEL (011) 532-8160 (代表) FAX (011) 532-9060

